



Title	自閉症の言語文化学-支援職による表象とA S D者のオートエスノグラフィー
Author(s)	林, 桂生
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/70678">https://doi.org/10.18910/70678</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2018 年博士学位申請論文

# 自閉症の言語文化学

——支援職による表象と ASD 者のオートエスノグラフィー——

大阪大学大学院言語文化研究科  
言語文化専攻  
林 桂生

## 目次

### 第1章 はじめに 1

#### 1.1 本研究の背景・目的 1

#### 1.2 本研究の構成 4

### 第2章 ASD（自閉症スペクトラム障害／自閉スペクトラム症）とは 6

#### 2.1 ASD（自閉症スペクトラム障害／自閉スペクトラム症）の歴史概観 6

#### 2.2 ASD（自閉症スペクトラム障害／自閉スペクトラム症）の概要 8

#### 2.3 ASD（自閉症スペクトラム障害／自閉スペクトラム症）の呼称 12

### 第3章 支援職のオリエンタリズム的思考—ナラティブと信頼関係 15

#### 3.1 支援におけるナラティブについて 15

##### 3.1.1 ナラティブ・アプローチとナラティブ・セラピー 15

##### 3.1.2 発達障害学生とナラティブ・アプローチ 18

#### 3.2 「福祉川柳事件」における支援者側の本音 23

#### 3.3 山本智子（2016）『発達障害がある人のナラティブを聴く—「あなた」の物語から学ぶ私たちのあり方—』を読む 28

##### 3.3.1 ASD 者の支援者に適用し得るオリエンタリズムとは 29

##### 3.3.2 誰に向かって語っているのか 32

##### 3.3.3 執拗な診断否定とナラティブ・アプローチの失敗 40

##### 3.3.4 医学全否定の根拠と支援者擁護の伏線 54

##### 3.3.5 施設職員の無知、心理士の無理解 61

##### 3.3.6 「私たち」には何の落ち度もないというナラティブ 68

##### 3.3.7 発達障害がわからない人のナラティブを聴く—「支援者」の物語から学ぶ私たちのあり方— 74

### 第4章 中高年 ASD 者のオートエスノグラフィー 81

#### 4.1 オートエスノグラフィーとは 81

##### 4.1.1 参与観察とエスノグラフィー 81

##### 4.1.2 自伝に過ぎないオートエスノグラフィー 85

4. 1. 3	オートエスノグラフィーの定義と問題	95
4. 2	「軽度」の ASD 者と重度の ASD 者の表象の違い	100
4. 2. 1	聴覚過敏とカクテルパーティー効果	101
4. 2. 2	「異文化」と表象される ASD 者	105
4. 3	勤労中高年 ASD 者の抱える問題	109
4. 3. 1	A さん（50 代男性当事者）のエスノグラフィー	109
4. 3. 2	C さん（40 代女性当事者）のライフストーリー	120

## 第 5 章 総括 134

5. 1	支援の問題点	134
5. 1. 1	支援職の教育の問題	134
5. 1. 2	ASD の特性把握の問題	138
5. 2	表象の問題点	145
5. 3	終わりに	150

〈参考文献〉	153
--------	-----

## 第 1 章 はじめに

### 1. 1 本研究の背景・目的

自閉症スペクトラム障害または自閉スペクトラム症 (ASD: Autism Spectrum Disorder、以下 ASD と記す) は 2013 年 5 月に公表された DSM-5 (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fifth Edition: アメリカ精神医学会「精神疾患の分類と診断の手引」第 5 版) で新たに定義された名称だが、従来の広汎性発達障害と特性がほぼ重複しており、旧診断名アスペルガー症候群・高機能自閉症・特定不能の広汎性発達障害の診断を既に受けた者も含まれる。診断基準の大きな柱は「社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的障害」と「限定された反復する様式の行動、興味、活動」<sup>1</sup> である。

アメリカの児童精神科医レオ・カナーによって、人に興味を持たず、言葉は鸚鵡返しに独り言で他者との会話が成り立ちにくい「幼児自閉症」が報告されたのが 1943 年、イギリスのヴィクター・ロッターによる 7 万 8 千人の子供を対象とする最初の疫学的研究が 1966 年、さらに 1944 年のオーストリアの小児科医ハンス・アスペルガーの論文に見られる、カナーの言う「自閉的孤立」に加えて年齢以上に大人びたきわめて知的な言語表現と時に他者に対する距離感のない馴れ馴れしささえ示す子供達の症状、いわゆるアスペルガー症候群が自閉症の娘を持つイギリスの精神科医ローナ・ウィングによって紹介されたのはようやく 1981 年のことである (フリス 2003/2009:28-34, 119-120、備瀬 2011:48-51)。このように児童を対象とした比較的新しい「発見」であるという歴史的経緯から、自閉症は子供しかいないと長い間思われていた。自閉症の成人男性をダスティン・ホフマンが演じる映画『レインマン』の日本公開は 1989 年であったが、知的障害とサヴァン症候群を伴うキム・ピークをモデルとしており、知的障害のない高機能広汎性発達障害者像とはかけ離れていた。

我が国における成人の ASD 者への理解についての時系列が伺える文献もいくつかあるが、たとえば広沢 (2010) は次のように記している。

---

<sup>1</sup> 以下、本稿で引用する診断基準の訳文は「自閉症スペクトラム (DSM-5 の診断基準)」[http://esdiscovery.jp/griffin/psycho01/dsm5\\_09.html](http://esdiscovery.jp/griffin/psycho01/dsm5_09.html) を参照している。(最終閲覧日 2018 年 3 月 27 日。)

今から 20 年以上前のことである。(…) 彼らはいつしか病棟では、「統合失調症（精神分裂病）といわれてきた人」、「躁うつ病といわれてきた人」、「人格障害といわれてきた人」となっており、筆者には彼らの入院理由も今後の対応もわからず、途方にくれる日々が続いた。(…)

今でも忘れないのは、筆者がこれらの人たちの一部に対して、初めて発達障害という診断基準をもったときの、まるで目から鱗が落ちたような感覚である。それまで既存の診断では説明のつかなかった彼らの特徴が、次々と把握できたような気がした(…。(広沢 2010:iii)

また、高橋（2011）は大学の学生センターでのカウンセリングに関して、「17 年前に学生の診断結果を通して『広汎性発達障害』（以下 PDD）や『アスペルガー障害』という概念を知って以来、この概念は筆者の学生理解に大きな手がかりを与えてくれた」（高橋 2011:148）と述べている。つまり、1980 年代、90 年代には精神科医やカウンセラーにも発達障害そのものが知られていなかったのである。その後、いわゆる大人の発達障害が書籍などを通じて人口に膾炙するようになったとは言っても、未だその研究は教育関係者によるものをはじめとして児童が主に対象とされ<sup>2</sup>、支援機関や自助会などの組織も子供やその親を中心としたものが多い。本田（2013）は医療と発達障害者支援を兼ねた新しい施設である「山梨県立こころの発達総合支援センター」を開設するにあたって、「この種の施設にありがちな『障害』と『子ども』という言葉が名称に入れなかった」とわざわざ自著で断っている（本田 2013:242-243）。確かに、少子化の昨今、子供よりも中高年の方が圧倒的に数が多いにもかかわらず、たとえば発達障害を主に扱う数少ない大学院である大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究科は、その名の通りあくまで「小児」を対象としており、その附属センターの名称も「子どものこころの発

---

<sup>2</sup> たとえば CiNii Articles (<http://ci.nii.ac.jp/>) で「ASD 児」で検索してヒットする論文数は 84 件、「ASD 者」は 14 件、「成人 ASD」は 31 件、「中高年 ASD」は 0 件である。また「自閉症児」2917 件に対して「自閉症者」は 429 件であり、ASD に加えて ADHD や LD を含むため少し範囲が広がるが、「発達障害」関連の語で検索した結果は「発達障害児」3334 件、「発達障害者」949 件、「成人発達障害」13 件、「大人の発達障害」66 件、「中高年発達障害」0 件、「高齢発達障害」2 件である（2017 年 11 月 3 日現在）。

同様に、「ASD 児」92 件、「ASD 者」14 件、「成人 ASD」33 件、「中高年 ASD」0 件、「自閉症児」2917 件、「自閉症者」434 件、「発達障害児」3375 件、「発達障害者」963 件、「成人発達障害」13 件、「大人の発達障害」90 件、「中高年発達障害」0 件、「高齢発達障害」2 件（2018 年 3 月 27 日現在）。

達研究センター」で統一されている。医学系にせよ教育学系にせよ、その他心理・福祉系であっても発達障害に関しては「子ども」、「障害児」を対象としている旨が HP 等で明記されており、要するに成人 ASD 者について専門に研究する大学・大学院は現時点では存在しないのである。

以上の点から、我が国では知的障害を伴うカナー型自閉症しか知られていなかった 1950～70 年代に生まれ育ち、障害と認識されることもなく困難を抱えながら何とか生き抜いてきた現在 40 代、50 代以上の中高年 ASD 者、特に一般就労の者に対しては研究も職場での支援もほとんど進んでいないと言える。書物・TV 等のメディアで世間への啓発のために情報を発信することができる当事者が、わずか 10 代、20 代程度で診断を受けた若者や、40 代以上であっても重度の感覚過敏等の身体的不具合を有する一部の特定の者に限られていることも情報が偏る原因となっていると思われる。

2014 年 8 月より本稿筆者が企画・主宰し、大阪大学大学院連合小児発達学研究科及び言語文化研究科の教員の協力の下で開催されている「阪大自閉症スペクトラム (ASD) カフェ／阪大自閉症サイエンスカフェ」(以下、当カフェと記す) は、一般市民が専門家を交えて話し合うサイエンスカフェの形式を取り、ASD 当事者と非当事者の相互理解を深める場を提供するものである。意見を人前で発表する機会のない市井の勤労中高年の ASD 当事者と、当事者の生の声を聴く機会のあまりない非当事者双方のニーズを満たすこともその目的であるが、当カフェの最大の目的は、できるだけ多くの一般の人々に勤労中高年 ASD 者の苦境の実態と様々な特性を周知させ、支援・配慮へとつなげるために、プライバシーに十分配慮した上で当事者の語りを公表することでもある。本稿第 4 章で当カフェの参加者の語りを勤労中高年 ASD 者のエスノグラフィー及びライフストーリー・インタビューの形式で示すことによって、職場における支援の不足の現状や生活上の問題点等を明らかにする。

出版等の機会に恵まれて情報発信できる前述の若い当事者によるもの以外は、現在既に出版されている ASD 関連の書籍には、手つかずの勤労中高年 ASD 者の語りよりも、ASD 全般の解説として医療・福祉関係者によって当事者の声が紹介されたものが圧倒的に多い。その中には十一元三・杉山登志郎・本田秀夫・備瀬哲弘医師など<sup>3</sup>による良心的ですぐれ

---

<sup>3</sup> 十一元三 (といちもとみ) は多数の論文の発表の他、2005 年の広汎性発達障害の少年による教師刺殺事件を追った佐藤幹夫『十七歳の自閉症裁判 寝屋川事件の遺したもの』(岩波書店、2010) に、鑑定医として発達障害の行動特性を詳細に解説した公判における

た文献もあるものの、医学的知見を無視して健常者の視点のみで ASD 者について論じた偏った記述のものも存在する。本稿第 3 章第 3 節では後者の偏った記述に終始する文献に焦点を当て、特に「発達障害がある人のナラティブ」と銘打っておきながら、現代のベッテルハイムかニコ・ティンバーゲン<sup>4</sup>かと思紛うような問題の散見される「支援職のナラティブ」を中心に支援者による「表象」を分析し、今後の ASD 啓発のあり方について考察する。その目的は主に、支援職すなわち障害当事者に寄り添い、理解・共感するよう努力すべきであるはずの職に就いている非当事者の ASD のとらえ方を示し、ASD 者を取り巻く現状の改善への提言を行うことにある。その現状に対する理解を得る手法として、本稿筆者が ASD 当事者である利点を生かすことのできるオートエスノグラフィーを採用する。

## 1.2 本研究の構成

第 1 章では上述のように本研究の動機にあたる背景を述べている。第 2 章では発達障害及び ASD（自閉症スペクトラム障害／自閉スペクトラム症）の歴史・概要・呼称等について解説する。

第 3 章で、支援職による ASD 者の「表象」を山本智子著『発達障害がある人のナラティブを聴く』（ミネルヴァ書房、2016）を例に取って考察するが、ここで核となる「ナラティブ」と支援者・被支援者間の「信頼関係」についてより深く論じるために、まずナラティブ及びナラティブ・アプローチとナラティブ・セラピーの概要を示し、それから支援のとらえ方に共通点があるものとして 1993 年の「福祉川柳事件」を概観する。その後、本論に入る。

本論文のサブタイトルは「支援職による表象と ASD 者のオートエスノグラフィー」であるが、この章から、「支援職による表象」の論考だけでなく、「ASD 者のオートエスノグラフィー」の実践となる。すなわち、山本智子の著書等に対する問題点の指摘は、視覚優位、軽度の聴覚過敏、細やかなコミュニケーションの困難等の障害特性を有する勤労中高

---

証言が数十ページに渡って収録されている。杉山登志郎には『発達障害のいま』（講談社、2011）など、本田秀夫には『自閉症スペクトラム 10 人に 1 人が抱える「生きづらさ」の正体』（SB 新書、2013）など、備瀬哲弘には『発達障害でつまづく人、うまくいく人』（ワニブックス、2011）などそれぞれ多数の著書がある。

<sup>4</sup> 2.1 参照。



年 ASD 者である本稿筆者の視点によるものである。ASD と一口に言ってもその障害特性は様々であり、筆者と異なる特性を持つ ASD 者とは本稿で取り上げる諸文献に関する批判点は必ずしも一致しないと思われる。本稿で試みるのはあくまで一 ASD 者による支援職の問題点の指摘であり、ASD 者がすべてこのように考え、感じるわけではないことを特記しておく。

第 4 章において改めてオートエスノグラフィーの学術的な解説・概観を行い、ASD カフェで得られた参加者の発言を中心に勤労中高年 ASD 者のエスノグラフィー及びライフストーリー・インタビューの枠組みで考察を行う。第 5 章は総括とする。

## 第 2 章 ASD（自閉症スペクトラム障害／自閉スペクトラム症）とは

### 2.1 ASD（自閉症スペクトラム障害／自閉スペクトラム症）の歴史概観

オイゲン・ブローラー（Bleuler, E.）は 1910 年代に、精神分裂病者における人との交わりの世界から自己の世界への引きこもりの様態を表すために、ギリシャ語で「自己」を意味する *autos* という語に由来する「自閉」の語を用いた。1943 年、アメリカの児童精神科医レオ・カナー（Kanner, L.）は、「人と状況に普通の方法で関わりをもてない」ことを病態識別的基本的障害とする 11 例の子供達（男児 8 名、女児 3 名）を「情動的交流の自閉的障害」（Autistic Disturbances of Affective Contact）という論文で紹介した。これらの症例は、「初めに存在していた関係からの離脱ではなく、また以前存在していた参加からの『ひきこもり』でも」なく、「初めから、外からやってくるものはなるべく無視してかえりみず、締め出そうとする極端な自閉的な孤立」（カナー 1943/1978:44）を示しているとされる。言語に関しては、「自発的構文の欠如と反響的言語構成」により、話しかけてきた相手の言葉を繰り返すため人称代名詞が逆転したまま固定され、6 歳頃を過ぎてからようやく自分のことを一人称で、相手のことを二人称で呼ぶようになる例もある（前掲:47）。また、彼らは大きな音や動くものは孤立を脅かすために恐れ、自分の動作や日常の環境に対しては「同一性保持への強迫的願望に支配されていて」、変化や不完全さは不快感と極度の欲求不満を引き起こす（前掲:48,50）。古典的自閉症あるいはカナー型自閉症と呼ばれるものである。

ほぼ同時期の 1944 年にオーストリアの小児科医ハンス・アスペルガー（Asperger, H.）は、4 人の少年の例を考察した「小児期の自閉的精神病質」（Die Autistischen Psychopathen im Kindesalter）という論文で以下のように記している。

自閉的パーソナリティ類型がひとつの現実的存在であることを明確にする決め手のひとつは、生涯にわたる永続性です。（…）もちろん、知能やパーソナリティは発達していき、発達が進むにつれ、特定の特徴が支配的になったり後退したりするので、姿を見せる問題はかなり変化します。にもかかわらず、問題の本質的部分は変わりません。幼児期のうちは、簡単な実用的技能の習得と集団適応とに困難があります。この困難をもたらすのと同じ障害が、学童期には学習と社会行動の問題、青年期には就

職と職業行動上の問題、そして成人期には対人関係と夫婦間でのトラブルを引き起こします。(アスペルガー 1944/1996:137)

現代になっても変わらぬ ASD 児・者が直面する学童期・青年期・成人期の問題を既にここまで適確に指摘していたにもかかわらず、アスペルガーの論文は第二次大戦中にドイツ語で刊行されたためほとんど注目を得られず、児童の観察に終始したカナーの論文のみがよく知られることとなった。両者ともにブロイラーの語を借用しているが、両者の間に直接の交流はなかったという(フリス 1991/1996:23-26、2003/2009:28-32,38)。

そして、「1943 年から 1980 年代の間は、古典的な自閉症の子どもは一般の子どもとは大きく異なっており、まれで、重い障害があると見られていた」(バロン=コーエン 2008/2011:32) のであり、1966 年にイギリスのヴィクター・ロッターにより自閉症の最初の疫学的研究が行われたが、これは 8 歳から 10 歳の子供 7 万 8 千人を対象とする大規模なものでありながら、調査の前提がきわめて不十分だった。すなわち、そのターゲットは「人から孤立的で細かな儀式的行動やこだわりをもつ子どもたち」とされており、「孤立性は、低い IQ や単純な反復運動との結びつきが強く、それに対して細かなこだわりや儀式的行動は、逆に高い IQ との結びつきが強い」ため、孤立性と細かな儀式的行動やこだわりの両方の条件を満たす子供はわずかに 35 人、1 万人に対して 4.5 人の有病率という低い数値になってしまった。「知的には正常で、孤立的ではなくても社会性の欠陥と細かな儀式的行動のある子どもたちの存在に人々が気づいてくるには、さらに約二〇年の歳月の経過を必要とした」のである(フリス 2003/2009:119-120)。

現代になって一見増加したように見える人数について杉山(2011)は、上述のロッターの疫学調査と、21 世紀に自閉症が 1 万人に 40 人から 80 人、自閉症スペクトラム障害が 100 人から 200 人と全世界で報告されるようになった事実との差は、診断基準の相違も原因であると指摘している。その嚆矢は我が国の 1 歳 6 カ月児検診であるという。ウィングがアスペルガー症候群を紹介したのとほぼ同時期である。(杉山 2011:28-30)

カナーの時代に戻ると、1949 年、カナーは自閉症が「感情的疎通の生来的自閉的障害」とであると明言していたにもかかわらず、「冷蔵庫マザー」説を自閉症に適用し、自閉症は母親の愛情不足が原因であると示唆する発言を行った。その見解を強力に支持して 1960 年代に自閉症児の「家庭隔離」という治療形態を広めたのが、『自閉症・うつろな砦』(みすず書房、1973)等の著書で知られるブルーノ・ベッテルハイムである。

1969年にカナーは「冷蔵庫マザー」説を自ら否定し、1970年代後半にはマイケル・ラターらの研究によって自閉症には遺伝的な基盤があることが確認された。それにもかかわらず、ベッテルハイムは1990年に亡くなるまで「冷蔵庫マザー」説に固執し、動物行動学者でノーベル医学生理学賞を受賞したニコ・ティンバーゲンも、1980年代に至るまでベッテルハイムを支持する書物を著している（バロン＝コーエン 2008/2011:30-31）。

1996年、ウィングが「自閉症スペクトラム障害」(ASD: Autistic Spectrum Disorder)という概念を提唱する。このスペクトラム(spectrum)は一般に「連続体」と訳され、一つの現象の中にいくつかの要素が含まれているとする解釈である。この語によって、自閉症は軽症から重症まで、また知的発達遅滞が重度のものから知的レベルが非常に高いものまで様々であり、しかも連続した一つのものであることが表されることとなった。この概念のおかげで必要な福祉サポートを受けられる対象が格段に広がったことが、ウィングの最大の功績とも言われている（備瀬 2009:27-28）。

## 2.2 ASD（自閉症スペクトラム障害／自閉スペクトラム症）の概要

レオ・カナーが発見したいわゆる古典的自閉症、すなわちカナー型自閉症の陰に埋もれていたハンス・アスペルガーの業績をローナ・ウィングが論文で取り上げたのは1981年であるが、世界的にそれを広めることになったウタ・フリスによる著書 *Autism and Asperger Syndrome* の発表は1991年、アスペルガー症候群の診断基準が ICD-10 (International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems, Tenth Revision: 世界保健機関「疾病及び関連保健問題の国際統計分類」第10版) に初めて加わったのは1992年、DSM-IVに掲載されたのは1994年である。

発達障害／ASDの概念・症状・問題について、DSM-IVの診断基準にはウィングの「三つ組」と呼ばれる三つの行動特性が含まれていた。すなわち、(1) 社会的相互交渉の障害、(2) コミュニケーションの障害、(3) 想像力の障害及びその結果もたらされる反復的行動パターンの三点である（ウィング 1996/1998:122）。DSM-5では、1) 社会的コミュニケーション・対人的相互作用における障害、2) 限定された反復的行動・活動様式のように「三つ組」の(1)、(2)が一つにまとめられている。

これらの特徴として、1)の社会的コミュニケーションの障害に関しては、「空気が読めない」と言われ、自分の所属する組織や地域の「暗黙の了解」や冠婚葬祭のマナーなどが

わからない、話している相手と視線を合わせられない、言葉を文字通りそのまま真に受けられることが多く冗談が通じない、遠回しな言い方が理解できない、本音と建前を使い分けられないため嘘がつけない、頭に浮かんだことを口に出さずにいられないといった点が指摘される。2) は想像力のズレによる常同反復・こだわりを含み、「特定のものへの強い興味や順番、位置へのこだわり」があるため、突然予定が変更になるということに納得できない、いったん好きなことを始めると明日の予定にかかわりなくやめられなくなる、たとえばやらないと自分にとって不利になることであっても納得のいかないことはできない、といった点が挙げられる（備瀬 2011:38-41）。

想像力に関わる事例として、富山大学のトータル・コミュニケーション支援部門(TCSI)が紹介しているものを挙げておく。彼らが支援している発達障害学生は「支援者の立場や状況を必要以上に敏感に感じ取っている」ことが多く、ある学生は「相手が考えていることが瞬時に伝わってくるので、自分の思っていることとコンフリクトを起こし、結果的に固まってしまい判断できなくなってしまう」、「つまり、相手の態度や表情で、相手の思いが瞬時に通底してくる」（西村 2010:207）という。

杉山登志郎は「人の気持ちが読めない」という特性を次のように説明している。

（…）誤解のないように強調したいのは、人の気持ちが読めないということと、他者配慮ができないということは、別ものということである。（…）代償的に人の気持ちに対して読みにくいぶん、逆にすごく気にするようになるのが常である。すると人の意図や感情に過敏に反応をしてしまうということが逆にもちあがってくる。（杉山 2011:232）

後述するが、ある発達障害者支援センターでは、「当事者は、面談を通して自分を肯定的に理解してくれているかどうかにとっても敏感に反応することが多い。最も大切なのは、淡々としながら肯定的な態度で接し、興味深く傾聴する姿勢である」（高木 2014:304）、同様に相談支援専門員の立場から、「初回の面談時にマイナスのイメージを抱かせてしまうと、その後の支援が滞ってしまうのも発達障害をもつ人たちの特徴であり、慎重な対応が求められる」（近藤他 2014:296）といった発達障害の特性に配慮した提言がなされている。ASD 者の中には、「人の気持ちが読めない」からこそ、「人の意図や感情に過敏に反応をしてしまう」者が一定数存在するのである。

「論理的な予測はできる。場の雰囲気を読んでいるのではない。広汎性発達障害の人は、論理と経験から人の心を読むことはできる」（池谷編 2013:262、引用者注：同書で引用されている十一元三医師の言葉）のであり、脳の右半球の特定の部位は、定型発達者では他者の意図の推論にのみ用いられるのに対し、ASD 者ではあらゆる推論において盛んに活動が見られる（米田他 2014:322）。文字通り全力で考え、反応していると言える。アスペルガー自身も以下のように述べている。

（…）健常児が必要な社会的習慣を身につけるのは、意識的に気づいてではなく、他から本能的に学ぶということです。こうした本能的関わりが、自閉症の子供たちは阻害されているのです。端的に言えば、この子供たちは知的な<sup>オートマタ</sup>機械人形なのです。社会的適応も、知性を媒介としなければ生じてきません。実際に、彼らはすべてを知性を媒介として学習しなければなりません。（アスペルガー 1944/1996:120）

つまり ASD における「想像力の障害」は、特に児童の例がよく紹介される、言葉を字義通り受け取る語用障害も含まれるが、単に想像あるいは理解ができないことや能力が足りないことだけを意味するのではない。瞬時に想像しすぎる、あるいは過剰に気を遣いすぎるがためにかえって咄嗟に適切な行動に結びつかず、その結果、コミュニケーションに難ありと評価されてしまう例も存在するのである。特に知能の高い ASD 者の場合、直観で想像する、あるいは察することができないことから来る他者の意図に対する過敏さとそれに伴う過剰な判断、しかも直観よりワンテンポ遅れた知性による判断が想像力のズレにつながり、他者からの評価を下げるという悪循環に陥るものと推測される。

富山大 TCSI が挙げている別のある学生は、いわゆる視覚優位であると思われるが、「一度見たものをそのまま視覚的に再現できるという特異な能力」があり、「過去の嫌な体験をまざまざと再現してしまい、そのたびに嫌な思いや怒りを再体験してきた」ために、1 年以上前の友人とのトラブルについて執拗に怒りを表明するなど、「過去の嫌な体験を繰り返して訴えたり、怒りが持続したりする、いわゆる『こだわり』を感じさせる」（斎藤 2010:26）。このようにずば抜けた視覚による記憶力のために「嫌なことでもすべて覚えており、まざまざと視覚的に再現される」（前掲:28）フラッシュバックに悩まされ、日常生活に支障が出るほどの生きづらさを抱えている例はきわめて深刻である。他人との感情的な交流がほぼ不可能であるにもかかわらず周囲の理解に恵まれ、「一度見たものをそのまま視覚的に再

現できる」映像記憶という特性を自分の関心事に最大限に生かして社会的に高い地位に就いたテンプル・グランディンのような好例は少ない。フラッシュバックはトラウマから生じ、このトラウマとなる記憶が二か月間を過ぎても自動的に想起され、「生活の縮小が生じ、未来を考えることができないなど、明らかな日常生活におけるマイナスが生じている状態が心的外傷後ストレス障害（Post-Traumatic Stress Disorder: PTSD）である」（杉山 2011:91）とされるが、視覚優位とこだわりの程度が強い ASD 者は常に PTSD の状態にあるようなものだと考えられる。

さらに、DSM-5 において初めて、従来から言われていた「感覚過敏」<sup>5</sup>について明記されている。その診断基準は以下の通りである。

以下の A,B,C,D を満たしていること。

A：社会的コミュニケーションおよび相互関係における持続的障害（以下の 3 点で示される）

1. 社会的・情緒的な相互関係の障害。
2. 他者との交流に用いられる非言語的コミュニケーション（ノンバーバル・コミュニケーション）の障害。
3. 年齢相応の対人関係性の発達や維持の障害。

B：限定された反復する様式の行動、興味、活動（以下の 2 点以上の特徴で示される）

1. 常同的で反復的な運動動作や物体の使用、あるいは話し方。
2. 同一性へのこだわり、日常動作への融通の効かない執着、言語・非言語上の儀式的な行動パターン。
3. 集中度・焦点づけが異常に強くて限定的であり、固定された興味がある。
4. 感覚入力に対する敏感性あるいは鈍感性、あるいは感覚に関する環境に対する普通以上の関心。

C：症状は発達早期の段階で必ず出現するが、後になって明らかになるものもある。

D：症状は社会や職業その他の重要な機能に重大な障害を引き起こしている。<sup>6</sup>

---

<sup>5</sup> 感覚過敏の症状の激烈さについてはドナ・ウィリアムズの自伝『自閉症だったわたしへ』（1992/1993）でも詳細に述べられている。

<sup>6</sup> 注 1 参照。

備瀬（2011）も自著で『感覚の偏り』のため、ストレスを感じる人たち」という章を設け、以下の点を指摘している。（箇条書きは本稿筆者による。各項目の表現はほぼ引用文献の本文の通り。）

視覚：光がとてもまぶしく感じる

聴覚：周りのざわめきなどがすごく耳障りな音に聞こえてくる／目の前の人の話も、周囲の雑音も同じ刺激となって、耳に飛び込んでくる

触覚：人に触られるのを極端にイヤがる／セーターのチクチク感がダメ／タオル地でなければ肌が受けつけない

臭覚：人の香水の匂いを嗅ぐと脱力する／季節ごとの花の匂いに参ってしまう

味覚：偏食が多い、など（備瀬 2011:136-137）

また、「寒暖の差がつらく感じる」という項では、「暑さに弱く、寒さに強い人が多く見られ」と指摘されている。感覚過敏とは多少異なるが、「感情の揺れ幅や驚愕反応がとても大きい」点も挙げられ、「予期せぬ刺激を受けた際の反応がとても大きく偏っている人」がいることにも言及されている（前掲:140-141）。感覚過敏はいずれも、日常生活に支障をきたし、本人がその生活上の困難を自覚している時に「障害」として問題となる。確かに、全く自覚することができずに周囲に負担や迷惑をかける当事者も中にはいるが、ここで挙げた例のように、本来、当事者は様々な困りごとを抱えて苦しんでいるのだということに改めて留意すべきである。

## 2.3 ASD（自閉症スペクトラム障害／自閉スペクトラム症）の呼称

我が国の発達障害者支援法（平成 16 年 12 月 10 日法律第 167 号）における「発達障害」の定義は以下の通りである。

第二条 この法律において「発達障害」とは、自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるものをいう。



文部科学省初等中等教育局特別支援教育課は、平成 19（2007）年 3 月 15 日付の『『発達障害』の用語の使用について』<sup>7</sup>において、「当課の文書で使用する用語については、原則として『発達障害』と表記」し、「その用語の示す障害の範囲は、発達障害者支援法の定義による」が、ここで言う『『発達障害』の範囲は、以前から『LD、ADHD、高機能自閉症等』と表現していた障害の範囲と比較すると、高機能のみならず自閉症全般を含むなどより広いものとなる」と解説を加えている。

しかし、広汎性発達障害（PDD：Pervasive Developmental Disorders）についての分類は長らく、DSM-IV-TR（アメリカ精神医学会「精神疾患の分類と診断の手引」第 4 版テキスト改訂版）によれば、「自閉性障害・レット障害・小児期崩壊障害・アスペルガー障害・特定不能の広汎性発達障害（非定型自閉症を含む）」であり、また、ICD-10 によれば、「小児自閉症・レット症候群・他の小児崩壊性障害・精神遅滞と常同運動を伴う過動性障害・アスペルガー症候群・非定型自閉症・他の広汎性発達障害・広汎性発達障害、特定不能なもの」であった。

2013 年 5 月に公表された DSM-5 による ASD は、前述のように従来この広汎性発達障害のうちアスペルガー症候群・高機能自閉症・特定不能の広汎性発達障害をほぼ含むと考えられる。つまり、発達障害者支援法で言うところの「発達障害」に数えられる学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害（ADHD）はもともと DSM においても ICD においても広汎性発達障害とは別の区分であるので、ASD には含まれない。

本稿の主眼の自閉症スペクトラム障害については「ASD」と表記するが、引用文献自体が「発達障害」（「発達障害」「発達障がい」を含む）を扱っている場合は「発達障害」の語を用いる。ADHD を併発している ASD の者も便宜上「ASD 者」とする。「ASD」、「発達障害」と対比した場合のいわゆる健常（者）を「定型発達（者）」と呼ぶこととする。また、統合失調症に触れる際に、「精神分裂病」という病名は 2002 年に日本精神神経学会により「統合失調症」に改められたが、一部の引用文献の記述に沿って旧病名を用いる場合もある。

自閉症スペクトラム障害と自閉スペクトラム症という二通りの呼称については、「DSM-5 病名・用語翻訳ガイドライン（初版）」を作成した日本精神神経学会精神科病名検討連絡

---

<sup>7</sup> [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/main/002.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/002.htm)（最終閲覧日 2018 年 3 月 27 日。）

会によると次の通りである<sup>8</sup>。

児童青年期の疾患では、病名に障害とつくことは、児童や親に大きな衝撃をあたえるため、「障害」を「症」に変えることが提案された。(…) **disorder** を「障害」とすると、**disability** の「障害（碍）」と混同され、しかも“不可逆的な状態にある”との誤解を生じることもあるので、**DSM-5** の全病名で、「障害」を「症」に変えた方がよいとする意見も少なくなかった。その一方で、「症」とすることは過剰診断・過剰治療につながる可能性があるなどの反対の意見もあり、専門学会の要望の強かった児童青年期の疾患と不安症およびその一部の関連疾患に限り変えることにした。ただし、「症」と変えた場合、および **DSM-IV** などから引き継がれた疾患概念で旧病名がある程度普及して用いられている場合には、新たに提案する病名の横に旧病名をスラッシュで併記することにした。

同ガイドラインでは「**Autism Spectrum Disorder** 自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害」のように記されている。また、**DSM-5** の公表以降の受診者のうち **ASD** より症状の軽い者に適用される「**Social (Pragmatic) Communication Disorder** 社会的（語用論的）コミュニケーション症／社会的（語用論的）コミュニケーション障害」や「**Unspecified Communication Disorder** 特定不能のコミュニケーション症／特定不能のコミュニケーション障害」という診断名が加えられているが、ここでは扱わない。

本稿では、アスペルガー症候群を含む「自閉症スペクトラム」という概念を用いてローナ・ウィングが広く紹介したおかげで重度の古典的自閉症以外の当事者にも光が当てられ、その「自閉症スペクトラム」の呼び名がようやく我が国にも定着しつつあるという経緯を重視し、「自閉スペクトラム症」ではなく、あくまでも当初広まった「自閉症スペクトラム」及びこの語を含む「自閉症スペクトラム障害」の表記を用いる。

---

<sup>8</sup> 以下、同ガイドラインについては、引用文もともに次の URL を参照した。  
[https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/dsm-5\\_guideline.pdf](https://www.jspn.or.jp/uploads/uploads/files/activity/dsm-5_guideline.pdf)（最終閲覧日 2018 年 3 月 27 日。原文の「,」「.」「/」はそれぞれ「,」「.」「/」に改めた。）

### 第3章 支援職のオリエンタリズム的思考—ナラティブと信頼関係

難しいですね。発達障害の人は難しいです。今まで重度の知的障害の人の支援では感じたことのない感情が湧き上がってきます。言葉は通じ合っているはずなのに、どうしてもわかり合えないですね。(…)一生懸命支援しているつもりなのに、それをちっともわかってくれないというか。本人に少し自分や周囲を見る力があれば、ずいぶんと違うんでしょうが。まったく、見えていないところがありますね。他人ばかり責めて、自分の悪いところが見えていない。こんなことを言ったらだめなんでしょうが、吉村さんがじつは「障がい」ではなくて、ただの「性格の悪い人」だったら、私はぜったいにかかわりたくないと思ってしまいます。(山本 2016:74)

笹谷さんは吉村さんのことで私に相談をするときには、必ず何度も繰り返し見てきた吉村さんのアセスメントの結果を前に置きます。笹谷さんの話を聴きながら、私にはそれがあたかも笹谷さんを守る「何か」のように見えることがあります。笹谷さんにとってそのアセスメントの結果が、「吉村さんは障がいだから仕方ない」と自分に言い聞かせるお守りのように見えるのです。(前掲:75)

#### 3.1 支援におけるナラティブについて

##### 3.1.1 ナラティブ・アプローチとナラティブ・セラピー

発達障害者の負の印象だけを強めるように固定した「知識」を読者に植えつける、すなわち発達障害または発達障害者を「支配し再構成し威圧する」(サイード 1978/1993a:21)に等しい文献を、発達障害者を「支援」するはずの者がものすることの重大性を明らかにすることが本章の狙いである。ここで主として論じる山本智子(2016)『発達障害がある人のナラティブを聴く—「あなた」の物語から学ぶ私たちのあり方—』(以下、当該文献と記す)が「ナラティブ」を扱っているので、本節ではナラティブについて触れておく。

本稿筆者も、第1回 ASD カフェ開催前は、現実に関りごとを抱えている ASD 当事者にありのままの状況を語ってもらうことによって、ナラティブ・アプローチやナラティブ・セラピーに似た効果が得られるのではないかと予想していた。社会学者の野口裕二(2002、

2005) によれば、ナラティヴ・アプローチは「『ナラティヴ（語り、物語）』という形式を手がかりにしてなんらかの現実接近していく方法」（野口 2005:8）であり、そこでのナラティヴとは、「出来事や経験の具体性や個別性を重要な契機にしてそれらを順序立てることで成り立つ言明の一形式」、我々の「生きる現実を組織化するためのひとつの重要な形式」である（前掲:6）。ナラティヴ・セラピーにおいては、信頼できるセラピストに対してクライアントはそれまで「明確に語ったことのなかった経験や出来事」を語り、そこに思わぬ意味を見出したり、無関係だと思っていた出来事が関係づけられたりして、「それまで確固として動かないものにしか見えなかった『現実』が流動し始める」（前掲:64）。AA（Alcoholics Anonymous）や断酒会などのセルフヘルプ・グループで繰り返し語られる飲酒体験や入院体験、現在の悩みなどは、ナラティヴ・アプローチにおいては「まさしくそのひとの人生物語であり自己物語」で、「このような自己物語が、彼ら自身の自己をかたちづくっている」（野口 2002:40-41）のである。

だが、ASD カフェの回を重ねるにつれ、本稿筆者は ASD 者にとってナラティヴは、以下に概説するナラティヴ・セラピーにおける「書きかえ療法」（エプストン他 1992/1997:139-182）や、ナラティヴ・アプローチの「物語の再構成」（野口 2002:153-156）といった機能は必ずしも果たし得ないのではないかと考えるに至った。

「書きかえ療法」が意図するところは、以下の三つを通してクライアントの悩みの解決の援助をすること、それは（1）その人の人生や人間関係を貧しいものにしている知識や物語から、その人自身が〈離れられるよう〉手助けをする、（2）その人が服従を余儀なくされている自己や人間関係に〈対抗できるよう〉援助する、そして（3）その人にとって望ましい結果をもたらすオルタナティヴな知見またはストーリーに沿った方向で、自分の人生を〈書きかえられるよう〉励ます。（エプストン他 1992/1997:166-167）

上記引用文の前後には父親から虐待を受けてきた少女とセラピストのデービッド・エプストンが共同して問題の「〈外在化〉」、すなわち娘の「人間性を破壊しようとする父親の働き」（前掲:155）や「彼の規律への服従」（前掲:154）などの「父親の書いたストーリー」を「本人から引き離して客観化してみる」（前掲:167）ことによって成功する過程が描かれている。同書の注釈によると、外在化とは「自分を困らせている問題にクライアントが距

離を置き、客観化し、時には擬人化できるよう導くセラピーの方法」であり、「問題の外在化によってクライアントは、自分を支配してきたドミナント・ストーリーから自分を切り離して考えられるように」なり、「そうすることで、これまで光があたりなかった大切な人生体験の側面に初めて気づく」のである（前掲:176-177）。

一方、コミュニケーション障害と言われる困難や定型発達者とは異なる視点を有するがゆえに 30 年、40 年と疎外感を味わってきた中高年 ASD 者は、もはや定型発達者に半ば呆れ、切実さを苦笑に紛らし、ただ現実をその映像記憶に従って饒舌に、あるいはぼつりぼつりと写し取るだけである。映像記憶や視覚優位といった障害特性は 2.2 で述べたようにトラウマやフラッシュバックの元となり得ることから決して無視できないものであり、目の前で起こったこと、定型発達者からの誤解に基づいた一方的な叱責の様子などを細かく描写する ASD 者の語りには、その理不尽さに対する不満は時折遠慮がちに差し挟まれるものの、彼らがどのように語ろうとも、「現実」を支配する定型発達の文化は生来その着眼点やこだわる点異なる ASD 者にとっては結局「異文化」であり、「現実」は理解不能で不便なまま確固として存在し続ける。さらに問題なのはトラウマとなった過去の出来事だけではなく、支援職を含む異文化の住人が支配する「現実」が現在進行形で ASD 者に害をもたらし得るという点である。

従って、ASD 者の困難を軽減するのは主に ASD 者の「外」の出来事である異文化の変容であり、その変容に必要なのは障害当事者である ASD 者の「物語の書きかえ」というよりは、定型発達者側の気づきと適切な配慮である。だが、現実にはいっこうにそうした啓発は広まらず、発達障害や ASD に対する一般の理解はまだ浅い。ASD 者自身の語りが世間に伝わるどころか、第 1 章から述べているように 2016 年になっても誤解を招くような書籍が心理・福祉関係者すなわち支援職側によって新たに出版されているのが現状である。この点について、ASD 者に寄り添う体裁でいながらまるでオリエンタリズム的な権威と偽善に満ちた支援者側の「ナラティブ」の例を取り上げ、過去に支援職が起こした福祉関連の事件との比較対照も交えながら、真の ASD 啓発についての考察の契機としたい。

以下、当該文献のものではなく通常のアラティブについて補足しておく。

アラティブは、社会言語学においては個々別々の言説の単位を指し、「一つの質問に対する研究参加者の個別の長い回答」である。口頭の言説における典型はウィリアム・ラボフの研究例であり、社会歴史学と人類学ではインタビュー、観察、記録などから成るライ

フストーリー全体を指すとされる。これら両極の概念の間にある心理学と社会学におけるナラティブの定義によると、個人のナラティブは長い語りの部分を含み、一回もしくは複数回の研究インタビューや治療的な会話における人生についての長い報告となる（リースマン 2008/2014:11-12）。マクロな視点では、二十世紀の公民権運動、フェミニスト運動、ゲイ・レズビアン運動などが差別について人々が体験談を語り合うところから生まれ、そのような話に見出された共通点が集団への帰属性を生み出し、集団行動の舞台を整えたという（前掲:18）。より個人的には、現在の自分のアイデンティティと調和させるべく、記憶の中の過去を書きかえて編集することにより、ナラティブは人が過去を理解する方法を提供すると同時に過去の経験を構築する（前掲:17）。これが先ほど述べたナラティブ・アプローチ、ナラティブ・セラピーにおけるナラティブにあたる。

本稿における当カフェの参加者による発言は心理学と社会学におけるナラティブの定義の「一回もしくは複数回の研究インタビュー」に近いが、ASD カフェ自体が勤労中高年 ASD 者を対象にした座談会の形式であるため、「人生についての長い報告」というよりむしろ、その時々生活、特に職場における具体的な体験談になる。上述のようにナラティブ・アプローチの役割を果たすとは考えにくいので、当カフェの参加者の発言は次章でエスノグラフィー及びライフストーリー・インタビューの形式で考察することとする。さらに、次項でナラティブ・セラピー及びナラティブ・アプローチの ASD 者への適用の可否、すなわちナラティブ・アプローチが未だ実社会に出ていない大学生に対してはある程度有効であるが、中高年の ASD 者に対しては適用しにくい点について論じる。

### 3. 1. 2 発達障害学生とナラティブ・アプローチ

本項では、第 2 章でも ASD の特性を示す例として引用した富山大学の発達障害学生支援チーム、トータル・コミュニケーション支援部門（TCSI）の斎藤清二・西村優紀美・吉永崇史による『発達障害大学生支援への挑戦—ナラティブ・アプローチとナレッジ・マネジメント—』（金剛出版、2010）を取り上げる。そこでのナラティブ・アプローチは、「学生への支援とは、学生と支援者の両者の語りをすり合わせるなかから、新しい物語を共同構成していくことである」（斎藤他 2010:40）という理念と、「私たち支援者は、彼らの固定化した言葉の概念を、ネガティブな意味づけから解放させるための会話を展開していく」

(前掲:168) という学生に寄り添う姿勢を明確にしたものである。斎藤はナラティブ・アプローチの意義について以下のように述べる。

ある学生を「発達障害」という物語を通じて理解するか、それともたとえば「個性」という物語を通じて理解するかによって、その後の交流は大きく異なってくる。「発達障害」という物語に従えば、人生においてその学生のうえに生じてくるさまざまな問題は、本人の努力や責任に帰せられるものでなく、あくまでも障害特性によるものであり、むしろ周囲の環境が調整され、社会的資源へのアクセスこそが本人に提供されるべきものである。このような物語が採用されることによって、本人がそれまでに担わされてきた不必要な自責感が軽減し、困難が著しく改善することも期待できる。しかし一方では、「発達障害という物語」は、「障害とは生得的なものであり、その根本的本質は一生変えることはない」という見解を主張するものでもある。(…)その結果、その学生を取り巻く現実が「障害者」としての現実として構築されてしまい、その学生は自分の個性を発達させていく機会をむしろ失ってしまうかもしれない。

(前掲:36-37)

どのような解釈にも一長一短はあるものだが、現実問題として「周囲の環境が調整され、社会的資源へのアクセスこそが本人に提供されるべき」なのだから、障害特性が強く出て生活に支障をきたしている当事者には「発達障害という物語」は必要である。後に論じる山本の『発達障害がある人のナラティブを聴く』にもあてはまるが、支援対象者が『「障害者」としての現実』に過度に甘えたり悲観的になったりして障害の診断や物語がマイナスに作用するのであれば、ナラティブ・アプローチやナラティブを聴く、聴かない以前に、ものの見方を変えてみるよう助言するのも支援者の役割であると考ええる。しかも、「ある学生を『発達障害』という物語を通じて理解するか、それともたとえば『個性』という物語を通じて理解するか」とあるように、当事者にとってのナラティブ・アプローチのほずが、まず周囲が当事者を「理解する」ためのナラティブの方がおそらく無意識に先に問題とされるのである。この点は同種の支援職である後述の当該文献の山本とも共通する。

さて、富山大学の試みではあくまでも大学生に向けて、以下のような発達障害の特性を十分理解し、配慮した上で、具体的な対策が取られることになる。

一般的に、ASD の人は字義通りに言葉を受け取ると言われるが、言葉への厳密さが強いがゆえに、投げかけられた言葉が彼らの意味世界にストレートに入ってしまう、実際の言葉の定義に固定化されてしまうのではないだろうか。特に、ネガティブな言葉は、そのまま彼らのアイデンティティに直結し、自己否定感につながってしまうことがある。私たち支援者は、彼らの固定化した言葉の概念を、ネガティブな意味づけから解放させるための会話を展開していくのである。(前掲:168)

上記引用文に示された障害特性についてはまさにその通りであり、定型発達者と違って「言葉への厳密さが強いがゆえに、投げかけられた言葉が彼らの意味世界にストレートに入って」しまうという障害特性があって初めて強固なネガティブ・フィルター<sup>9</sup>が形成されるのだが、さらに中高年の場合にはこれまで発達障害も知られておらず診断も受けていなかったため、他者からの言葉だけでなく職場や対人関係などの現実の失敗経験が何重にも加わって自己否定感を形成し、抑鬱状態や鬱病などの二次障害を発症してしまっているケースが見られる。従って、以下のエピソードは、「大学生にとってのナラティブ・アプローチ」とでも限定すべき、若者にのみ効果がある成功例ではないだろうか。

たとえば、E 君のケースでは、教室移動の時に突然体調が悪くなり歩けなくなってしまったが、一緒に構内を歩き、状況を言語化し外在化することによって、「人の話し声や大きな音が急に聞こえてくる状況で苦しくなり、歩けなくなってしまう。そういえば聴覚過敏があります」という自己特性を思い出し、「それがわかっただけで気持ちりがすっきりしました」と言うに及んだ。「聴覚過敏」という問題の客体化により、自己のアイデンティティに対するネガティブな確信が収まっていったと考えられる。H さんの場合は、支援が始まって1年ほど経ち、ようやく自分自身を語り始めた。面接の場で自分の気持ちを言いあらわすことが難しかったが、外在化する会話の中で問題を自己のアイデンティティと離れたものとして取り扱うことができるようになったと考えられる。(前掲:196)

---

<sup>9</sup> 第5章で論じる。



『聴覚過敏』という問題の客体化により、自己のアイデンティティに対するネガティブな確信が収まっていった」とあるように、確かに成人の場合も ASD の診断がついたことにより、それまでの人生における様々な生活上の困難や対人面での軋轢の原因がやっとわかったと、救われたような気持ちになるケースは多い。「本人がそれまでに担わされてきた不必要な自責感が軽減」する状態である。しかし、上記の「E 君」が「自己特性を思い出し」という点は奇異に感じられる。通常、成人 ASD 者は二十歳前後の大学生のようにナラティブ・アプローチによってようやく特性を自覚する、というような段階ではもはやない。まして 40 代、50 代にもなれば自分のできることとできないことの区別はとうに把握しており、ナラティブによって外在化・客観視して解決できる程度の軽微な症状を持ち越して数十年を経ているわけではない。自力では解決できない特性だけが課題として残っており、既に生活が破綻している場合もある。個々の職場において離転職を繰り返したり、先に述べた抑鬱状態などの二次障害を併発したりすることなくやっていけるかどうかは、やはり定型発達者側からの具体的な支援・配慮、理解の有無など周囲の環境にかかっている。

また、そもそも先述の「書きかえ療法」においては、当然だがセラピストやカウンセラーなどこの大学における支援者の役割を果たすような他者の存在が必須である。

こちらからの反応を受け取り証言できる人がその場にいることが、サイコセラピーと大衆心理学の本による自己分析とが一線を画す点であろう。この違いの意味は、信頼に足る聴衆がそこにいて、本人の変化を見届けてくれる点にある。大衆心理学の本を利用する場合は、その本からの示唆を自分一人の物語の中へ入れて解釈する作業であるのに対し、書きかえ療法では（治療者一人かもしれないが）聴衆をまず据えて、そのやりとりを通してクライアントの変化が証明されていく。（エプストン他 1992/1997:169、傍点引用者）

まず、この「信頼に足る」聴衆や治療者の役割を果たす他者が、学生ではなく社会に出てしまっている ASD 者には見つけにくいのではないかという問題、また、相性の合う主治医なりカウンセラーなりが運良くいたとしても、「やりとりを通して」という場合の、言葉によるその「やり取り」がコミュニケーション障害を特性とする ASD 者にとってそもそもうまく機能し得るのか、という問題がある。

『ADHD へのナラティブ・アプローチ』（2000/2006）という文献の著者デイヴィッド・ナイランドが ADHD の児童との生き生きとした対話を提示し、一定の成果を上げたことを報告できたのは、ADHD は ASD と違って他者に対する無関心や想像力の障害、コミュニケーション障害を特性としないからである。逆に言えば、支援者側との「信頼関係」を ASD 者との間に、ASD ではない人間に対するのと同じようには必ずしも適用できないのである。

富山大学の「支援者」が ASD の学生にナラティブ・アプローチの手法を用いてうまくいった例について、前述の E 君の場合は自分で解決したからであり、H さんは解決したにせよ、支援員に自分自身のことを語り始まるまでに 1 年を要している<sup>10</sup>。社会人であれば民間の医療機関等で有償のカウンセリングを受けることになるだろうが、1 年も何も話せぬまま通うのは就労上の失敗で収入が安定しない ASD 者や扶養家族のある ASD 者にとっては現実的でない。富山大学の他の成功例も、あくまで大学におけるスケジュール管理等や、いまだ自己の発見などを中心としており、また、たとえば履修科目が多すぎてスケジュール調整が上手くいかない「F 君」の場合は支援者の提案になどいっこうに耳を貸さず、ようやく授業数を減らす気になったのは、問題の外在化のために支援者が障害特性に応じて視覚的な情報、つまり目で見てわかるスケジュール表などの資料を提供したからである（斎藤他 2010:196-197）。そこにとりたてて心情的な信頼関係云々という話は出て来ない。これは ASD 者を支援する上で着目すべき点である。

以上の点よりナラティブ・アプローチは、まだ自分自身の特性も必ずしも把握できておらず、アイデンティティも確立せず、社会に出たこともない、要するに各大学で研究されている「子ども」に限りなく近い大学生には有効な技法であっても、既に働いている中高年 ASD 者に対しては必ずしも役立つとは言えないと思われる。ASD 児のナラティブ研究に比べ、本格的に成人、しかも中高年 ASD 当事者ばかりを対象としたナラティブ・アプローチの研究が少ない所以である。

---

<sup>10</sup> H さんについては次のような経緯だった。「コミュニケーション上の問題を抱えている」が、医療機関にかかったことがなく、「特別な支援が行われないまま大学に入学してきた学生」であり、「人間関係がうまくいかないとその不安や怒りを内側に向けてしまうタイプ」、「自己否定感が強く、イライラした感情をどのように処理してよいかわからず（…）将来の自分にも希望がもてなくなっている状態」であった。「支援室を安全基地（居場所）として利用し、複数の支援員との対話により、少しずつ言語表現ができるようになっていき、落ち着いていった」。そうして「支援が始まって 1 年ほど経った時、ようやく自分自身をテーマに話をし始めた」という。（斎藤他 2010:162）

以下、「ナラティヴ」について論じるのは主として本章の当該文献に関連する場合のみになる。当事者の語りだけでなく支援者側の語りも、聞き取った内容として掲載されているものはそれに準じるものとし、さらに、当該文献の著者である心理士の視点による解説文そのものをも「ナラティヴ」として扱うこととする。

次に、上で述べた「信頼関係」に着目するにあたって、支援職の未熟さや無配慮の程度が露見した類似例であり、支援する側とされる側との「信頼関係」に関して非常に示唆に富む例として、1993年の福祉川柳事件について考察する。

### 3.2 「福祉川柳事件」における支援者側の本音

ここでは川柳の形になるのでナラティヴの形式にはあてはまらないが、支援職の本音と、不均衡な権力関係の存するところに信頼関係は成り立ち得ないという、「支援」のある意味本質とも言える部分が露骨に表れている点で、また、「子ども」ではない成人の支援にほぼ失敗している点で、次節で論じる支援者のナラティヴと共通するものとして1993年の福祉川柳事件を取り上げる。

福祉事務所の生活保護担当のケースワーカー達による「金がない それがどうした ここくんな」、「救急車 自分で呼べよ ばかやろう」、「いつまでも 入院しててね アル中精神」(引用者注: アルコール依存症の者と精神障害者を指す)、「休みあけ 死んだと聞いて ほくそえむ」等の生活保護受給者に対する侮蔑・差別的な表現を含む川柳 75 句が掲載された公的扶助研究全国連絡会(以下、公扶研連と記す)の機関誌が障害者団体の目にとまり、マスコミを利用した抗議声明が発せられて一気に社会問題化したのがいわゆる「福祉川柳事件」<sup>11</sup>である。

当時、公扶研連には専門のスタッフはおらず、機関誌の発行は編集責任者のみによる個人作業であり(大友 2004:16,53,70)、福祉川柳は東京都内のある区の一福祉事務所内のみで内輪に募集し、年度末の歓送迎会で余興に順位づけの投票などを皆でしたもの<sup>12</sup>を、その職員が知り合いであった編集責任者に「原稿が足りない」と相談されて提供したもの

---

<sup>11</sup> 以下に述べる概要のうち、当時の事実関係は個人で取材・再調査して出版された大友信勝『福祉川柳事件の検証』(筒井書房、2004)に、当該川柳の内容分析については副田義也『福祉社会学宣言』(岩波書店、2008)に主に依拠している。

<sup>12</sup> 事務所内で集まった 89 句のうち、職員達の投票で一票も入らなかった 14 句は除かれていた(副田 2008:2)。

だった（前掲:112）。生活保護行政の現場についての川柳を詠むという企画自体も、ケースワーカー歴の浅い職員達の悩みや喜びを職場の仲間内で共有しようという趣旨であり、外部への公表や投稿などは誰一人想定していなかったという。ケースワーカーの困難を機関誌で訴えるのにそれらの川柳が契機になれば、と「文学ノート・第一回川柳大賞」とタイトルを冠した資料を渡した福祉事務所側は「『穴埋め程度』と理解し、『小さなコラム』程度、仮に川柳が使われた時には解説記事が載り、問題提起が行われる。ゲラ段階で校正もできる」（前掲:112-113）と思っていた。しかし一人で編集作業に追われ、発行も遅れている状況にあった『公的扶助研究』の編集担当者は、おもしろおかしくまえがきをつけた 2 ページ分の川柳の順位表を何の解説もつけずにそのまま掲載してしまう（前掲:113）。

労働組合・政治団体を巻き込んで、この件とは無関係の退職者まで出した「福祉川柳事件」は、経緯の詳細を知ると「事件」というよりほとんど不運な「事故」に近い。ただ、編集責任者が川柳作者である若いケースワーカー達や当該福祉事務所を守るために、川柳は読者から集めたものであると述べて最後まで提供元は明かさず、詳細は公表されなかったのも、川柳はすべて全国の各自治体の福祉事務所から公募したものであるという誤った認識は払拭され得なかった。そのせいで他の市町村の無関係なケースワーカーが被害を受けた点ではやはり人為的な事件であると言わざるを得ない。

しかし、当初の障害者団体やマスコミ各社の激しい非難は、それまでは障害者等の権利を守るために生活保護行政を批判していた公扶研連の長年の研究活動が明らかになるにつれ、「川柳の背景に何があるのか」、「どうして人権意識が低下したのか」（前掲:17）とその背景と原因を探り、問題の本質を福祉全体を取り巻くものとしてともに考えていこう、という論調に変わる。当時の毎日新聞の記者はこう書く。

国による福祉切り捨ての最前線に立たされ、ストレスにさらされながら、懸命に精神の安定を図ろうとする職員たちの姿が目につく。ただ、福祉を受ける側がそれ以上にイライラを募らせ、川柳にどれだけ傷つけられるのか、彼らが気がつかなかった。責められても仕方がない。でも、国の生活保護行政にも目を向けよう。福祉事務所で担当者がどのように扱われているのかも知って欲しい。川柳を作った職員たちの感覚よりも、彼らを追い詰めているものにこそ、問題の本質が隠れている。（前掲:18-19、傍点引用者）

『公的扶助研究』の中の研究報告に名前が出ているだけの者や写真を提供しただけの者が政治団体から激烈な糾弾を受けていても、一月もたたないうちに「事件」は「諸悪の根源は厚生省」（副田 2008:14）という落としどころを見つけて終息に向かう。糾弾され退職させられた被害者の一人は数年後の調査で、当該福祉事務所（A 事務所）と管轄の A 区に関して、「福祉川柳を作った人や、順位付けをしたメンバーから、利用者、当事者に対して何のおわびも謝罪もないのはどうしてなのか。いつそれがあるのか。A 事務所も、A 区もこのまま何もなかったように今日に至るまで謝罪や釈明も何もないのが不思議でならない」と取材相手の大友にもらしている（大友 2004:98）。結果だけ見ると、日頃からストレスにさらされ、不本意な扱いを受けていれば、支援職は社会的弱者の気持ちを考えず、彼らを傷つける言動をわざわざ形に残しても大目に見てもらえ、うやむやにすませてもよいということになる。

だが、そもそも編集責任者の過失が最も大きく、大友は次のように指摘している。

編集者は詠み人と A 事務所を知っていて「真面目で仕事熱心な若手や未経験者」の心理的葛藤、困難ケースとの矛盾をどう改善したらいいのか、その点がリアルに表現されているとみた。（…）編集者が「現場の状況をよく表している」とみたのは自らの詠み人たちへの信頼が背景にあり、福祉事務所の最前線で、同様の心理的葛藤・困難ケースを抱えて苦勞している読者にはブラックユーモアの一つとして受け止めてもらえるのではないかと考えたからであろう。ただし、読者が現場ワーカーだけでなく、当事者や一般市民が含まれることを想定できていなかった点が問題であったと思われる。（前掲:173、傍点引用者）

編集担当者は 17 年間、当該機関誌の発行・発送作業を一人で行ってきたのであるが、それにもかかわらず読者の内訳が想像もできなかったとは奇妙な話である。その編集責任者本人は、謝罪・釈明を繰り返す事件最中に回を重ねて行われた公扶研連の対策会議で以下のように述べている。

①17 年間にわたる機関誌編集で無理に無理を重ね、刊行後の見直しを行う余裕がなかった。②福祉川柳は新人向けを狙ったもので、新人の困った気持ちがでていて現場の厳しい仕事の裏面を伝えているので良いと思った。しかし、個人作業の判断ミスで失

敗であったということに尽きる。③機関誌は独立採算であり、預金通帳残高を安定させるために、読者の拡大を新人にものばそうと考えていたが、正面からやるべきだった。④人権意識が低いという批判を受けているが、厳しい現場状況を重視したつもりだったが、当事者のことを研究運動の中軸に据える点で欠けるところがあった。(前掲:72、傍点引用者)

公扶研連の会員のこの編集責任者は、江戸川区福祉事務所の職員であった(副田2008:10)。

たとえば大学の医学部入試の小論文対策においては、予備校でも市販の参考書でもまず医療従事者の心得として、何をおいても「患者中心」であるという基本倫理を強調している。医療が患者ではなく医者中心、医者の好奇心や功名心や拝金主義などを中心とするならば、患者は尊厳ある人間ではなくモルモットと化す。医学部を目指す受験生のための小論文の教材はどれもまず患者の自己決定権やQOL、インフォームド・コンセントの重要性の解説から始まり、近年の医学部及び歯学部の入試小論文では、前述のナラティブに関する著書を有する野口の文章や、EBM (Evidence Based Medicine) と NBM (Narrative Based Medicine) 双方のバランスを保つことが重要であるという趣旨の文章、あるいは患者の死生観をいかに重視すべきかという文章を読ませて論じさせるような出題が見られる。しかるに、上述の引用文を見る限り、福祉支援においては支援を受ける人間は支援活動の中心に置かれていない。当事者中心という視点が欠けていたとはすなわち、支援職はあくまで自分達支援職中心の視点しか持つことができないということである。公的扶助すなわち生活保護に関する職務だけでなく研究活動にも従事しながら、生活保護受給者を罵倒し貶める「ブラックユーモア」に満ちあふれた川柳を生活保護受給者が目にした場合にどう思うかということさえ想像できないならば、生活保護受給者が当該機関誌を手にとって活字を読む、勉強するということ自体が「想定できていなかった」とも考えられる。被支援者に聞かせる必要のない本音を内輪での慰労会だけでならともかく、印刷媒体で公表してしまう点において、社会的弱者も自分達と同じ人間であるという認識が支援職にはないのかと言われても仕方あるまい。

また、ケースワーカー達による川柳自体も、冒頭に挙げたものだけでなく、「やなケース 居ると知りつつ 連絡票」、「きこえるよ そんなにそばにこなくても」、「風呂いけよ 低いお鼻が まがっちゃう」、「アル中に むだと知りつつ 説教す」などほとんどが生活

保護受給者に対する「拒否感情」に貫かれている。副田（2008）はその点について、「ケースワーカーのクライアント（引用者注：担当の生活保護受給者）に対する拒否感情は、先行するクライアントのケースワーカーにたいする拒否感情から誘発されたものではないか」（副田 2008:58）とした上で、その受給者側からの拒否感情の理由を「最終的には生活保護を受給すること自体がスティグマとなる。（…）クライアントは、そのスティグマを自らにもたらしたものとして、福祉事務所とケースワーカーに根強い拒否感情を持つのである」（前掲:61）と述べ、さらに、受給者側がケースワーカーに対して嘘をつく<sup>13</sup>理由を以下のように指摘している。

第二四条と第二六条（引用者注：生活保護法の条文、以下同様）は、生活保護の開始と停止、廃止の決定の権限を福祉事務所とケースワーカーがもっており、クライアントはそれに服従するほかない、権力の絶対的非対称性を示している。（…）第二八条と第二九条は、ケースワーカーがクライアントのプライバシーを侵害することを合法化する規定である。（…）

この問題に少し別の角度から接近してみよう。ケースワーカーとクライアントのあいだには、法レベルで権力の非対称的關係がある。それは社会レベルでは社会的地位の上下関係となる。この権力関係、上下関係は一見静止的であるが、クライアントがケースワーカーに権利そのほかの要求を主張することで、社会・心理レベルで、葛藤関係に転化する。（…）

ここまで進んでくれば、「福祉川柳」の作品群のなかで、高い頻度で詠まれ、ケースワーカーの苛だちの原因にしばしばなるらしい、クライアントのうその性質についても、いちおうの理解が可能になるだろう。端的に言えば、非対称な権力関係、上下関係のなかで、クライアントはワーカーとの葛藤を断念しないから、自己主張として、うそをつくのである。それはときには、弱者が自己の生活を防衛するための道具のひとつである。（前掲:61-62、傍点引用者）

---

<sup>13</sup> 嘘について詠まれた川柳には、「死んでやる わかっているも とんで行き」、「病状を訊いたとたんこ 咳ふたつ」、「仕事して さがしています うそつくな」、「区役所の ドアの外では 早歩き」など非情で容赦のない多数のものがある。

権力関係、すなわち支援職には利用者に対して絶対的な権限があるのだということを、福祉関係者はしばしば忘れているのではないだろうか。副田は、大友が「保護受給者と信頼関係が成立しないと悩んでいる。どうしたら利用者と信頼関係をつくれるか。(…) どうしたら仕事で保護受給者と信頼関係を取り戻せるのか。(…) 福祉の仕事は利用者との信頼関係が出発点であり、基礎なのだ。現場ワーカーも信頼を取り戻したいと『悲鳴』をあげ、それが揺らぎ、屈折さえみせ始めている」(大友 2004:137) と「信頼」を連呼している文章に対しても、そのような相互信頼が一般的に存在したことがあるのか、と疑問を呈している。

ケースワーカーとクライアントの相互信頼関係として、どのような内容の関係を考え、それがどのようにして成立するというのか。たとえば、クライアントがケースワーカーにつねにうそを言わず、真実を語る関係か。私は、それは、クライアントの自己主張を禁じることに帰結するほかないと思う。また、第二八条、第二九条によって強行される調査や命令の制度と相互信頼が両立するはずもないと思う。(副田 2008:62-63)

もっともな意見である。権力ある側が己れの権力を自覚せず、社会的弱者の気持ちを適確に想像する能力もないところにまともな福祉や支援が成り立つはずもない。不均衡な権力関係においては信頼関係は成り立ち得ないのではないかと支援者も疑問を抱くべきであり、また、そもそも自分達の方に決定的な権力があることを常に念頭に置いておくべきである。繰り返すが、相手の立場を「想像」することが必要なのである。

自分達より社会的に下の立場にある当事者に対して著しく配慮が欠けた同様の例を、発達障害者と支援職との「信頼」とは程遠い無残な関係をはからずも表出した山本智子の著書『発達障害がある人のナラティブを聴く―「あなた」の物語から学ぶ私たちのあり方―』(ミネルヴァ書房、2016) を用いて次節で考察する。

### 3.3 山本智子 (2016)『発達障害がある人のナラティブを聴く―「あなた」の物語から学ぶ私たちのあり方―』を読む

(…) 次のような文章を読むとき、私は彼と対立していることを知る。「他の環境において孤立した成人のマダガスカル人が、古典的なタイプの劣等性に敏感になりう



るという事実は、幼年期以来彼のうちには、劣等感の眼があったということを、ほとんど異論の余地なく説明している。」<sup>14</sup>

この箇所を読むとき、私はなにかが崩れ落ちてゆくのを感ずる。それに、著者の《客観性》なるものは、読者を誤った考えに導くおそれがある。

(…)

実際、マノニ氏よ、あなたは間違っている。なぜなら、次の文章は一体何を意味しているのか？「ヨーロッパ文明とそのもっともすぐれた代表者たちは、植民地の人種差別には責任がない。」(ファノン 1952/1998:107,113)

### 3. 3. 1 ASD 者の支援者に適用し得るオリエンタリズムとは

本節では支援職のオリエンタリズム的思考を表すものとして、ミネルヴァ書房が 2016 年に刊行した山本智子著『発達障害がある人のナラティブを聴く―「あなた」の物語から学ぶ私たちのあり方―』を主に取り上げ、考察する。ここで言うオリエンタリズム的思考とは、サイードの表現をそのまま用いると、まず『オリエンタリズム』の序説における「簡単に言えば、オリエンタリズムとは、オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式スタイルなのである」(サイード 1978/1993a:21)、さらには「ヨーロッパ文化が、一種の代理物であり隠された自己でさえあるオリエントからみずからを疎外することによって、みずからの力とアイデンティティーとを獲得したということも明らかにされるであろう」(前掲:22)といった部分になぞらえて説明することができる。支援職が支援対象であるはずの一部の発達障害者を「支配し再構成し威圧するための」様式であり、「一種の代理物であり隠された自己でさえある」発達障害者とその障害特性以外のありようから「みずからを疎外することによって、みずからの力とアイデンティティーとを獲得」し得るような状況である。

当該文献に登場するその著者も他の支援職達も、まるで支援職を困らせる「性格の悪い」、「難しい」(山本 2016:74、以下、当該文献のページは数字のみで表す)発達障害者を含む障害者達の存在によって「みずからの力とアイデンティティーとを獲得」し、あるいは

---

<sup>14</sup> 引用文献のこの箇所に「(原注一)」あり。「(一) O.マノニ『植民地化の心理学』三二頁(スイコ社)。」(ファノン 1952/1998:299)

それを公表することによって自らをより安全で優位な立場に置くように見える。そのような彼女ら支援職の立ち位置を取り巻く状況にはサイドの以下の記述も該当する。

オリエントがオリエント化されたのは、十九世紀の平均的ヨーロッパ人から見て、オリエントがあらゆる常識に照らして「オリエント的」だと認知されたからだけではなく、オリエントがオリエント的なものに仕立て上げられることが可能だった一つまりオリエントはそうなることを甘受した一からでもある。しかしそこには、ほとんど合意というものが見出されない。(サイド 1978/1993a:27)

科学者、学者、宣教師、商人、兵士が、オリエントに住んだり、オリエントについて考えたりした。こうして彼らがそこに居ることができた、あるいはそれについて考えることができたのは、彼らがオリエントの側からの抵抗にほとんど出会わなかったからである。(前掲:30)

発達障害者について書かれた文献には、よほどのことがない限り、事前に同意を得て紹介・引用された者からの抗議はほとんどないであろうと思われる。たとえば当該文献で露骨に怪物扱いされている発達障害当事者についても、出版後にたとえ彼らから個別に何らかの抗議があったとしても、社会問題に近い大きな抗議活動や訴訟、絶版あるいは改訂版の出版等の処置がない限り、当該文献を読んだ者にはその顛末も抗議の有無さえも知られることはない。自閉症児の親達の抗議を受けて改訂版を出した数少ない例としては、特定の障害当事者を指したわけではないが、1985年に自閉症に対する無知無理解を露呈した講演を大学受験予備校の学校法人河合塾で行った上野千鶴子と、河合塾の関係者の誰一人としてそれに疑問を抱かないままその逐語録を出版までした河合文化教育所なる団体の事案がある。これは謝罪文を掲載した改訂版を公刊した点で例外的なものではあるが、元の誤った認識の講演記録の絶版・回収まではされておらず、やはりここでの問題の一つは公表されてしまったものに対するそれをも含めた合意の有無であると言える。

上記の引用文のうち先のものには、「合意」が見出されない例としてフローベールと彼が出会ったエジプト人娼婦の逸話が続く。

そのエジプト人娼婦はみずからを語ることによって、自分の感情や容姿や履歴を紹介したのではなかった。彼、フローベールがその女性のかわりに語って、その女性を紹介＝表象したのである。フローベールは、外国人で、相当に金持ちで、男性であったが、これらの条件は、支配という歴史的事実にほかならない。この事実のおかげで、フローベールはクチュク・ハネム〔娼婦の名前。トルコ語で「小さな婦人」の意味〕の肉体を所有するだけでなく、彼女の身代わりの話し手となって、彼女がどんなふうに「典型的にオリエンタル」であるのかを、読者に物語ることができたのである。ただし問題はフローベールがクチュク・ハネムに対して優位であった状況が決して例外的なものではなかったことである。フローベールにとっての<sup>ストレングス</sup>「力」の状況は、東洋と西洋とのあいだの力関係の<sup>パターン</sup>「型」ならびにそのような状況のおかげで成立したオリエン<sup>ディスクール</sup>トに関する言説をはっきりと象徴しているのである。(前掲:27-28)

主に英仏のイスラムに対する大規模で根深い帝国主義への批判と、近年になって顕現した成人の ASD という軽微に見える障害に対する一部の支援職の偽善とを比較しなぞらえることは無謀ではあろうが、より広範囲に行われるべき ASD 啓発のために次の点について論じる必要があろう。すなわち、「身代わりの話し手となって」自分の接した発達障害者が「どんなふうに」「典型的に」発達障害であるのかを「読者に物語ることができた」、つまり支援者としての権力だけでなく、発達障害に関する物語を公表・出版できるという優位性をも備えた支援職がそれらを自覚せず、いかに自己欺瞞に陥り、綺麗事を並べながら発達障害者を貶めていくかについてである。

だが、彼女らをただ批判するだけでなく、次章に見る勤労中高年 ASD 者の苦境をも併せて望ましい支援のあり方についての模索をも本稿後半全体を通じて行う。これは太田(2001)の言う「文化を語る権利は誰にあるのか」ならぬ「発達障害を語る権利は誰にあるのか」、また、「ある集団に帰属しない外部の人間に、その集団について語る権利はあるのだろうか」(太田 2001:28)という問題にも通ずる。支援のあり方、表象のあり方の二つの大きな問題がここには存在する。

本章では、発達障害に対する人道的見地から当該文献で最も問題あると思われる記述が散見される「第4章 障がいという言葉に対する『違和感』——一つの価値観・秩序が優先される世の中で——」の「2 『なぜ僕は苦しむのだろう』」(70-76)におけるアスペルガー症候群の青年の語られ方を中心に論じるが、第1章、第3章など山本の論の飛躍と読者に

対するミスリードが見られる章や、発達障害者ではなく支援職のナラティブとなってしまう第 6 章の一部、そして全編を通じて見られる思わせぶりな修辭的問題をも取り上げる。

### 3. 3. 2 誰に向かって語っているのか

当該文献『発達障害がある人のナラティブを聴くー「あなた」の物語から学ぶ私たちのあり方ー』のサブタイトルは、『「あなた」の物語から学ぶ私たちのあり方』である。ここに見られる『「あなた」]と「私たち」という二項対立の区分のうち、まずカギカッコつきで強調される『「あなた」]とは何者であろうか。それに対して「私たち」とは誰を指すのであろうか。

メインタイトル「発達障害がある人のナラティブを聴く」の「発達障害がある人のナラティブ」と『「あなた」の物語]は同格を表すダッシュを挟んで同義であると考えられるから、『「あなた」]は「発達障害がある人」のことであろうが、なぜ発達障害者は通常の手物で見られるような「彼ら」や「私たち」でなく、一見親しげに呼びかけているようでありながら同時に遠ざけるかの如くわざわざカギカッコで区分した『「あなた」]と呼ばれ得るのか。

まず、第 4 章の「2 『なぜ僕は苦しむのだろう』(70-76) の元となった論文<sup>15)</sup>の共著者である森岡正芳による巻頭の寄稿文「山本智子さんの著書に寄せて」(i・ii)は、次のような一節で始まる。

新鮮な驚きを覚える本です。言葉が生きています。

援助者の「私」には見えてない(引用者注:原文ママ)こと、専門家としての「私」の限界に気づかされることは、援助の現場ではいつも起きていることです。ただ、援助者の側の意識に立ち現れにくいです。援助者として関わる「私」も、「あなた」を当事者とする社会と制度のシステムの一員であってそこから逃れられないのです。山本さんは、現場において暗黙のものになっているところをよく描き出しています。現

---

<sup>15)</sup> これは以下のものを指す。森岡正芳、山本智子「発達障害概念の社会性ー一人は障害をどう生きるか」『臨床心理学』第 14 巻第 2 号、金剛出版、2014、pp.168-173。

場で動き動かされつつ言葉をていねいに相手に伝えるから、山本さんと接する多くの障害者や施設職員の方々が語りだしてくれるのでしょう。

彼らの多くは、言葉を失った人たちです。それは「障害」を持っているからという意味ではありません。自分の言葉を聴いてもらう体験に恵まれなかった事情があるのでしょう。各章に登場する一人一人が際立って、語りはじめます。名前を持つ個人としてははっきりとした輪郭をもつのです。これが対人援助の原型です。

小さな声、つぶやきを聴き届ける山本さんの耳の良さに驚きます。

それではどうして、そんなふうに「あなた」の世界に入っていけるのでしょうか。山本さんの言葉が相手に伝わるからです。「あなた」の心に届くからです。そして山本さんが「あなた」の言葉を自分の心に入れて、感じ取っているからです。このように人と人との間に交わされる言葉と聴き手の心に生まれてくる言葉を含めて、私たちはナラティブと呼んでいます。(i、傍点引用者)

「山本さんと接する多くの障害者や施設職員の方々が語りだしてくれる」とあるのは、「発達障害がある人のナラティブを聴く」だけではなく同業者の言い分をも聴き、結局そちらに山本が肩入れすることになる、すなわち「発達障害がある人のナラティブ」を必ずしも「聴き届ける」わけではなくなっている実状をはからずも暗示している。「これが対人援助の原型です」という言説については、はたして本当にそうであるのかという問題を以後論じることになる。

「あなた」の語についてであるが、やはりタイトルに続き、何の説明もないまま「『あなた』」という表現をそのまま用いてただ著者の山本を絶賛する文章に、カギカッコをつける特別扱いに否応なく違和感を抱かされる発達障害当事者への配慮は微塵も伺えない。さらに、支援者側にも必ずしも理解力・判断力が十全に備わった健常者だけではなく、自閉症スペクトラム<sup>16</sup>内に位置するような人間も存在するのに、「援助者の『私』」、「専門家としての『私』」、「『あなた』を当事者とする」といった表現から判断する限り、「私」対「あなた」という二項対立はやはり何の疑いもなく前提となっているのである。そのような二項対立の視点の「援助者」、「専門家」が「『あなた』」であるところの発達障害者の「世界」

---

<sup>16</sup> ここで用いている「障害」の語のつかない「自閉症スペクトラム」は、自閉症スペクトラム障害＝（広汎性）発達障害よりもやや範囲が広くなる。本田（2013）によれば、人口の10%を占める。（本田 2013:111-114）

にやすやすと分け入り、その「言葉を自分の心に入れて、感じ取っ」たりできるものなのだろうか。前節のケースワーカーと生活保護受給者の相互信頼が「一般的に存在したことがあるのだろうか」（副田 2008:62）という指摘を思い出してもらいたい。あるいは、サイドの次の一節でもよい。

（…）現実と言語、種族、類型、皮膚の色、メンタリティーといった種々の集合名詞に分割された。それぞれのカテゴリーは中性的な呼称というよりは、むしろ評価的な解釈である。これらのカテゴリーの根底には、「我々」と「彼ら」という厳格な二項対立が存在し、「我々」はつねに（「彼ら」が「我々」の完璧な一機能となるまで）「彼ら」を浸蝕しつづける。（サイド 1978/1993b:67）

タイトルとこのまえがき以外に初めて『あなた』という表現が著者の山本によって用いられるのは「はじめに—『あなた』の物語を聴かせてください—」（iii-viii）の以下の箇所である。冒頭からこの直前までの2ページ余りは「アスペルガー症候群と診断された藤本大地さん（仮名 45 歳）」という人物の紹介であり、その次に説明抜きの唐突な『あなた』の登場となっている。

障がいのある人は、「障がい者」として理解されがちですが、「障がい」は「あなた」の一部であり、「あなた」は誰かの子どもであったり、誰かの兄弟姉妹であったり、隣に住む人であったりすることを忘れてしまっていると感じることがあります。「あなた」を理解する上で、障がいを「あなた」が生きている世界の中の一部であるにとらえ、他の世界を知らなければ、「あなた」が今求めていること、感じていることを理解することはできないでしょう。その全体的な「あなた」を理解することが、「あなたの一つしかない人生」を豊かにしていくことに繋がっていくのだらうと思います。障がいとともに「あなた」が生きる世界のすべてが、はたして、障がい特性だけで説明できるものなのかどうかはわかりません。（v、傍点引用者）

「その全体的な『あなた』を理解することが、『あなたの一つしかない人生』を豊かにしていくことに繋がっていく」というのは支援者側の驕りであり、このような無自覚な記述が当該文献には随所に見られる。障害者側から見た健常者の欺瞞に対する Morris(1991)

の表現、“the iron fist in the velvet glove of the patronising and seemingly benevolent attitudes” (Morris 1991:22) にあてはまるものと言えよう。また、「障がいとともに『あなた』が生きる世界のすべてが、はたして、障がい特性だけで説明できるものなのかどうかはわかりません」という含みのある表現は一貫して著者の思想を表している点で当該文献の有する最大の問題に連なる。これは修辭的問題でもある。

なぜ山本が「あなた」と表現するかについては、「第Ⅰ部 ナラティヴを聴くことの意味—『あなた』と『私たち』それぞれに新たな知見や認識を生じさせるプロセス」の「第1章 当事者である『あなた』をとらえる視点—多様な意味を見落とさないために—」の「3『あなた』という存在は私たちの行為を反映する」(10-15)に、ようやくそれらしい説明が出て来る。

その直前に、当事者研究について、『『当事者』を対象とした質的な研究に対するアプローチには、『当事者』による『当事者研究』と、『当事者ではない誰か(たとえば、障がいがない研究者など)』による『当事者研究』があります」(10)と、当事者と非当事者の区別がついていないかのような不可解な記述が見られるが、後者の「『当事者ではない誰か(たとえば、障がいがない研究者など)』による」研究は、当事者研究以外の圧倒的大多数を占める通常の研究であり、当事者研究ではない。それにもかかわらず、ここで山本は実際に当事者研究を行っている浦河べてるの家や綾屋紗月らの名を挙げた後、「当事者研究は、当事者が、自らの体験や困難、問題を、それらを共有する仲間とともに(引用者注:原文は「共に」)研究する営みであると同時に、それらを共有しない人に対して語りだすという営みでもある」という石原孝二(2013:51)の言葉を引用して、「つまり、当事者である『あなた』を研究することは、『あなた』が生活している場所から、困難や問題を抱えながら生活している『あなた』の内側からの体験について『語る一語られる』関係ととらえてもよいでしょう」(11)と敷衍している。それ以外の「『当事者ではない誰か(たとえば、障がいがない研究者など)』による『当事者研究』の具体例には全く言及していない。そのまま、以下の『『あなた』の説明』に入るのである。

以上の流れから判断すると、「発達障害がある人のナラティヴを聴く」という自分の研究が「当事者が、自らの体験談や困難、問題を」「それらを共有しない人に対して語りだすという営み」であるゆえにすなわち「当事者研究」である、と山本は認識しているようである。だが、当事者研究の定義を新たに作り出し、自分が名乗りを上げるには、通常当事者研究のあり方からはずれている点からだけでなく、後述する第4章の当事者への無理

解や当該文献全体を通じて医学的知識を完全に除外する偏った主張や、「発達障害がある人」ではなく「施設職員の方々が語りだしてくれる」第6章の内容から見ても不適切であると言わざるを得ない。

『あなた』ときっちり区分された障害者の人称代名詞の解釈に戻ると、山本による説明は以下のようなものである。

私が当事者である「あなた」をどのようにとらえているかといえば、何らかの事象を経験している人であると同時に「あなた」を取り巻く文脈や関係性、状況を含むダイナミックな存在として受けとめています。この本の題名では「あなた」という言葉を用いていますが、「あなた」とは、私の目の前にいる障がいがある人の一部としてある人であり、私たちの相互関係の中で私たちの行為を反映する個人として現れてきた人を意味します。(12、傍点引用者)

上記の文章によると『あなた』とは「私の目の前にいる障がいがある人の一部としてある人」であるので、ここではカギカッコがついていないが「私」、「私たち」である山本達の目の前にいる、つまり山本達との支援関係において直接関わる障害者、かつ「支援者である山本達の「行為を反映する」障害者を指すのだと解釈できる。

『あなた』という呼称に関する山本なりの理由は以上のようなものであるが、「あなた」、「あなた」とカギカッコつきのきわめて目立つ形で、多い所では1ページあたり10回近くも繰り返しては当事者には読みづらいのではないかと想像することもない森岡や山本には、当事者中心という視点が完全に欠落していた福祉川柳事件の編集担当者やケースワーカー達と共通する心性があるように思えてならない。

さらに、当該文献の「はじめに」のサブタイトルは「—『あなた』の物語を聴かせてください—」と、はっきりと『あなた』に呼びかけている形であるにもかかわらず、あとがき（「結びにかえて」(179-183)）は次のようになっている。

本書の目的は“はじめに”で書きましたように、事例を読んでくださったみなさまが、みなさま一人ひとりのナラティブを立ち上げ、これからのアプローチに役立てていただくことにあります。この本の中で語られた「あなた」のナラティブが少しでもみなさまの役に立つことがあれば、私だけではなく語ってくださった人々の喜びにな



ります。どうぞ、みなさまのナラティブ・アプローチが、障がいのある人々と生きる現場で明るい笑い声を響かせるものとなりますようお願いしております。(181)

これでは「障がいのある人々と生きる現場」にいる支援職であるところの「みなさま」だけを読者として想定していることになる。「はじめに」は下記のような論調であり、その後の章を含め、明確に支援職のみを対象としているとは書かれていない。当該文献は特に支援職向けの雑誌や専門書のシリーズ等ではなく、一般向けの市販書である。

発達障害がある人々の語りから、「あなた」が何に困っているのか、「あなた」が生きている文脈や関係性が「あなた」の世界にどのような影響を与えているのか、「あなた」の生きる姿に私たちがどのように関与しているのか、をそのままに、素直に伝えていきたいと考えています。(…)

また、本書の中ではナラティブ・アプローチという言葉を用いていません。それは、「自分たちの生きる世界を知ってほしい」と面接に協力をしてくれた「あなた」の“ナラティブ”が、ともに生きようとする「私たち」の“ナラティブ”にしっかりと温かく繋がっていくことだけを目指しているからです。そして、「あなた」と一緒に生きたいと思う「私たち」の中で新たな知見や認識を生じさせるプロセスとなり、「私たち」らしいアプローチを創造するときの一つの視点となることを願っています。(vii-viii)

「ナラティブ・アプローチという言葉を用いて」いない理由が、『『あなた』の“ナラティブ”が、ともに生きようとする『私たち』の“ナラティブ”にしっかりと温かく繋がっていくことだけを目指しているから」となっているが、この因果関係が成り立つのかどうか、また、「しっかりと温かく繋がっていくことだけを目指している」とはどういうことなのかは不明である。むしろ、前述のように ASD 当事者は自分の体験や思いをいわば言いっぱなしでライフストーリーの述懐に近く、「信頼に足る」聴衆または治療者の存在と彼らに認められることが必要であるナラティブ・アプローチにもナラティブ・セラピーにもなり得なかったのではないか。言い換えれば、山本や山本が話を聞いた支援職達と被支援者である ASD 者との間に信頼関係は成り立たなかったということである。ASD 者と支援者

の間に信頼関係が成り立ちにくいことは本稿筆者も 3.1 で述べた。だが、それならば支援者はどのように ASD 者に処するべきかという問題が次に出て来るはずである。

「あなた」という奇妙な呼び名の話に戻ると、かろうじて、「面接に協力してくれた『あなた』」＝山本達と関わったごく一部の発達障害者の存在だけは意識していると取れるが、結局、「ともに生きようとする『私たち』」、「『あなた』と一緒に生きたいと思う『私たち』」(viii) 等のあらゆる美辞麗句は同じ支援者の間だけで用いられていることになる。このように、読者としての発達障害当事者が排除されていることを念頭に置いて、最初の森岡の寄稿文を見てみる。先の引用部分を再掲する。

彼らの多くは、言葉を失った人たちです。それは「障がい」を持っているからという意味ではありません。自分の言葉を聴いてもらう体験に恵まれなかった事情があるのでしょう。各章に登場する一人一人が際立って、語りはじめます。名前を持つ個人としてはっきりとした輪郭をもつのです。これが対人援助の原型です。

小さな声、つぶやきを聴き届ける山本さんの耳の良さに驚きます。

それではどうして、そんなふう「あなた」の世界に入っていけるのでしょうか。山本さんの言葉が相手に伝わるからです。「あなた」の心に届くからです。そして山本さんが「あなた」の言葉を自分の心に入れて、感じ取っているからです。このように人と人との間に交わされる言葉と聴き手の心に生まれてくる言葉を含めて、私たちはナラティブと呼んでいます。(i)

「名前を持つ個人としてはっきりとした輪郭をもつ」と「『あなた』」という人称代名詞の多用は明らかに矛盾しており、かつ、各章の登場人物である発達障害者＝「『あなた』」は言葉を持たず、あくまで「山本さん」が能動的に入って来てくれることによって語り始め、「山本さん」と互いに言葉が通じ、心揺さぶられることになるのである。この二人の言説は、『オリエンタリズム』第一章冒頭のバルフォアの演説を彷彿とさせる。

西洋諸国民は、歴史にその姿を現すや否や、たちまち自治能力の端緒を示すことによって、自らの真価を発揮したのであります。しかるに、広義のいわゆる<sup>イースト</sup>東方における<sup>オリエンタル</sup>東洋人たちの歴史の全体を一通りお調べになればよろしい。そこでは、自治の存在した痕跡などまったく見当たらないのであります。彼らの偉大なる幾世紀は一今日の

我々の目から見ても、それがまことに偉大であつたことは確かであります — おしなべて専制、つまり絶対的な政府のもとで経過したのであります。(…)我々が西洋的観点から自治と名付けているところのものを、みずからの努力によって確立しえた東洋の民族というものは、ついにひとつだに現れなかったのであります。これが事実なのであります。優越とか劣等とかの問題ではない。(サイード 1978/1993a:83-84、傍点引用者)

偉大だった、劣っているわけではない、と言いながら同時に「自治能力もない」とエジプトを貶めるバルフォアはサイードが取り上げるオリエンタリストの典型である。「表象の外在性をつねに支配しているのは、陳腐な決まり文句、すなわち、『もしオリエントがみずから表象できるものなら実際にそうしていることだろう。オリエントにはそれができないからこそ、表象という仕事が、西洋のために、またやむをえず哀れな<sup>オリエン</sup>東洋のためになされるのだ』という決まり文句の何らかの言い換えなのである。(…)マルクスが述べたように、『彼ら〔フランスの分割地農民のこと〕は、自分で自分を代表することができず、だれかに代表してもらわなければならない』(前掲:59)。

まるで「自分で自分を代表することができず、だれかに代表してもらわなければならない」かのような発達障害者に対して山本は、『『あなた』の“ナラティヴ”が、ともに生きようとする『私たち』の“ナラティヴ”にしっかりと温かく繋がっていくことだけを目指している」と二項対立のままで向き合い、以後、なぜか医学的見地を完全に排除して心理的な物語だけで理解しようとする。そして、当然のことながら理解できず、結局は発達障害者をひどく貶めることになるのである。これは自分の思うがまま、つまり恣意的に「表象」していることになりはしないか。支援する側やその擁護者が己の優位な立場についてここまで無自覚でいられることに危惧を感じざるを得ない。

ちなみに村上靖彦の『自閉症の現象学』(2008)においては、人称代名詞の「あなた」が含む意味は次のようなものである。

他者の感情はある程度まで自ずと感じられるが、他者の思考が私によって所有されることはない。相手が怒っていることはいやでもわかるのに、相手が何を考えているのかは、絶対にわからない。つまりここにあるずれが残る。(…)

私が感じ取った相手の感情と、相手自身の思考・体験のあいだにはずれがあるのではないか。この疑いが生じるとき、「不可知」の他者が生じる。他者自身の体験は、私には絶対に体験できない底知れない物自体、得体の知れない現実である。この現実を名指す標識として、「あなた」という人称代名詞や固有名で表される人格が措定される。「あなた」が本当のところ何者なのか、何を考えているのか知ることはできないのだが、そのようなものとして、人称代名詞や固有名は使われる。とはいえ、日常的には「あなた」という言葉を使うことで、この得体の知れない部分にはふたがされ、意識しなくてもすむようになる。「あなた」という概念で現実 is 隠蔽される。「あなた」は、これこれの感情や意図を持つと、(本当のところはわからないが) 便宜上見なされる。こうして固有名詞と人称代名詞を使った日常的なコミュニケーションが可能になる。(村上 2008:169-170)

人が一般的に用いる「あなた」という人称代名詞に関する現象学的分析による意味というよりはむしろ、皮肉にも山本は文字通り『『あなた』が本当のところ何者なのか、何を考えているのか知ることはでき」ず、「得体の知れない部分にはふたがされ、意識しなくてもすむようになる」がために「あなた」という語を選んだようにさえ思われる。当該文献は福祉川柳を掲載した機関誌のように、だが一般に向けて出版・販売されてしまった、支援職の立場から支援職に向けて支援職の視点だけで語られた、被支援者側が読んだらどういう気持ちになるかということ「想像」できない「支援職のナラティブ」である。以下に詳述する。

### 3.3.3 執拗な診断否定とナラティブ・アプローチの失敗

「はじめに」から最後の第9章までに登場する障害者は約20名であるが、発達障害ではない者も含まれる。執筆時期の異なる論文をそれぞれ元にした各章における山本の立場とインタビューの場については明記されていないが、第1章に「現在、私は月に数回ではありますが、複数の知的障害者支援施設でスーパーバイザーの仕事をしています」(12)、第4章の元となった前出の論文においては「私は知的障害者自立支援施設で心理士として働いている」(森岡他 2014:169)、当該文献の第4章では「就労支援施設」(71)とあり、他の章では「施設」(第2章、19)、「障がい者支援施設の就労移行支援事業」、「就労移行

支援事業所」(第5章、77,78)、「ある就労移行支援の事業所」(第6章、118)といった書き方がされている。当該文献の出版時点における著者の肩書は臨床発達心理士と近畿大学教職教育部准教授である。

当該文献の中で特に印象に残るのは、障害受容ができずに施設職員に失礼なことを言って嫌悪されるアスペルガー症候群の若者(第4章)や、暴力をふるう知的障害のある若者(第5章)であり、中高年の登場人物もほぼ知的障害のある者ばかりである。謝辞に「おおよそ20年の間に200名を超える方々がお話を聴かせてくださった」(181)とあるが、現実の発達障害者像とは大きく異なり、一般企業で働いている当事者は30代のたった1名(第6章、195-114)しかおらず、知的障害のない一般就労の中高年に至ってはただの一人も取り上げられていない。

「知的障害者自立支援施設」や、通常、知的障害者も発達障害者も同じ場に詰め込まれている「就労支援施設」、「就労移行支援事業所」などのみに関わった経歴からは仕方がないことなのかもしれないが、福祉施設における知的障害者を中心とした調査であるのなら、その旨をサブタイトルなりまえがきなりで明記しておくべきではないだろうか。会話の成り立ちにくいカナー型の古典的自閉症ばかりが知られていた昭和の時代と違い、今や学校でも職場でも身近にアスペルガー症候群を含む知能の高い高機能発達障害者が健常者とともにあり、そこで起こる齟齬が問題となっているのである。当該文献に限ったことではないが、タイトルに「発達障害」の語を冠するのならば、知的障害を伴うのはもともと自閉症者の約4分の1のみであり、全人口の10%の自閉症スペクトラムの者のうち確定診断を受けたASD者だけでも知的障害がないケースの方がはるかに多い現実を踏まえ、「援助者」、「専門家」として最低限正確な啓発を目指し、偏った印象を与えないよう配慮して然るべきであろう。

しかし、適切な啓発どころか、当該文献は特に知識のない一般の人間が読むと、発達障害者は知的障害あるいは重度の社会性の障害のどちらかまたは両方を伴い、かつ「性格の悪い人」(74)であり、施設職員に多大な迷惑をかける、という内容が刷り込まれてしまうような構成になっている。さらに、これらの登場人物を使って山本は、発達障害は悪いものだから障害受容は難しい、と受け取られる内容を繰り返し主張する。

(…) 彼らの多くは、幼いころからの育ちの中で障がいがあると気づかれず、しかし何らかの生きにくさを抱えながら成長し、大人になってから障がいという診断を受け

た人々です。しかし、彼らは障がいという診断を自分たちの人生にいきなり侵入してきた「(彼らの言葉を借りれば)違和感をおぼえる何かわからないもの」だととらえ、排除しなくてはならない、受け入れがたい理解できないものとして診断そのものにこだわることがあります。そして、生活のためや就労するときのために障がいの診断を「自分を守る道具」として使わざるを得ないことに苦しみ生きている人々もいます。彼らは、「障がい」という診断によって、自分自身の人生を「生きられていない」と感じることがあります。そして、この「何かわからないもの」を彼らの人生の外側から「突然やってきた」と考えています。(70)

吉村さん（引用者注：第4章のアスペルガー症候群の若者）のように中途から障がいの診断を受け施設を利用する人々の中には、「自分が人とうまくいかず仕事を転々としたのは、『障がい』があったからなのだ」と納得し、施設での研修に前向きに取り組もうとする人もいます。しかし、「なぜ自分が」という思いから逃れられず、次々に不適応行動を繰り返し、家族や職員、そして自分を攻撃し苦しむ人も少なくありません。(71)

私はかつて、障がいの診断を「受け入れがたい」「自分のどこがそうなのかわからない」と語る子どもの声を聴きました（山本、2011<sup>17</sup>）。そこで子どもが語ってくれた思いと吉村さんの思いが重なるように思いました。

吉村さんにとって、「障がい」はそれこそ、外側から急に自分の内部に侵入してきた受け入れがたく、違和感をおぼえる不確かなものであったのでしょう。(73)

吉村さんだけではなく、施設を利用する他の発達障害の人たちからも、「障がいと言われたことで、いままでの自分は何だったのか整理できない」「いらいらする」「何かに腹が立つ」といったネガティブな語りが出てくることは珍しくありません（山本、2014<sup>18</sup>）。(75-76)

---

<sup>17</sup> この出典は次のものを指す。「山本智子 2011 子どもの「問題行動」の背景にある「本音」—様々に語り直される「本音」をどう聴くか 発達. 127. 46-59.」(196)

<sup>18</sup> この出典は以下のものである。次の引用文の「(山本、2014:170)」についても同様。「山本智子 2014 当事者研究—伝えたいことを伝えていくために 森岡正芳・大山泰宏 (編) 臨床心理職のための「研究論文の教室」—研究論文の読み方・書き方ガイド 臨

山下さん（引用者注：第 5 章に登場する広汎性発達障害の 20 代男性）だけではなく、高校・大学や専門学校などを卒業した後に離転職を繰り返し、成人になってから障がいの診断を受け、事業所や施設を利用する人も増えてきました。中には、前述の森井さん（引用者注：同じ章の 20 代の知的障害のある発達障害者）のように、どうしても自分自身の障がいを受け入れることができず、事業所のスタッフや施設の職員を責める人も珍しくありません（山本、2014:170）。（96）

山本は「少なくありません」、「珍しくありません」と繰り返し語り、障害受容についての肯定的なケースには触れていないが、年齢層の偏りや知的障害の有無による意見の偏りの可能性を「専門家としての『私』」でありながらなぜ一顧だにしないのであろうか。発達障害の確定診断は、理由もわからず他人から責められ非難され続けてきた当事者を救う役割をも果たすものであり、山本が紹介するようなマイナス面ばかりではない。1.1 で触れた「山梨県立こころの発達総合支援センター」の本田（2013）は次のように述べる。

狭義の自閉症スペクトラム障害の人たちにとって、早期発見が重要であることは言うまでもありません。しかし、自閉症スペクトラムの特徴が弱い人たちのうち、非障害自閉症スペクトラムとなるか、深刻な二次的問題を併存するかの予測が難しい現在、早期発見と早期支援によって、少しでも二次的問題の出現を予防することは、倫理的に見てもきわめて意義の高いことです。（本田 2013:114）

このように、早期発見の重要性は精神科医によるものをはじめ多くの文献で指摘されている。乳幼児期や児童期に発見される場合に比べると 20 代は「早期」には当たらないのかもしれないが、40 代、50 代で初めて診断されるケースが増えている現在、既に抑鬱状態等の二次障害を起こしている上記のアスペルガー症候群の青年の吉村の場合など、具体的な方策が立てられるという点で医学的、社会的双方においても診断は非常に重要である。この点についての山本の指摘はほとんどない。

その上、『なぜ自分が』という思いから逃れられず、次々に不適応行動を繰り返し、家族や職員、そして自分を攻撃し苦しむ人も少なくありません」という部分の前後の箇所では、吉村が施設職員にいかにも理不尽に見える憎まれ口を叩いたり備品を壊したりすることや、専門知識もなく適切な対応もできずに施設の利用者である吉村に対する誹謗中傷は平気で行う施設職員の語りはそのまま書かれているのに、吉村が「自分を攻撃し苦しむ」場面には触れられていない。これではまるで、K という女子大生が周囲の人間から精神病患者として扱われるようになるまでの経緯を自称「友だち」のインタビューを通して分析した論文「K は精神病だ―事実報告のアナトミー」においてドロシー・E・スミスが言うところの、「一体何が起こったのかを決定するのに関係があると思われた出来事を記録したもの」（スミス 1978/1987:84）にすぎない。言い換えれば、ここでの山本の読者に対するメッセージは、「発達障害者は、診断を受ければ他人を攻撃する」である。一貫して、「障害受容のできなさが、発達障害者が支援者を攻撃する理由である」という風に読め、という指示が暗黙のうちに読者に向けてなされているのである。

スミスのこの論文が属する範疇であるところのエスノメソドロジーはアメリカの社会学者ハロルド・ガーフィンケルが創始・命名したものであり（ガーフィンケル 1968/1987:17）、ジョージ・サーサスによれば、社会の成員が日常生活の世界の中で実践的な行為を成し遂げるためにどのような方法を用いているのかという「日常生活の方法論」を記述・分析することである（サーサス 1988/1995:12）。特にスミスはその論文において、上述のようにインタビューが起こった通りの出来事を記録したものではなく「一体何が起こったのかを決定するのに関係があると思われた出来事を記録したもの」であることを問題とし、「カテゴリー化」及び「逸脱カテゴリー化」、「予備的な指示」、「解釈の権威づけ」、「状況の特定化」など、いかに多くの戦略を用いて「友だち」であるはずの女性が K という自分達とは異なる言動を見せる、限りなく発達障害に近い他者を排除する「切り離し手続き」を行っているかを分析している（スミス 1978/1987:91-134）。「予備的な指示」と「解釈の権威づけ」については以下の通りである。

### 予備的な指示

(…)



一、Kが「精神病になりつつあること」が最初から一つの事実として主張され、それが一貫して保たれていること。これと同じ構成は、このテキストのさまざまな点でなされている。(…)

二、私たちはまた、これ以降のKの行動の記述の読み方についても予備的な指示が与えられている。つまり、「精神病になりつつある」者の行動として読めという指示である。これは私が次に明らかにしようとする「解釈の権威づけ」に対して重大な効果をもってくる。

Kの行動を「奇妙だ」、「おかしい」等々として読めという指示は、この報告の最初から最後まであちこちに繰り返し出てくる。(…)

### 解釈の権威づけ

(…)

こうして、いつも重要な問題として出てくるのは、ある一つの解釈がどのように権威づけられ、実際に起こったことの解釈として他者に扱われるのかということである。これに対応して重要になってくる手続きとは、それ故、誰が定義を下す特権を付与されるのか、また可能性としてそれと食い違う情報源や、それとは別のさまざまな解釈をどうやって排除するかである。(…)

(…) アンジェラは語られてゆく出来事を初めからずっと観察した者の一人として登場している。私がこの報告をどう読んでいったか今振り返って反省してみると「アンジェラに対して不信を抱くのを自発的に回避する」効果のようなものが働いていると思われる。すなわち、私は物語の語り手の判断を優先して、自分自身の判断プロセスを一時中断したり、かっこでくくったりする傾向があった。読み手／聞き手はいつも「あなたはそこにいなかったのに、いったい何がわかるというの」という挑戦に無防備なのだ。(前掲:106-110)

当該文献における指示は「『精神病になりつつある』者の行動として読め」というものではなく、登場する発達障害の若者の言動を「私たち」支援者に忍耐を強いる迷惑な者の行動として読め、ということである。そのための伏線として、発達障害者の問題行動はすべて診断が悪い、それをきちんと受け入れられない本人が悪い、という記述が繰り返されるのである。解釈の権威づけについては、人類学で言えばクラパンザーノがギアーツら

を批判してほぼ同様の内容を、「彼らは皆、自らの記述の精確さを読者に、そしておそらくは自分自身に、納得させるために様々な修辭的戰略を用いる」というように述べている。

「それらの諸戰略のうち第一のものは、民族誌家の權威の設定である。彼らは記述される出来事に立ち合い、彼には知覺能力があり、彼は『公平無私』な見方が出来、客觀性と誠実さを兼ね備えている」(クラパンザーノ 1986/1996:97)。

先の山本の引用文にも、「彼らは障がいという診断を自分たちの人生にいきなり侵入してきた『(彼らの言葉を借りれば)違和感をおぼえる何かわからないもの』だととらえ」、「彼らは、『障がい』という診断によって、自分自身の人生を『生きられていない』と覚えることがあり(…)この『何かわからないもの』を彼らの人生の外側から『突然やってきた』と考えて」、「障がいの診断を『受け入れがたい』『自分のどこがそうなのかわからない』と語る子どもの声」、「吉村さんにとって、『障がい』はそれこそ、外側から急に自分の内部に侵入してきた受け入れがたく、違和感をおぼえる不確かなものであった」(70,73、傍点引用者)などの記述があるが、これは幼い子供や若者など一部の者に限られるのではないだろうか。中高年 ASD 者の視点で見れば、山本の表現は甚だ特異であり、既に得られた幾多の ASD 者による通説とは真っ向から対立する。

田中千穂子(2009)は、世界初の自閉症者による手記(共著)を著したテンプル・グラディンにとって診断は「啓示であり、気持ちを落ち着かせる恵みでもあった」こと、『変光星—ある自閉症者の少女期の回想』(1996)、『平行線—ある自閉症者の青年期の回想』(2002)を出版した森口奈緒美が「喉から手が出るほど」「診断が欲しかった」こと、後述するアスペルガー症候群の藤家寛子が自分の怠慢のためにできないのだと自分を責め続けた日々から診断によって解放されたこと、同じくドナ・ウィリアムズが診断を契機に「自分の人生をもう一度たどってみよう」と世界初の自閉症者による単著の自伝を出版したことを指摘している(田中(千) 2009:256)。

高機能広汎性発達障害をもつ人々にとっては、これほど自分を説明することばとの出会いは衝撃的であり、そしてわけのわからない「何か」に押しつぶされつづけた日々からの解放を意味することなのでしょう。(前掲:256、傍点引用者)

このように、診断は障害受容の観点からは良い点、悪い点どちらもあるにせよ、明確な「解答」であり、名前もなく原因もわからず宙に放り出された状態で理不尽ないじめや叱

責、軽蔑、侮辱等を受けねばならなかった発達障害者の長年の不遇の方こそが、どう考えても「何かわからないもの」である。物心ついて他者に奇異な目で見られることに気づいてから診断を得るまでの期間が、「わけのわからない『何か』に押しつぶされつづけた日々」なのである。それに反して診断や「障がい」の方をここまで悪いものとする山本の手法は差別的ですらある。

『自閉っ子』シリーズ等の著書で有名なアスペルガー症候群の翻訳家ニキ・リンコは、「所属変更あるいは汚名返上としての中途診断一人が自らラベルを求めるとき」という文章の中で、「小児期から障害の自覚があった場合と中途障害の場合とで障害の受け止め方に差があるのであれば、『障害が先天性なのに診断は中途』の人々に共通の、第三のパターンがあっても不自然ではない」（ニキ 2002:176）と、複数のパターンがあることを前提に発達障害当事者の障害受容についてきめ細かに論じ、「未診断で成長した軽度発達障害者が成人後に診断を受けると、安心した、救われたと語ることが多い」（前掲:194）と述べている。山本と違って発達障害者側に寄り添うルポライターや医師による文献からの引用文を下記に記す。最初のもは 39 歳の女性の言葉である。

子どものころから何か人と違うけど、何がどう違うか、何が原因か分かりませんでした。（…）

（…）心理テストや知能テストを受けて、一カ月でアスペルガー症候群だと診断されました。「謎が解明できた」と思って、ホッとして涙がボロボロ流れました。人とどうして違うのか、理由が分かってホッとしたんです。

（…）無理して人に合わせようとしていたけど、診断を受けて、ありのままの自分でいいんだと思いました。それまで、自分のこの性質の違いのせいで、みんなから非難されてきました。「家庭環境のせいだ」と言われたりして。原因が何か、ハッキリしなかったんです。なぜ「あなたはなんかちょっと変だ」と言われなくてはならないのか分からなかった。（…）この世の中は私にとって、生きにくいと思っていました。（…）

だから、診断を受けて理由が分かってホッしました。（池谷編 2013:320-321）

同様に、娘のことで相談した友人からアスペルガー症候群について初めて教えられた時の、リアン・ホリデー・ウィリー（1999/2002）の言葉を引いておく。

(…) 末娘と私の正体を説明してくれる答えの数々が、そこにも、ここにも、そこらじゅうに見つかったのだ。とうとう私は手にしたのだ。理由を。説明を。それも、こんなに生き生きとした、納得のいく、手をのばせば触れそうなほどに現実味のある説明を。(…)

こうして自分の正体を知った私は、しだいに、周囲の人々にもぼつりぼつりこの話をもらすようになった。こんなに自信を持てたのは、生まれて初めての経験だったから。これまで言えなかったことを、ようやく、公然と口に出せるようになったのだから。(ウィリー 1999/2002:158-159)

高齢者の場合は、次のようなエピソードもある。

「変人と言われたまま死にたくない」と言って、受診される高齢者も複数います。そして、その数は発達障害の啓蒙活動が広がるにつれて徐々に増加しているような印象を受けます。そういった方々の中の一人に、70代の男性 B さんもいました。

生まれてからずっと「変わっている」と言われ続けてきたので、「発達障害という診断をしっかり受けて死にたい」とおっしゃっていました。人とは違った言動のせいで奥さんとの関係も冷え切っていて、発達障害の診断を受けてみるつもりだと伝えたとき、「あなたはそうだと思うよ。だから受診してきなさい」と奥さんから勧められたと言うのですが、それは、何十年も同居している妻との間で交わした実に何年ぶりの会話だったそうです。(備瀬 2011:32)

この B さんは発達障害の診断を受け、「自分が人と違うのは、発達障害の特性によるものであると知って、『これで変人との汚名をそそぐことができる』と言って満足して帰って」行ったそうである(前掲:33)。

また、LD と ADHD の例であるが、診断を受けた小学生の子供の親の立場からの声もある。記述しているのは前述の本田、備瀬と同じく精神科医である。

小学三年生くらいから、「読み書きの苦手さが際だって、とにかく読まないようになったのね。それが“読めない”ことに気づくまで、ちょっと時間がかかって、あの

ころはずいぶん厳しかったわ」と話され、「そこで診断を受けて、そうか、読まないのではなくて、読みにくい、ふざけているのではなくて、じっとできない、覚えようとしていないのではなくて、どうしても忘れてしまう、そういう傾向をこの子は持っているんだと知って、ちょっとほっとしましたね」と言われました。「だって、この子が反発しているのでも、わざと私を困らせているのでもなく、また、私の関わりが悪いせいでもないとわかったから」とその理由を話してくれました。(田中 (康) 2009:119-120)

言うまでもなく自閉症は長い間誤解されており、母親の育て方などではなく脳の機能障害が原因であると明らかになるまでは、多くの家族が苦しめられ追いつめられてきた悲惨な歴史がある。先に触れた「冷蔵庫マザー」説や、自閉症も「母原病」であるという誤った認識が過去に広く浸透していたことは、発達障害に関する専門家なら当然知っているはずである。

だが、ようやく時代は変わり、1.1 で述べたような「障害と認識されることもなく困難を抱えながら何とか生き抜いてきた」成人の ASD 者が診断を受け、少なくとも、いわば苦しみの原因がわからないという苦しみからは解放されたケースが多い現代においても、山本のように否定的な面ばかり強調する者がいるのも事実である。それはたまたま接したごく一部の発達障害者とのまともな支援関係の構築に失敗したからであろうし、あるいは自身の固定観念から成る「物語」にうまくあてはまらなかったからであろうとも考えられる。いずれにせよ責任転嫁であり、支援関係の構築の失敗の理由は決して支援職にではなく、障害受容ができない障害者側にあることになるのである。この山本の不自然で執拗な診断否定、障害否定は、『あなた』とは、私の目の前にいる障がいがある人の一部としてある人であり、私たちの相互関係の中で私たちの行為を反映する個人として現れてきた人を意味」と言いながら、当該文献第4章の「あなた」の素行の悪さは診断のせいであるとする大きな矛盾をはらんだ責任逃れの伏線になっているのである。

ちなみに、もしもナラティブ・アプローチを試みるのならば、診断がついたこの時に最もその可能性があったのではないのか。年若い当事者にとっては正体不明の災難がはっきり「障害」と名づけられ、本人の落ち度ではなかったと明らかになったこの時こそが、「物語の書きかえ」ができる契機となり得たはずである。

前述のように、ナラティブ・セラピーとナラティブ・アプローチで言うところのナラティブは、「現在の自分のアイデンティティと調和させるべく、記憶の中の過去を書き換え編集する」ことにより、「人が過去を理解するための方法を提供すると同時に、過去の経験を構築する」（リースマン 2008/2014:17）ものである。3.1.1 で「書きかえ療法」に触れたところでナラティブ・アプローチにおける「物語の再構成」（野口 2002:153-156）を挙げたが、これに失敗すると、再構成ではなく『問題の染み込んだストーリー』をただ再生産しているだけ』になってしまい、それは「ナラティブ・アプローチと『似て非なるもの』」であると野口は指摘している（前掲:154-155）。

アダルト・チルドレンの物語やトラウマの物語は、ある具体的な過去の経験がそのひとの現在の問題を生み出しているという説明形式をとる。この場合、ある過去の経験は、現在を説明する「本質的な要因」と考えられている。一方、ナラティブ・アプローチでは、過去の経験は現在の物語を構成するひとつの素材に過ぎず、物語が変わればその素材の意味も変わると考える。したがってそれは、「本質的な要因」ではなく、「物語を構成するひとつの素材」にほかならない。（前掲:155）

「ナラティブ・アプローチと『似て非なるもの』」の問題は、具体的には、「子供の頃、父親の暴力に怯えながら毎日を過ごしていたという経験が語られ、そこにいまの自分の『生きづらさ』の原因があるという物語が語られた」場合、「このような物語はあまりに明快すぎて、そのひとのさまざまな『問題』をすべて『親との葛藤』という原因に帰着させてしまう可能性がある」（前掲:153）という点である。『「なんでもかんでも親のせいにする』という批判に通じる問題」（前掲:154）でもある。

山本は ASD 当事者の施設職員に対する不満から出た言動までも、上記引用文の「ある過去の経験は、現在を説明する『本質的な要因』と考えられている」という原理を適用しているように思われる。ここで言う過去の経験とは、発達障害ゆえにいじめられたことや発達障害の診断を受けたことである。『「なぜ自分が』という思いから逃れられず、次々に不適応行動を繰り返し、家族や職員、そして自分を攻撃し苦しむ」という描写は、支援者側こそが、「なんでもかんでも」発達障害及び障害受容のできない当事者のせいになっていることを示しているとも言える。

勿論、実際に「なんでもかんでも」自身の障害のせいにする当事者も存在する。山本は次のようなエピソードを挙げている。

さらに、これは、私の実践から得た感覚ですが、いったん発達障害と診断されてしまうと、当事者自身も発達障害の定義を参照するので、どんどんその特性に近づいていっているような気がします。ある人は、「私は発達障害だから、約束を忘れてドタキャンしたり、メールに返事をしなくても気にしないでください」とおっしゃっていましたが、診断されるまでのその人はそうした傾向があったとはいえ、ドタキャンしないように気をつけたり、遅くなってもメールの返信をしていたので、周囲は違和感を覚えたそうです。症状に自分を近づけていく、これも診断の危うさの一つだと思ったりもします。(10)

「どんどんその特性に近づいていっている」のでも、「症状に自分を近づけていく」のでもなく、おそらく最初からそうなのである。多くの場合、幼い頃から周囲に叱責・非難されたり奇異な目で見られたりするために当事者は長年無理をして定型発達の文化に合わせねばならなかった。発達障害という診断がなされるようになった今やっと「解放」され、ウィリー（1999/2002）の言う「私の正体を説明してくれる答えの数々が、そこにも、ここにも、そこらじゅうに見つかった」という腑に落ちた状態である。富山大学の TCSI も記すように「本人がそれまでに担わされてきた不必要な自責感が軽減し」たからこそ、いわば羽を伸ばし過ぎているのではないのだろうか。TCSI の表現を借りれば、「障害受容ができたある当事者の心理を『甘え』『開き直り』と取るか、それともたとえば『解放感』という物語を通じて理解するかによって、その後の交流は大きく異なってくる」のである。ここでこそナラティブを介して本人の心理を理解しようとするればよいものを、山本は何の躊躇もなく「甘え」や「開き直り」とでも解釈しているような立場に立ち、診断否定の根拠に用いる道具として批判的な視線を当事者に向けている。診断の危うさなるものを懸念することは、その診断を受け入れた当事者のありようをさえ否定する危険性があることを認識すべきである。

本人が努力して「ドタキャンしないように気をつけたり、遅くなってもメールの返信をしていた」のは発達障害者からの一方的な定型発達者への歩み寄りである。健常者には難なくできる当たり前のことでも、発達障害者にとってはおそらく努力の賜物である。その

苦勞の反動で、今度は周囲が歩み寄れ、とこのケースでは当事者が無器用に主張しているようにも見える。無論それは行き過ぎである。「周囲は違和感を覚えた」のであれば、発達障害に関して理解や知識のある者が、当事者・非当事者の互いの歩み寄りが必要なこと、山本のような心理職でさえ理解や共感は期待できないのだからこのままでは本人の「わがまま」と受け取られて社会生活上不利になることを、本人に納得がゆくように説明すればよい。少なくとも臨床発達心理士がこのような非難めいた陰口という形で公表すべきではない。発達障害者が「ドタキャンしないように気をつけたり、遅くなってもメールの返信をしていた」、この努力が「専門家」、「援助者」によってさえ当然の前提となっていることに我が国の福祉・心理の専門職に対する教育・研修の貧しさ、知識の乏しさを実感せざるを得ない。

先に列挙した、障害を悪者に仕立て上げる記述の多くが見られる第4章の元となった文章（「森岡他 2014」）は、注釈 15 に記したように森岡正芳・山本智子「発達障害概念の社会性—一人は障害をどう生きるか」（『臨床心理学』第14巻第2号、金剛出版、2014）であるが、そこでは一応森岡によって診断の良い面も悪い面も無難な形で均等に触れられている。

特に大人になってから発達障害という診断を受けたとき、木本さん（引用者注：当該文献の後出の吉村純一にあたる）のような反応を引き起こすのはむしろ自然だろう。一方で、なぜ自分が人とつながりにくかったのか、ようやく分かった、納得したと自分のそれまでの苦しみからようやく抜け出したような形で、自分が分かるようになったという人もいる。以上の相反する自己のとらえは同一人の中でも揺れ動いている。おそらく木本さんもそうだろう。（森岡他 2014:172）

「障がいと言われたことで（…）ネガティブな語りが出てくることは珍しくありません」、「どうしても自分自身の障がいを受け入れることができず、事業所のスタッフや施設の職員を責める人も珍しくありません」と同趣旨の主張を執拗に続ける山本は、第1章「2 発達障害の語られ方」（4-10）の「診断のもつ危うさ」（8-9）という項で読者をミスリードし、障害受容による言動が定型発達に理解されなかったために周囲が「違和感を覚えた」先述の当事者に触れている「診断の影響力」（9-10）なる上記の項では、次のように読者を納得させやすい表現を用いている。



就労支援を研究している友人によると、年金や雇用などの制度的な側面からも診断がなければ適切な支援が得られないといったこともあり、どうしても診断を中心にその個人を考えがちになりますが、基本的には適切な支援によってその人の困難が減少すれば、もはや診断にこだわる必要はないということです。(9)

今は生きる上での困難を抱えながらも、他者からの適切な対応によって育っていくものだ と解釈できます。それなのに、なぜ、発達障害が個人の内部の問題であるかのようにとらえてしまうのでしょうか。その理由は、私たちが生きている場所での発達障害の語られ方にあるのだと思います。発達障害と考えられている障がいは自閉症スペクトラム障害、注意欠如・多動性障害、学習障害、チック障害などに分類・定義され、それらの原因が個人の脳の機能障害にあると診断基準などに書かれているため、彼らへの情緒的なかわりがどれほどの意味をもつのがわからなくなっているのかもしれない、彼らが生きる世界においては、私たちがかわりが大きく影響していることは確かなのです。(9-10)

ここでは「彼ら」になっているが、この直後の小見出しが「3 『あなた』という存在は私たちの行為を反映する」とまで自省的に名づけられており、第4章の吉村の話もかつての職場でのいじめや現在支援を受けている施設職員に対する不満であって、「私たちのかわりが大きく影響して」いる言動であるにとらえることができるのに、その不満の原因は結局、当事者が発達障害の診断を受けたこと、障害受容ができないことに帰着するのである。「脳の機能障害にあると診断基準などに書かれているため、彼らへの情緒的なかわりがどれほどの意味をもつのがわからなくなっている」という単なる理解不足、勉強不足や、後述する「心理的・社会的な文脈」(42) 云々だけへの着目が「もはや診断にこだわる必要はない」理由とされている。

しかし、何度も述べるように、肝心なところで「心理的・社会的な文脈」、「私たちのかわり」を完全に除外するという矛盾を露呈する第4章では、必然的に次のような結果になる。「心理的・社会的な文脈」の自身の主張を棚上げにして、ただ診断を無視し、障害を障害と認識しないということは、健常者のできることが障害ゆえにできない当事者の苦痛と苦悩を健常者の基準のみで判断してしまうことになるのである。このきわめて単純で有

害な事実、「専門家」、「援助者」であるはずの山本は最後まで気づかない。当該文献では医学的見解を完全否定するその言い分が、自分達心理職、支援職に都合のいいように「書きかえ」られていくさまが見て取れる。当事者にとって真に脅威なのは「診断のもつ危うさ」ではなく、ここで示されているような一部の支援職の危うさである。

### 3.3.4 医学全否定の根拠と支援者擁護の伏線

第1章の「2 発達障害の語られ方」(4-15)は次のような文章で始まる。小見出しは「中核症状と周辺症状」である。

私たちは「発達障害」をどのようなものだと考えているのでしょうか。「発達障害」をとらえる視点は多様にあり（引用者注：原文ママ）、その考え方の違いによってアプローチの方法も様々です。ただ、その中に、個人の生きている文脈や関係性などの要因を排除して、脳の中の問題としてのみとらえる視点があるとすれば、その視点から彼らが抱えている困難や生きづらさを考えることは難しいと思います。（4、傍点引用者）

これも一見もっともな言い分のようなのだが、「個人の生きている文脈や関係性などの要因」と「脳の中の問題」、すなわち個人の置かれた状況とその人の障害特性の両方に目を配らなければできないのが障害や疾患に対する支援である。片方を完全に無視する、つまり「脳の中の問題としてのみとらえる」ことも、「個人の生きている文脈や関係性などの要因」だけに注目することも、両方とも誤りである。だが、山本は極論を仮定した上で、一方の極から他方の極へと移る。当該文献全体を通して、脳の機能障害である発達障害から「脳の中の」「要因を排除して、」「個人の生きている文脈や関係性などの」「問題としてのみとらえる視点」で物申す、このパターンが続くのである。

第3章では、医療人類学者のクラインマンの「病の経験を聴き取ることで、生物医学的なモデルだけでは理解できない患者個人の内部にある患うことの『意味』を理解しよう」と（37）した姿勢等に触れて、「私たちはこうした近代科学の〈普遍性〉〈論理性〉〈客観性〉という原理にこだわることによって、人が生きる世界の中に現れる大切なものを見落とし、しまっているような気がします」（39）と、まず科学否定の結論を出す。「生物医学的な

モデルだけでは理解できない」のだから、「生物医学的なモデル」はまず前提となっているのだが、これ以降それは無視される。そして、他の引用も交えながらレイン、サリバン、ベイトソンなどによる個人間の「関係性」に肯定的に言及した後、次のような記述に至る。

ここで示したように、何かの疾患や障がいを経験する人はいは理論的な枠組みから説明するだけでは、実際の生活の場所で生きている人の困難や求めているものは見えてきません。人はそれぞれ、その人が生きている心理的・社会的な文脈に影響を受けた「説明するモデル」をもっています。そのモデルを聴くことがその人を理解することに繋がります。(42、傍点引用者)

傍点部分は再び極端な仮定である。発達障害においては脳の機能障害はその人の物事に対する認識の仕方そのもの、さらにそれに基づく考え方、行動特性、他者への接し方、あらゆる面に影響を与えるので、「医学的あるいは理論的な枠組みから説明するだけ」ということはあり得ない。「医学的あるいは理論的な枠組み」と「心理的・社会的な文脈」の両方を理解しておくことが重要であるのは、現場にいればわかるはずである。共著ではあるが自閉症者初の自伝を著した先述のテンプル・グランディンは、その障害特性、他者への配慮のなさ等の社会性の障害による苦労や、自閉症独特のこだわりや独創性による研究の成功、すべての人生経験をひっくるめた上で、次のように述べている。

もし、ぱちりと指をならしたら自閉症が消えるとしても、わたしはそうはしないでしょーなぜなら、そうしたら、わたしがわたしではなくなってしまうからです。自閉症はわたしの一部なのです。(サックス 1995/2001:362)

勿論、山本の上記引用文は、「医学的あるいは理論的な枠組みから説明するだけでは」足りないので「その人が生きている心理的・社会的な文脈に影響を受けた『説明するモデル』」も聴くという、一見もっともな記述である。だが、山本は相も変わらず車の両輪であるところの「医学的あるいは理論的な枠組み」を切り捨ててしまう。同じ第3章の「アスペルガー症候群の人との対話」(44-46)という項目で、アスペルガー症候群を世に知らしめ、自閉症スペクトラムの概念を提唱したローナ・ウィングによる詳細な説明を引用し、言葉の鸚鵡返しであるエコラリアや質問者の意図とは完全にずれた返答、言葉をまさしく字義

通りに受け取る例など、いわば教科書的な、しかし ASD 者に関わるならば知っておくべきコミュニケーション障害の基礎知識について延々と紹介した後、こう締めくくるのである。

以上のように、医学的観点からは、アスペルガー症候群の人はそうではない人のコミュニケーションと比べていくつかの点において「異質性」があり、その「異質性」がこの障がいの中核症状であると説明されています。彼らのコミュニケーションのスタイルは、障がいがない人々のそれと明確に区別される不変的な特性だと考えられていることになります。しかし、彼らの特性が実際の日常の生活場面のすべてにおいて、あるいは、あらゆる関係性の違いをこえて、同じように現れるのかどうかについては明らかにされてはいません。(45-46、傍点引用者)

またもや荒唐無稽な仮定を持ち出して後の自説展開へとつなげる手法であるが、アスペルガー症候群の障害特性が「実際の日常の生活場面のすべてにおいて、あるいは、あらゆる関係性の違いをこえて、同じように現れる」などという極端な現象は勿論あるはずはないので、「明らかにされ」るわけもない。たとえば身体障害であれば、「実際の日常の生活場面のすべてにおいて」寝たきりであるとか、四肢のいずれかが不自由なままであるとかいう状態は考えられるが、発達障害における常同行動やコミュニケーション障害が片時も決して途切れることなく起こり続けるというようなことが通常ないのは、通学・通勤している高機能 ASD 者を思い浮かべるまでもなくわかることである。

しかし、持論をわざわざ強調するために、山本は小学 4 年生の頃から知っているアスペルガー症候群の高校 2 年生の「優斗君」に行った数十問に及ぶ心理テストと雑談の際の挙動を、ウィングと並んで自閉症研究における最大の功労者であるウタ・フリスの古典的名著『自閉症とアスペルガー症候群』(1991/1996)を持ち出し、そこで挙げられている障害特性と一つ一つ比べては、少しでも異なる点があるたびに以下のように記述する。繰り返すが、ASD は障害特性の表れ方も範囲も個人によって実に様々であり、一人でアスペルガー症候群の全部の障害特性を具現する人間など存在しないにもかかわらず、である。

アスペルガー症候群の特徴として、「他者の感情や考えへの関心の欠如」があげられています(Frith, 1991/1996:185)。しかし、優斗君は雑談の中で曖昧な言葉を使用し、

他者の言葉の意味を理解した上での話題となっている他者への「思いやり」、あるいは自分自身に対する評価への「謙遜」ととらえることができる言葉が聴かれました。

(52)

(…)「でもちょっと」という曖昧な言葉によってそれを柔らかに否定し、違う側面があることを表現しました。(…) ジェスチャーを伴う「こっちの方も」という返答をしました。このジェスチャーに私は注目しました。なぜならば、ウタ・フリス (Frith, 1991/1996:185) が指摘する「アスペルガー症候群の子どもは感情や思考を表すジェスチャーや動作が乏しい」という特徴とは重ならなかったからです。

(…) 字義どおりに受け取るのではなく、「いえいえいえ」とそれを否定しました。

(…) 一般的な礼儀に従ったコミュニケーション形式をとっているように思えました。

(53)

山本の代わりに訂正しておくが、山本がフリスの著書から引用して「ウタ・フリス (Frith, 1991/1996:185) が指摘する」と述べている部分は、フリスの編著書『自閉症とアスペルガー症候群』の中でローナ・ウィングがハンス・アスペルガーとレオ・カナーの 1940 年代、50 年代の論文を要約して考察している文章「3 アスペルガー症候群とカナーの古典的自閉症」(pp.179-222) の一部である。該当ページで指摘しているのはフリスではなくウィングである。

いずれにせよ、これは自閉症史の始期に発見され、アスペルガーとカナーによって初めてきちんと論文の形で発表された特筆すべき顕著な特性である。これが現在もあてはまる自閉症児もあり、また、この特性については程度の軽い ASD 者もいる。上記の事実の指摘は別に良い。「優斗君」は山本がたまたま見た部分については生活上の生きにくさは比較的軽いのかもしれない。もっともこれだけでいかにも障害程度や当人の困難度が軽いのかのように決めつけるのは早計である。

問題は、山本がこれらの「優斗君」の比較的定型発達に近い挙動の列举によって、だから障害は軽い、障害特性は重視しなくてよい、「医学的あるいは理論的な枠組み」などよりも「心理的・社会的な文脈」のみに着目しよう、という極論を一般の読者に繰り返し刷り込もうとしている点である。先に山本も引用しているウィング『自閉症スペクトル 親と

専門家のためのガイドブック』(1996/1998)には以下の記述があるのだが、診断のみならず障害特性まで否定せずにはいられない山本には、当然これは無視されることになる。

臨床においては、自閉性障害の診断をする最も重要な理由は、個々の問題が幼年期から成人期までの発達上の難問を引き起こすからですし、また親たちや自閉性障害をもつ人自身がしばしば助けを必要としているからです。(ウィング 1996/1998:251)

山本の文献に戻ると、「あらゆる関係性の違いをこえて、同じように現れる」というのは、どんな相手に対しても同じ障害特性が顕現するということになるが、社会性の障害、コミュニケーションの障害は他者の存在があつてこそ生じ得るものであり、他者の対応によって適応の度合いが変わるのも言わずもがなである。『コミュニケーションの障害』に関しては、そもそもコミュニケーション能力を測る基準が、コミュニケーションの場で対峙している一方の人だけの能力をもって判定する方法論でいいのか」と、既に富山大学の発達障害学生支援担当の一人の西村はその責を当事者だけに負わせるべきではないと主張しており(西村 2010:205)、一般に触法発達障害者に対してさえ、障害特性が「あらゆる関係性の違いをこえて、同じように現れる」ものではないからこそ、その処遇を考え、更生に向けて周囲が努力するのである。以下に示す 2005 年の寝屋川教師刺殺事件の公判における十一元三医師による「証人」の証言としての解説と、たまたまアスペルガー症候群の少年との関係がうまくいった時の山本の感想は根幹の部分では同じことを述べているのに、その後に進む方向はあまりにも異なっている。

**証人** 従来の精神疾患と違って私たちが苦しむところは、(…)反社会的行動を示して更生する場合、自分のやったことをよく振り返り、内省し、自分自身の実感としてもつことができるようになり、そして更生に転換していくというのが現在の一般的な理解の仕方だと思うのですが、広汎性発達障害の人は事情が異なるという問題もあります。社会的に不適応を起こしたとき、悪気もなく、ぱっと重大行動を取ってしまう場合があります、反社会的というよりも、非社会的である故に重大事件が起きたと判断できることが多いのです。その意味では反社会性をもっている障害とは異なります。

彼らが更生を図る場合は、ハンディキャップが理解され、混乱のない生活を送るようになり、周囲からも受け入れられる人物として生活できるようになるわけで

すが、ただその過程が、先ほどの一般の少年たちがたどる内省を経て、というものと異なることが多いのです。しかしそれでも更生を図っている少年たちが、現におります。そこをどう理解するか、あるいは社会がどう考えるかは今後の課題であると考えています。(佐藤(幹) 2010:205、傍点引用者)

しかし、優斗君は緊張を強いられない場面あるいは制約を受けない状況の中では、苦手だと考えられている他者の視点に立った言葉を選んで対話をしていました。優斗君にはアスペルガー症候群の医学的なモデルだけでは説明できない部分があったのです。優斗君と雑談をしなければ、優斗君のアスペルガー症候群の特性以外の部分を見ることはできなかったと思います。

(…)

優斗君だけではなく、同じ診断を受けている人々も場面や状況によって、また、相手の違いによって、診断名だけでは理解できない多様な自分を生きているのです。(54)

アスペルガー症候群の者が周囲の環境によって落ち着いた生活を送ることができるのは周知の事実である。発達障害者は常時奇妙な障害特性が表れ、周囲が何をしても同じ反応しか返さぬような手のつけられないモンスターではない。従って、山本の記述する「優斗君」が「アスペルガー症候群の医学的なモデルだけでは説明できない部分があった」立ち居振る舞いを時折見せたこと自体に何ら医学的におかしい点はなく、障害特性そのものや診断の利点さえをも否定する理由には全くなならない。

しかるに、十一医師は「ハンディキャップが理解され、混乱のない生活を送るように」なれば「周囲からも受け入れられる人物として生活できるようになる」点を、触法少年の更生のために少年刑務所よりは発達障害への配慮が望める少年院に収容されるようにと証言しているのに対し、山本は、「同じ診断を受けている人々も場面や状況によって、また、相手の違いによって、診断名だけでは理解できない多様な自分を生きている」点を、施設職員に負担をかける発達障害者の「脳の中の問題」に対する配慮を取り払う根拠にしており、専門職でありながら「医学的あるいは理論的な枠組み」の知識の全くない場当たりの対応の顛末、すなわち、施設職員は発達障害者のせいで傷つきました、けれども私たちは障害がある人を支えていくのです、というような支援者側のけなげさを強調する記述で各章を終えてしまうのである。Morris(1991)や Hannaford(1985)が指摘した 1980 年代の

英国と変わらない支援職の欺瞞と偽善がここには伺える。

先にも引用した Jenny Morris は 1990 年代にフェミニズムやポストモダニズムの視点を取り入れて登場した第二世代のディスアビリティ・スタディーズの代表とされ（石川 2002:26）、著書 *Pride Against Prejudice* (1991)において、欧米における健常者側からの偏った表象について指摘している。Morris 自身は、フルタイムの大学教員となる予定であった 1983 年、1 歳の娘と暮らしていた 30 代の時に落下事故による脊髄損傷のため車椅子での生活を始めることになった (Morris 1991:1-3)。18 歳の時の登山での事故によりやはり車椅子の利用者となった 45 歳のインタビュー相手、Pam Evans が指摘する健常者の障害者に対する想定、すなわち障害者は自分の障害を恥じている、障害は障害者にとって生きる価値がないと感じるほどの重荷である、障害という経験から得られるものはない、など数十件に及ぶ表象の紹介の後に次のように述べている。

One of the biggest problems for disabled people is that all these undermining messages, which we receive every day of our lives from the non-disabled world which surrounds us, become part of our way of thinking about ourselves and/or our thinking about other disabled people. This internalisation of *their* values about *our* lives is discussed later.

Another important point to make is that, although Pam Evans is right in that overt hostility is not a common experience for most disabled people, it is yet the iron fist in the velvet glove of the patronising and seemingly benevolent attitudes which we experience. This is clear from the experience of those of us who step out of the passive role which society accords to us. (Morris 1991:22)

この “all these undermining messages”、すなわち健常者による障害者に対する否定的な想定が障害者の自己認識を浸蝕し、また、押しつけられた受動的な役割から抜け出そうとすれば慈愛にあふれた制裁が待ち受けているのである。80 年代の福祉や慈善がいかなるものであったか、あるいは障害当事者がどのように感じたかについて下記に引用する。同じく Morris が Pam Evans の言葉を引用している部分を含む。

Pam Evans calls anger ‘the ungracious response to offers of apparent help’,



arguing that

The reason for this response is likely to spring from the instinct that knows that the help on offer isn't quite what it seems: that it demands a return. This kind of 'help' is a way for those offering it to make themselves feel 'good'. Because they don't recognise their own motives, they project their demand for gratitude and the fact that we are being *used* to this end. We are obliged to participate in the charade by smiling our thanks and pretending that we are not being used. (…)

Generally, people offer help because this makes them feel good about themselves. It isn't surprising therefore that if we refuse to fall in with this, to make them the gift of our gratitude, that they respond with shock, surprise and sometimes hostility. (…)(前掲:34)

健常者は自分自身の気分が良くなるために障害者に援助の手を差し伸べるのであり、見返りとして感謝を受けることも当然視されている。その感謝という当たり前になされるはずのことが当たり前を示されない時、「援助者」はどうなるか。見た目にも不自由で重い障害を有する身体障害者によってさえ笑顔で感謝の念が表現されねば、支援者は被支援者に敵意を持つことがあるという。一見信じられない話のようであるが、我が国の福祉川柳事件の生活保護受給者担当のケースワーカーの例を見れば十分頷ける。まして、支援者には気づかない細かな事柄が気になり、着眼点の異なる ASD 者は健常者が期待する「当たり前」の反応をしない場合が多々ある。支援者側が発達障害者に抱く「敵意」の具体例を見ることにする。

### 3. 3. 5 施設職員の無知、心理士の無理解

「第 4 章 障がいという言葉に対する『違和感』」の「2 『なぜ僕は苦しむのだろう』」(70-76) で取り上げられているアスペルガー症候群の吉村純一(仮名・20 代)は、それぞれ 3~5 行ずつの 3 回に分けて書かれている本人の言葉と、それよりもはるかに多い就労支援施設の担当職員の笹谷美香(仮名・30 代)の 15 行と 11 行に及ぶ語りの他、本文

の解説中に引用されたこの同じ職員の約 10 行分の語り、さらに著者の山本による支援者の視点からの記述によって、その「不適応行動」を詳細に描写されている。

10 行分の笹谷の言葉を含む解説文は以下のようなものである。

吉村さんは笹谷さんの言葉には納得しませんでした。笹谷さんは、「吉村さんの気持ちがとても理解できるのだけれど、吉村さんの自分の人生への怒りがとても強くて。私に怒ってるんじゃないとはわかるのですが、私自身の職員としての能力のなさを責められているようで苦しくなりますし、答えに詰まることもあって、とてもしんどいです」と語っていました。また、「吉村さんのこういうところが、今までの離転職の原因になったのじゃないかと思うこともあります。とにかく、自分のことを対象化して見られず、何かうまくいかないと人のせいにする。ここが吉村さんの弱い部分なのでしょうね。ここにどうアプローチしていけばよいのか。とにかく何を言っても怒るし、依存が強いので、職員としての距離をとるのが難しいです」と困惑していました。そうしたある日、笹谷さんから相談したいことがあると連絡が来ました。(72)。

この章のこの部分は前述のように「私は知的障害者自立支援施設で心理士として働いている」(森岡、山本 2014:169)と書かれた論文が元になっており、その論文も当該文献も、ともに吉村が「就労支援施設を利用」(71)しているとある。アスペルガー症候群は知的障害を伴わない。吉村については公立高校から専門学校へ進学し、中堅の会社に就職後に「人間関係がうまくいかず離転職を繰り返した結果、抑うつ状態を示すようになり」、ひきこもった後、アスペルガー症候群の診断を受けて就労支援サービスを利用するようになったとある(71)。対人関係で失敗を重ねた挙句、診断のおかげでやっと原因がわかったという成人 ASD 者の典型的なパターンだが、本人が「僕がどうして障がいなのかいまだに納得いきません」(71)と言うのを、そこからがスタートであり、前向きに対策を立てねばならないことについて本人を納得させられるアドバイスを誰一人できていないのである。職員の相談を受けた「専門家としての『私』」であるはずの山本も同様であり、吉村を納得させるどころか、職員とともに発達障害者を批判する。

「吉村さんは笹谷さんの言葉には納得しませんでした」とあるこのやりとりを見ると、なぜ吉村が納得しなかったのかがわかる。吉村の言い分はこうである。

おかしくないですか？僕が仕事を転々としたのは、酷いいじめがあったからでしょう？抗議したって相手にされない。「お前が悪いから」って言われて、毎日毎日いじめられて、そこにずっといられる人って…。そういう人を「正常」っていうのなら僕は「障がい」かもしれませんが、それってやっぱりおかしくないですか？（71）

「正常」とされるものの方が実はおかしいのではないか、という重要な問いを発する吉村に対して、笹谷は、「吉村さんが訴えるたびに」、「『吉村さんの気持ちはわかります。でも、心理検査からは苦手な部分があるって出ているので、障がい云々とは考えないで、その部分をここでトレーニングをして、できるようになって、もう一度、社会に出ていく。そのお手伝いを私たちはしたいと思っているので、一緒に頑張りましょう』（71-72、傍点引用者）と答えたという。

ここには二つの問題点がある。発達障害者だけがおかしいとされることに対する疑問と抗議は健常者の視点を見直す契機となるはずであったのに完全に黙殺されている、という点と、もう一つは、障害特性ゆえにどうしても「できない」かもしれないことを、施設職員が思慮なく「できる」と言い放っているのではないかという点である。

確かに、早い時期から療育を受けていれば改善されたであろう特性はあるかもしれないものの、後述するが、発達障害に関する知識もない重度知的障害担当であった職員が高機能発達障害者をも担当するような就労支援施設でトレーニングを受けただけで、離転職を繰り返す状況に追いやられるほどの障害特性すなわち「苦手な部分」が「できるように」なるものなのだろうか。たとえば車椅子を使用している身体障害者に、「ここでトレーニングをして、歩けるようになって、もう一度、社会に出ていく。そのお手伝いを私たちはしたいと思っているので、一緒に頑張りましょう」と支援者が言い切る場合には、リハビリをして良くなる程度の障害であるという前提がある。はたして吉村の場合はそうであったのか、「医学的あるいは理論的な枠組み」を完全に取り払ってしまった山本は吉村の障害特性については何ら記述していないので、ここで描写されている吉村のきつく感じられる物言いからは、『障がい』ではなくて、ただの『性格の悪い人』だったら、私はぜったいにかかわりたくない」（74）と笹谷が語るような感想しか読者は抱くことができない。笹谷の専門職にあるまじきこの感想に対して、山本は一切批判も解説も加えていない。

続く笹谷のまる 15 行分の語りでは、吉村が人を怒らせるようなことを言った時に、もう少し言い方があったのではないかと、相手の気持ちになってみるように、というアドバイ

スしたところ、吉村に次のように反論されたエピソードと、それに対する笹谷の感想が述べられている。

「そこができないから障害なんじゃないですか。周囲が配慮するのが当たり前なんじゃないですか。僕が変わらなくちゃいけないんですか」(72)

吉村の言葉で笹谷は「すっかりわからなくなっていってしまい」、「あれだけ、障がいに対する抵抗があつて毎日毎日私に訴えて、私も一生懸命考えて、でも答えはなくて。なのに、なんかこういうときだけ『僕は障がいなんだから、周囲が配慮すべきだ』とおっしゃることに、私自身が参ってしまつて。なんか、都合のよい人だなと思つてしまつて…、職員はそんなことを思つたらだめなんではしょうけど、『ずるいなあ』という思いになつてしまいました」ということである(73、傍点引用者)。

「あれだけ、障がいに対する抵抗があつて毎日毎日私に訴えて、私も一生懸命考えて」という言葉から伺えるのは、あれだけ私もこの人のためにいろいろしてあげたのに、という「上から目線」の思い上がりである。施設職員に限ったことではなく、我々の日常生活における職場や友人関係、親戚関係などで人がこのような言葉を口にする時、その根底にはどのような思いがあるかを振り返ってみればよい。ただ、この場合は通常の職場の人間や友人、親戚と違い、確かに脳の機能障害のために健常者よりは何らかの不得手部分があり、それによって社会生活が破綻してきた相手である。笹谷は障害者の就労支援施設の職員であるはずなのだが、これではまるで発達障害について何も知らない素人の感想である。

勿論、素人のような職員の感想を紹介する意義もあるのかもしれないが、発達障害に関する文献として必要なのは、ここで、実は「都合のよい人」なのではない、必ずしも「ずるい」わけではないのだという医学的な説明である。「発達障害」と表紙に明記して広く書店に流通させる以上は、障害当事者が、我が子が、家族が、知り合いが「発達障害」ではないかと切羽詰まつて当該文献を手にする多くの人がいる可能性を想定するはずである。知識のない読み手にどのような印象を与えることになるかを常に考慮すべきであり、自称「専門家」の山本がここで念を押しておくべきは、世間一般で言うところの「ずるく立ち回る」ようなことが本当にできるならば、吉村は失職してこの場にいるような状況には陥っていないはずだ、ということである。ところが、科学・医学を軽んじる山本は、やはり

吉村の言動の障害特性による部分の解説はおろか、職員側の勉強不足や不適切な対応の可能性、反省すべき点などには触れず、次のような分析に移る。先の引用と一部重複する。

私は笹谷さんの話を聴いて、あらためて障がいという診断が個人の人生に大きな影響を与えるのだと考えました。私はかつて、障がいの診断を「受け入れがたい」「自分のどこがそうなのかわからない」と語る子どもの声を聴きました（山本、2011<sup>19</sup>）。そこで子どもが語ってくれた思いと吉村さんの思いが重なるように思いました。

吉村さんにとって、「障がい」はそれこそ、外側から急に自分の内部に侵入してきた受け入れがたく、違和感をおぼえる不確かなものであったのでしょうか。そしてそれは、周囲にいる他者からの自分に対するいじめともいえるような否定的な態度に対する自分の反応が、「障がい」と言われることへの受け入れがたさだったようにも思います。吉村さんにとっては、いじめに対して抗議を申し立てるといった当たり前の行動が「障がい特性によるもの」と言われ、ひとり世の中から「排除」されたように映ったのかもしれませんが。（73）

「…でしょう」、「思います」、「…かもしれません」という推測に満ちた、やや不自然な説明である。障害受容ができない理由が、「いじめともいえるような否定的な態度に対する自分の反応が、『障がい』と言われること」などに納得できないこととなっているが、単純に考えて、最初にいじめを引き起こしたきっかけの方が障害特性によるものではないのだろうか。吉村は「僕が仕事を転々としたのは、酷いいじめがあったからでしょう？抗議したって相手にされない。『お前が悪いから』って言われて、毎日毎日いじめられて、そこにずっといられる人って…」（71）と述べている。発達障害児・者がそのマイペースに見える言動などの障害特性からいじめの被害に遭うケースは多い。だが、山本は、そもそものいじめを引き起こした吉村の特性と周囲の無理解には触れず、いじめに抗議するという「当たり前の行動」が障害のせいにされる、といういかにも理不尽な印象を与える特殊なケースだけを根拠にしてまで障害の受け入れ難さを強調している。

第一、そのいじめ以外に「人間関係がうまくいかず離転職を繰り返した結果、抑うつ状態を示すように」なった（71）とあり、さらに、先天的な脳の機能障害である発達障害は

---

<sup>19</sup> この引用文献は次のものである。「山本智子 2011 子どもの「問題行動」の背景にある「本音」一様々に語り直される「本音」をどう聴くか 発達. 127. 46-59.」（196）

事故や疾病によって負った障害とは違い、決して「人生の外側から『突然やってきた』」、「人生にいきなり侵入してきた」、「外側から急に自分の内部に侵入してきた」ようなものではないのである。山本の担当する「あなた」達がそれまでにも十分苦しんだはずの障害について「突然やってきた」、「人生にいきなり侵入してきた」などと言い出したら、それをそのまま受け入れて煽動するのではなく、「そうではないことはあなた達が一番よくわかっているでしょう、ここからやっと自分の特性をきちんと把握して、周囲の理解を求めたり、できることは自分でやれるようにするなり、様々な対策が立てられるのです」とでも助言する役割を果たすべきである。ドナ・ウィリアムズもグニラ・ガーランドもずっと何かがおかしい、自分は人と違うという疎外感を抱きながら成長してきたことが自伝で明らかにされている。先に何例も紹介したように、ほとんどの成人 ASD 者は何かがおかしいと思うから診察を受けるのである。

施設職員の笹谷の言葉は発達障害についての知識のない素人の感想であると先に述べたが、これが 2 回目の 11 行分の語りになると、支援職とは思えないそのレベルの低さはさらに輪をかけてひどくなる。その前に、山本の解説文中にもあくまでも支援職が支援職側の視点のみから記した、吉村にとっては分の悪いエピソードがあるので、少し長くなるがまとめて引用する。

笹谷さんは吉村さんとの話の中で生じてきた複雑な思いを抱えながらも、職員として吉村さんの支援に懸命に尽力しているように見えました。吉村さんは施設で何度も何度も不安定になり、周囲の利用者さんを巻き込み、大声を出したり、備品を壊したりしました。そんなとき、吉村さんは笹谷さんに「僕がこうなるのは、昔のいろいろなことを思い出したりして、苦しくなるのです。フラッシュバックだと思います」と言い、笹谷さんが「辛いときには休憩をとってくださいね。ゆっくりやってくださったら大丈夫ですから」と答えると、「僕が落ち込んでしまったり、感情が不安定になったら、それは笹谷さんの支援がうまくいかなかったということですよ。僕が職員なら笹谷さんよりもっと上手に支援できます。もっと、利用者の立場に立った支援を心掛けるべきです」などと言われることがあり、「もう、職員を辞めたくります」と訴えることも増えてきました。笹谷さんは私にこう語りました。

難しいですね。発達障害の人は難しいです。今まで重度の知的障害の人の支援では感じたことのない感情が湧き上がってきます。言葉は通じ合っているはずなのに、どうしてもわかり合えないですね。どうしたらよいのでしょうか。たしかに吉村さんは、昔、大変だったというのは私も十分わかっているから、何とかこれからよい方向に進めるようにと一生懸命支援しているつもりなのに、それをちっともわかってくれないというか。本人に少し自分や周囲を見る力があれば、ずいぶんと違うんでしょうが、まったく、見えていないところがありますね。他人ばかり責めて、自分の悪いところが見えていない。こんなことを言ったらだめなんでしょうが、吉村さんがじつは「障がい」ではなくて、ただの「性格の悪い人」だったら、私はぜったいにかかわりたくないと思ってしまいます。(74、傍点引用者)

素人の感想であれば仕方がないが、当然のことながら発達障害でなければ独特な認知もこだわりも持たず、定型発達者から見た異質性を責められることも離転職を繰り返すことも抑うつ状態に陥ることもなく、今の吉村の個性や人生観とは全く違ったものになっているであろうから、吉村が「じつは『障がい』」ではなくて、ただの『性格の悪い人』だったら」などという仮定は空論であって無意味である。

笹谷は吉村には自分のことが見えていないと不満を繰り返し述べるが、通説である中枢性統合の弱さや執行機能（実行機能）の障害についての知識がないのだろうか。後述するように山本はこれらをあえて無視しているが、施設職員もそれに迎合するのではなく、心理士が役に立っていない時点で独自に複数の文献なりで学習すべきである。発達障害者にとって何らかの全体像を客観的に把握するのは障害ゆえにかなり難しいことの一つであり、「われわれが会う成人の高機能 PDD 者たちが、中枢性統合の先天的な弱さや、執行機能の障害をもっているとしたら、それらは彼らの自己ないし人間像の形成にも影響を与えることが予想される（…）。そもそもひとつのまとまりをもった自己が成立するためには、相応の中枢性統合が必要であり、それが弱いとしたならば、断片化された自己（らしきもの）にとどまる可能性もあるからである」（広沢 2010:42）と精神科医も述べているが、だからこそ統合失調症と誤診されてきたのである。

先に引用した数名やこの広沢のような発達障害への理解を深めるための著書を執筆している精神科医を除いては、「援助者」や「専門家」を自任している心理士や施設職員など

より、ルポライターの認識の方がよほど正確で公平である。以下は、先述の発達障害少年による寝屋川教師刺殺事件の経緯を詳細に追った著者の言葉である。

何度も述べてきたように、彼らは、この関係性や社会性において遅れをもつ。関係性の遅れが、言葉の持つニュアンス、語感、ひいては文化性を習得することの遅れとなってしまう。(…)

(…) 言葉の問題は、認知や認識、行動の問題にも深く関連する。彼らの認知が“部分”に集約し、“全体”を把握し、構成することが苦手だといわれるのも、ここにつながるはずである。(…)

これらのことを、自分を状況に応じて対象化する目をもっていない、「内なる他者」をもっていないと心理学的に言い換えてもよい。(…) これがまさに自分を対象化する目なのだが、少年は、なぜ“人からおかしく思われている”かが理解できない。しかし周囲からのまなざしや言葉は、容赦なくやって来る。その多くがからかいや侮蔑だということは、知的な遅れのない彼には理解できる。しかしなぜおかしいかが理解できない彼らは、そのギャップに苦しめられる。(佐藤 (幹) 2010:146-147)

笹谷のような施設職員という職種においては、新しく担当する者の障害がこれまでとは異なったものであろうとそれに合わせて勉強することはなく、たとえば統合失調症の患者に対しても、わかり合えない、自分を対象化して見ることができない、と健常者にできて相手にできないことをあげつらって不平不満を並べ立てるのだろうか。

心理職ならば発達障害者における「心の理論」の不足については知っているであろうし、その特性ゆえに統合失調症との誤診の歴史もある。「発達障害の人は難しい」というのは事実かもしれないが、それならば施設職員のサポート担当であると思われる「心理士」の山本が本当にすべきであったことは何であろうか。相変わらず山本は歯に衣着せぬ物言いをしてしまう吉村への障害特性を考慮したフォローも、「僕が職員なら笹谷さんよりもっと上手に支援できます。もっと、利用者の立場に立った支援を心掛けるべきです」とまで言わしめた職員側の何らかの対応の不備の原因や能力不足への言及も一切せず、発達障害者差別にも通じるいっそう無残な物語を組み立てるのである。

### 3.3.6 「私たち」には何の落ち度もないというナラティブ



吉村さんはときどき、重度知的障害の棟に行ってそこを利用する人たちに辛辣な言葉を発してくることがあります。職員からすればそこに吉村さんの苦悩は見え、「やはり発達障害だから人の気持ちがわからないのだ」と吉村さんに対して湧き上がってくる苦い思いを飲み込まなくてはなりません。なぜならば、そこに、言い返すことが難しい人たちをいじめている性格の悪い人がいるように見えるからです。しかし、他者をいじめる人は、自分が安定した満足できる世界を生きてはいません。自分の人生に苦しんでいて、その苦しみを自分より弱い人に向けるのです。こうした側面を見ることは、吉村さんの言動に辟易し、それでも指導をしなければならぬと思ひ込んでいる支援者には難しいことかもしれません。

笹谷さんは吉村さんのことで私に相談をするときには、必ず何度も繰り返し見てきた吉村さんのアセスメントの結果を前に置きます。笹谷さんの話を聴きながら、私にはそれがあたかも笹谷さんを守る「何か」のように見えることがあります。笹谷さんにとってそのアセスメントの結果が、「吉村さんは障がいだから仕方ない」と自分に言い聞かせるお守りのように見えるのです。(75、傍点引用者)

ここで生じる疑問をいくつか挙げたい。「他者をいじめる人は(…)その苦しみを自分より弱い人に向けるのです」とは山本の感想だが、それはきちんと笹谷に伝えたのか。「やはり発達障害だから人の気持ちがわからないのだ」という知識不足の思い込みについては指摘したのか。これは生半可な医学的知識である。ここでこそ、「医学的あるいは理論的な枠組み」だけでなく、山本の十八番の「心理的・社会的な文脈」を考えればよい。この施設で吉村に「心理的・社会的」に最も密接な関係にあるのは笹谷をはじめとする施設職員である。思い込みの医学的知識を訂正するとともに、柔軟な心理的・社会的文脈を施設職員によって構築すればよいではないか。だが、そのような作業が意図してなされたかどうかへの言及はない。

また、その施設職員はなぜ「吉村さんに対して湧き上がってくる苦い思いを飲み込まなくてはならぬ」なるのか。「なぜならば、」以下は論理的につながっていない。「性格の悪い人がいるように見える」のならばなおさら、同じ施設内のトラブルであるのだから、職員は自らの職務として悪いことは悪いと毅然と注意すべきである。それすらもしないのな

ら、事の真相は、発達障害者にわかるような適切な指示が出せない、納得させられるような指導力や人間性がないということではないのか。

さらに、「吉村さんの言動に辟易し、それでも指導をしなければならない」ではなく、「指導をしなければならないと思い込んでいる」とあえて言う山本の意図は何なのか。仕事なのだから思い込みではなく、現実には指導はしなければならないはずである。辟易すれば指導は放棄してもいいのだ、という含みでもあるのだろうか。しかも、「辟易し、それでも指導をしなければならない」とは、いかに発達障害者がお荷物で迷惑な存在であることを繰り返し山本は読者に訴えかけているのである。山本の特徴ある表面的には発達障害者を鷹揚に庇うような優しい語りによって読者に伝わる内容が、「発達障害者は支援者にとってどうしようもない面倒な存在だ」というただこの一点に収束するのは、ここでも同様である。

発達障害者は敏感である。「苦い思いを飲み込」んだり「辟易し」たりしている職員に対する拒否感情の表れこそが、上記の吉村の言動ではないのだろうか。先に述べたように、富山大学の TCSI が支援している発達障害学生は支援者の立場や状況を必要以上に敏感に感じ取っていることが多く、ある学生は「相手が考えていることが瞬時に伝わってくるので、自分の思っていることとコンフリクトを起こし、結果的に固まってしまい判断できなくなってしまう」（西村 2010:207）のだった。先の考察と重複するが、発達障害者支援センターでは、「当事者は、面談を通して自分を肯定的に理解してくれているかどうかにとっても敏感に反応することが多い。最も大切なのは、淡々としながら肯定的な態度で接し、興味深く傾聴する姿勢である」（高木 2014:304）、また、相談支援専門員の立場から、「初回の面談時にマイナスのイメージを抱かせてしまうと、その後の支援が滞ってしまうのも発達障害をもつ人たちの特徴であり、慎重な対応が求められる」（近藤他 2014:296）という、発達障害の特性を実に適確に表した提言がなされている。現在の知見ではこういった特性が発達障害者においてはしばしば見られることがわかっているのであるから、重度の知的障害者と高機能発達障害者を比べ、障害特性と人格を混同して『吉村さんは障がいだから仕方ない』と自分に言い聞かせる」ほどまでに嫌悪感を抱いているようなプロ意識のない笹谷の方に、先に相手を辟易させる言動があったと考えてよいのではないか。

山本自身、第1章の「知的障害者支援施設」の「スーパーヴァイザーの仕事」においては、「職員が『利用者の滝正人さん（仮名 50 歳代）に叩かれた。障がいの人の対応はとても難しい』と訴えてきた」（12）時に、吉村や笹谷に対するのとは全く異なる以下のような対応をしているのである。

「叩く」という行為の前に職員とのある種のやりとりがあったことは確かです。そのため、こういう場合には「その前に何かありましたか」と職員に聞くようにしています。(…)この問いかけが次の支援に繋がればと思うので、現場で何かあったときには、その前のやりとりの中で「自分たちの対応がどのようなものであったか」を意識してもらうようにしています。

本当に何もないときに突然大声を出したり暴力を振るったりなどの行為がみられることもあり、職員は過去の経験からのフラッシュバックだから本人の問題であると解釈しています。しかし、もし、フラッシュバックだというのであれば、かつて「あなた」の歴史の中にフラッシュバックを起こすような出来事や思いがあったのでしょうか。そして、どんな出来事や思いにもどのような形であれ他者の存在があったのだと思います。(13)

「フラッシュバック」については吉村も明言しているのだが、知的障害者と高機能発達障害者に対するこの対応の差は何なのだろうか。笹谷に対しては、山本は『自分たちの対応がどのようなものであったか』を意識してもらうようにして「いたとはとても思えない。それどころか、後に論じるように発達障害当事者への明らかな責任転嫁に堕する。

この引用箇所は前述の山本による「あなた」の定義にあたる、以下の部分のすぐ次の項である。

私が当事者である「あなた」をどのようにとらえているかといえば、何らかの事象を経験している人であると同時に「あなた」を取り巻く文脈や関係性、状況を含むダイナミックな存在として受けとめています。この本の題名では「あなた」という言葉を用いていますが、「あなた」とは、私の目の前にいる障がいがある人として現れてきた人であり、私たちの相互関係の中で私たちの行為を反映する個人として現れてきた人を意味します。(12)

先に、『あなた』とは、山本達との支援関係において関わる一部の障害者、それも支援者の「行為を反映する」障害者を指すと解釈した。この重度の知的障害者の場合はそれに該当する。「滝正人さん」は「少しいらいらしてきた職員」が『早く立って行きましょう』

と強い口調で手を引っ張ろうと」したので「職員の手を払いのけ叩いた」(13)とある。因果関係が非常に明確である。この当事者は、「私たちの相互関係の中で私たちの行為を反映」しているにすぎない。

しかし吉村の場合は、独特の着眼点やこだわりなどの医学的見解による解釈を捨て去ったがために、本人なりの笹谷を責める「理由」が山本達にはわからないのである。

「もっと、利用者の立場に立った支援を心掛けるべきです」と指摘する発達障害者と、そのような指摘に対して「吉村さんは障がいだから仕方ない」という誹謗中傷の公表に同意する施設職員、懇意の職員の私怨をそのまま原稿にして出版してしまう臨床発達心理士、互いの拒否感情が拒否感情を呼び、見るも無残な最後通牒の観を呈している章末の山本の語りが下記のものになる。前述の「吉村さんだけではなく、施設を利用する他の発達障害の人たちからも、『障がいと言われたことで、(…)ネガティブな語りが出てくることは珍しくありません(山本、2014)』(75-76)」という執拗な障害否定の一部に続く箇所である。

これは、自分を対象化して見られない「あなた」の「弱さ」だと受け取ることでもできるかもしれませんが、いずれにしてもそのような思いが、相談の場において、彼らの人生と一緒に考えていくことを阻害する場合も少なくはありません。「あなた」は、育ちの中での様々な苦痛を伴う経験が「障がい」によるものであったと言われすっかり自信をなくし、前を向く力を失っていることが多いからです。そして、自分たちが違和感を覚える「不確かなもの」を生きるために使わなくてはならない場合も出てきます。彼らの語りからは、「あなた」がいかに混乱し苦しんでいるのかが伝わってきます。

もし、「あなた」を取り巻く周囲の他者が少しだけ、「あなた」の生き方に関心に向け、「あなた」の声を聴いてくれるならば、「あなた」は自分の弱さに気づき、自らの力で克服していくのではないかと考えることもあります。そうであれば、「あなた」にとってそこに「障がい」という診断は必ずしも必要ではないのかもしれませんが。

しかし、一方で、「あなた」が育ちの中で抱えた「生きにくさ」を生きてきた結果生じた「あなた」特有のコミュニケーションに苦慮する支援者や周囲の人間にとっては、「障がい」という診断が、「あなた」と生きるために自分たちを守る「防波堤」となっていることも否めません。そして、この防波堤が、「私たちを「(発達障害がある)人の気持ちがわからない人間」にしていけないことを祈ります。(76、傍点引用者)

「心理的・社会的な文脈」ばかりを重視して理解不能に陥った挙句、「自分を対象化して見られない『あなた』の『弱さ』」を障害特性として配慮することもなく、発達障害者を健常者と同じ土俵に無理矢理上げて一方的に批判し、『『あなた』は自分の弱さに気づき、自らの力で克服していくのではないか』などと上から目線で劣等人種扱いしては根性論で無理を強いる、それが支援職の「ナラティブ」である。

ここでもまだ執拗に言及されている診断否定、すなわち「育ちの中での様々な苦痛を伴う経験が『障がい』によるものであったと言われすっかり自信をなくし、前を向く力を失っていることが多いから」、「そのような思いが、相談の場において、彼らの人生と一緒に考えていくことを阻害する場合も少なくはありません」という言説は、本人の障害受容のできなさが八つ当たりの攻撃の原因であって、発達障害者支援がうまくいかないのは決して心理士や施設職員の責任ではない、ということを念入りに主張しているのである。同様に執拗な障害特性の否定も、『『あなた』が育ちの中で抱えた『生きにくさ』を生きてきた結果生じた『あなた』特有のコミュニケーション』という記述に見られるが、おそらく山本が弾劾したい吉村の憎まれ口は、生きにくさの結果生じた部分もあるだろうが、そのようにしか話すことができない生来のコミュニケーション障害も、相手の意図がわからない心の理論の障害も影響しているはずである。それらを見做して何が何でも健常者と同じ土俵に引きずり上げれば、思う存分批判もできようというものである。

『『あなた』特有のコミュニケーションに苦慮する支援者や周囲の人間にとっては、『障がい』という診断が、『あなた』と生きるために自分たちを守る『防波堤』となっていることも否めません』というのは、山本自らが笹谷について『『吉村さんは障がいだから仕方ない』と自分に言い聞かせるお守りのように見える』と述べているのを受けたものであり、要するに、「粗暴な発達障害者の理不尽な言いがかりや暴力には本当に苦労させられるが、診断までついた障害者のやることだから、と自分に言い聞かせては我慢しています」という意味であると取れる。

「障がいだから仕方ない」と見下して言い切るところにまともな「支援」の成り立つはずがない。相手が話せばわかる同じ人間であれば「お守り」は必要ないのである。「権力の絶対的非対称性」が存するところに相互信頼関係は成り立たぬというのは福祉川柳事件に対する副田の言だが、ここでは支援関係も、人と人との関係さえもがそもそも存在していない。

『あなた』がいかに混乱し苦しんでいるのかが伝わってきます」というまるで他人事である観察記録は、その混乱や苦しみの原因、少なくともそれを助長させた要因が障害の診断だけでなく不適切な支援にある可能性をあえて完全に切り捨てたものである。自分達に落ち度がある可能性を無視して「防波堤」とまで言い切るのは、サイードの言うところの「西洋」と「東洋」の厳格な区分のように、障害者である「あなた」と支援者である「私」、「私たち」を分け隔てる壁を自ら進んで創り出したいがためである。「私」「私たち」／「あなた」の二項対立は、どれほど綺麗事で、もっともなように思われる意味を山本が持たせようとも、その本質は相手を人間と見なさない点にある。曰く、「オリエントの人間は、何よりもまず<sup>オリエンタル</sup>東洋人であって、人間であることは二の次だった」(サイード 1978/1993b:75)。

だが、発達障害者はオリエントのような甘美なものではなかった。権力関係の上位の立場から観察する材料、助けてあげる対象、ひいてはコントロールする客体、あえて言えば美辞麗句を連ねて自分の奉仕精神に酔うための素材にすぎないものが自分達に刃向かって来た時、すなわち「みずからの力とアイデンティティ」が揺るがされた時に急遽必要となるのが、防波堤である。「そして、この防波堤が、私たちを『(発達障害がある) 人の気持ちかわからない人間』にしていないことを祈ります」という文章ほど空疎なものはない。支援者は、「私たち」は人の気持ちかわかる心優しい立派な「人間」でありたいと言う。しかし、お守りや防波堤で自らを守らねばならないほど怪物や災害扱いされている発達障害者も、人間である。福祉川柳事件の加害者達と同様、ここでも「支援においては支援を受ける人間は支援活動の中心には置かれて」はおらず、「支援職はあくまで自分達支援職中心の視点しか持つことができない」のである。権力関係の末端にある発達障害者の抗議が、不勉強でも心理士や施設職員が務まる「制度の欠陥を示す」可能性にも思い至らず、吉村が発達障害の二次障害等でもしも入院でもすれば、笹谷はこう思うのだろう、「いつまでも入院しててね 発達障害」と。

### 3. 3. 7 発達障害がわからない人のナラティブを聴くー「支援者」の物語から学ぶ私たちのあり方ー

前項では、「吉村さんのこういうところが、今までの離転職の原因になったのじゃないか(…)」とにかく、自分のことを対象化して見られず、何かうまくいかないと人のせいにする」(72)、「都合のよい人(…)」『ずるいなあ』という思いになって」(73)、「一生懸命支

援しているつもりなのに、それをちっともわかってくれない（…）本人に少し自分や周囲を見る力があれば、ずいぶんと違うんでしょうが。まったく、見えていない（…）他人ばかり責めて、自分の悪いところが見えていない。（…）吉村さんがじつは『障がい』ではなくて、ただの『性格の悪い人』だったら、私はぜったいにかかわりたくない」（74）などの施設職員のナラティブ及び「笹谷さんの話を聴きながら、私にはそれがあたかも笹谷さんを守る『何か』のように見えることがあります。笹谷さんにとってそのアセスメントの結果が、『吉村さんは障がいだから仕方ない』と自分に言い聞かせるお守りのように見えるのです」（75）などという自称「援助者」のナラティブを福祉川柳さながら適切な解説なしにそのまま掲載した第4章を紹介したが、山本の名誉のために一見非常に素晴らしい理念を表した部分も引用しておく。

障がいがあって、自分の思いを口に出すことが難しい人との間に何かの対立やいざこざがあった場合、「彼の障がい特性がそうさせるのだ」「生まれ育った環境のせいで」などと外側から理論的に説明することがよくありますが、それらの自分の関与を横に置いた解釈が、彼らの「今」をどう支援したらよいかにつながらず、反対に彼らの人生に制限や条件を設けてしまうことになってしまいます。支援者自身がどのような思いや考え方、常識や価値観をもっており、それらが利用者を支援するときどのような形で入り込むのかを意識しておくことが大切だと思います。（…）

（…）こういった気づかない「私」に気づくためには、カンファレンスや事例検討会などを通して、複数の視点から見なければ見えないものがあるということを知ることが大事なだろうと思います。（第2章、20-21、傍点引用者）

「障がい特性」や「生まれ育った環境」という、特に ASD 者の内面に大きな影響を与える要因を「外側から理論的に説明する」材料としている点で誤ってはいるが、支援者側の「思いや考え方、常識や価値観」は当然考慮すべきである。ただ、ここでも専門知識だけで理詰めで人を見る過ちを恐れるあまりか、反対の極に走っている山本は専門職にとって絶対に必要な「知識」には触れない。知識のない「専門家」がどのようなになるかは前項で見た通りである。だが、支援者もこうあるべきだ、という点には一応触れてはいるのである。

繰り返し似たようなことが書かれてはいるが、次のような一節もある。「人の行為の背

景には『他者の存在』がある」(140-141) という項である。

人の行為は、他者との関係性の中で現れます。一人で「怒ったり」「恨んだり」「暴言を吐いたり」「暴力を振るったり」はしません。そこには必ず誰か他者の存在があります。(…)

発達障害がある人の中には、人の言葉や行為を自分を侵し、傷つけるものとして受け取る人がいます。これは、彼らの脳にその原因があるというよりも、彼らが人や環境との相互的な関係の中で「ネガティブな眼差しや扱い」を受け続けてきた結果生じていることとも考えられます。つまり、これらの具体的な眼差しや扱いを「内なる他者」として自分の内部に取り込むことによってさらに自らを苦しめ、他者と関係を結ぶことを恐れさせます<sup>20</sup>。

内なる他者は決して一人ではなく、複数の他者がその内部に含まれるはずです。私たちも「あなた」の「内なる他者」の一人になります。できれば、「あなた」が自分の人生を立て直し、怖いと語る世界に光を差し込ませることができるように傍らから「あなた」を支える他者でありたいと思います。(第7章、140-141)

まず、先にも引用したが元養護学校の教員でフリージャーナリストの佐藤幹夫が丹念に触法発達障害少年の心の軌跡と事件の経過を追った『十七歳の自閉症裁判―寝屋川事件の遺したもの』(2010)では、広汎性発達障害の少年は「自分を状況に応じて対象化する目をもっていない、『内なる他者』をもっていないと心理学的に言い換えてもよい」と述べている。再掲する。「これがまさに自分を対象化する目なのだが、少年は、なぜ“人からおかしく思われている”かが理解できない。しかし周囲からのまなざしや言葉は、容赦なくやって来る。その多くがからかいや侮蔑だということは、知的な遅れのない彼には理解できる。しかしなぜおかしいかが理解できない彼らは、そのギャップに苦しめられる」(佐藤(幹)2010:146-147)。

佐藤は幾人もの専門家や当事者の意見を記し、十一元三医師の証言も詳細に再現している同書と、『自閉症裁判―レッサーパンダ帽男の「罪と罰」』(洋泉社、2005)の著者である。限りなく発達障害当事者の立場に寄り添った記述に徹している。一方、山本は完全に

---

<sup>20</sup> ここで山本は「内なる他者」について浜田寿美男の1992年の著作『「私」というもののなりたち』について注釈に記している。



二項対立の非当事者の視点である。どちらの文献が発達障害者の実情に即しているかは言を俟たない。

だが山本が発達障害者の被害念慮を「彼らの脳にその原因があるというよりも、彼らが人や環境との相互的な関係の中で『ネガティブな眼差しや扱い』を受け続けてきた結果生じている」と医学的知見を無視して断言し、「私たち」も当事者を苦しめる「内なる他者」の一人になると言うのなら、なぜ第4章においては「私たち」すなわち山本自身と施設職員笹谷が吉村との相互関係から除外されているのか説明がつかない。一冊の文献の中でこれほどの矛盾を抱えた発達障害関連本に当事者としては困惑する他ない。

それでも、一般の読者の中には上記引用部分の最後の文、「できれば、『あなた』が自分の人生を立て直し、怖いと語る世界に光を差し込ませることができるように傍らから『あなた』を支える他者でありたいと思います」、このような偽善に満ちた表現に感動し、自分もそうありたいなどと思う人間が存在するかもしれない。

好井裕明は著書『批判的エスノメソドロジーの語り—差別の日常を読み解く』（1999）の中の「『施設』の語りかた—ある知的障害者『施設』長の言説分析から」という文章で、知的障害者は施設から出られないという主張を家庭崩壊や働くことの困難の問題と絡めてよどみなく説得力を持って語る施設長の言説を分析し、以下のように述べている。

たとえば、障害者福祉という問題に対してごく一般的な理解を示したり、共感をよせているひとびとであれば、おそらく、ほとんど違和感を感じることもなく、この一連の語りをそのまま聞き流してしまうだろう。だが一方で、語りの言い回しの一つひとつにひっかかり、違和感を覚え、一連の語りそれ自体が、障害者の存在を封殺し、彼／彼女の人間としての存在を傷つけていく、その意味で、到底承認することができない、と怒りを感じる人がいることも事実であろう。（好井 1999:196、傍点引用者）

また、同書の「『施設に暮らす障害者』という埋め込まれたメッセージ—あるTVドキュメンタリーが強制するカテゴリー化の解説」という文章は、『走れ車イス』という番組についての論考であるが、そこには施設で暮し、電動車イスでの外出を目指して頑張る障害者、「『理解ある職員』」や「『親切な地域住民』」（前掲:212）などが登場する。

このドキュメンタリーの「意図」をそのままひきうけた「好意的評価」や「賞賛」。

他方で「意図」の歪みを感じとった「批判的評価」や「憤りの情緒」。解釈の明確な対照性。というよりもより正確に言えば、圧倒的な「賞賛」と例外的な「批判」「憤り」というアンバランス。このアンバランスはどのようにして起こるのだろうか。(前掲:207、傍点引用者)

このように偽善に満ちた福祉・支援職という権力ある者によって操作されたストーリーを大多数の一般の人々は「違和感を感じることもなく」無自覚、無批判に受け入れ、あるいは賞賛さえするのかもしれないが、見る者が見ればどこかがおかしいと『意図』の歪み、怒りや憤りさえ感じさせる、その点は山本の当該文献も同様である。

当該文献の支援者の「ナラティブ」に戻る。第 6 章では、「支援をする人の傷つき」という項目を設けて、いっそう無知蒙昧な就労移行支援事業所の 5 名のスタッフのナラティブが特集されている。そのうちの 1 名のものは以下のごとくである。

#### ①簡単に崩れる関係

彼らとの信頼関係が簡単に築けたと思ってしまうような錯覚がありました。彼らは、いままで、学校や社会でつらい経験をいっぱいしてきて、この施設に来ている。だから「この人は私を頼っている」「私が理解し応えなくては」といった思いを強くもったのですが、それがじつは錯覚だったというか。何か、ほんの些細なことですぐに崩れてしまう。支援上で必要なことを言っただけであっという間に彼らの「敵」になってしまい、また最初からやり直し。彼らとの関係はすぐにわかり合えたと感じるし、築けたと感じさせるのだけど、実際にはすぐに壊れる。一見すると心が通じると思ってしまいうのですが、じつはそうではない。(118-119)

それが障害特性なのである。「ほんの些細なこと」とあっさり言い切っているが、発達障害者の中でも ADHD ではなく ASD 者の場合、それが途方もないこだわりの種かもしれないのである。だが、これに対する山本の解説は次の通りである。

(…) 彼らとの関係はスタッフの何気ない一言で崩れてしまうほど脆いもののように見えます。その理由を考えたとき、事業所を利用している人々は、すでに他者との間で深い傷つきを抱えている場合が少なくないからだと思いました。彼らの傷つきが深

いほど、初対面であつてもとても友好的に振る舞うことがあります。その態度からスタッフが「関係が築けた」と解釈してしまうことも自然なことです。しかし、いったん何かうまくいかないことが生じたり、スタッフから否定されていると感じれば、彼らは自らを守るためなのでしょうが、すぐに対立に転じます。そして、今までとはまったく異なる彼らの態度にスタッフは裏切られたと感じることもあるかもしれません。しかし、彼らが置かれていた背景を理解しながら、自分の支援に対する視点を定め、辛抱強く彼らとの付き合いを積み重ねていくことでしか信頼関係を築くことはできないのではないかと思います。(119)

①に関しては、前述の笹谷と同じく、私が何とかしてあげなくては、と発達障害者を一段低い者のように扱うパターンリズムをまず反省すべきである。山本については、「傷つきが深いほど、初対面であつてもとても友好的に振る舞う」と述べているが、それはやはり発達障害と必ずしも関係のない健常者の視点の一般論であり、アスペルガー症候群の積極奇異型という発達障害に関する基本中の基本知識を無視すべきではない。さらに、「すぐに対立に転じる」のも、支援を受ける側から見れば上の立場である職員に対して「自らを守るため」という側面もあるだろうが、発達障害者の場合は生活保護受給者と異なり、上述のように障害特性のこだわりをも考慮すべきである。職員の言動の何かがどうしても納得できないから「対立に転じ」るような状況に陥るのではないのかとも思われるが、ここでも施設職員の配慮のなさには山本は触れていない。「支援上で必要なことを言っただけで」という当の職員の言葉を載せているが、本当に必要なことをきちんと説明されれば発達障害者は必ずしも敵対などしないで納得する。嘘がつけないぐらいであるから、根は裏表がなく、単純なのである。支援に必要なのは、教育や医療と同じく支援者の確かな知識に基づく指導力と人間性である。

また、最後の文章は、「辛抱強く彼らとの付き合いを積み重ねていくことでしか信頼関係を築くことはできない」、つまり、支援者はそのような大変な努力をしているのだ、という読者への刷り込みである。発達障害者はやはり「辛抱強く」つきあつてやらねばならない厄介なものということにされるのである。「彼らが置かれていた背景」は障害ゆえに追いやられたものでもあり、障害特性とそれによって生じたトラブルの過程を知らずに理解も適切な支援もすることはできないはずだが、発達障害の医学的知識抜きで「自分の支援に対する視点を定め」とはどういうことなのか。支援者中心の視点だけで一体どのような効

果が上がるというのだろうか。医学的見地を手放したことで、当事者側の視点と歴史を理解することを放棄し、支援者側の論理に終始した、これが彼女らの問題なのである。

さらに、「すぐにわかり合えたと感じる」、「信頼関係が簡単に築けた」とあるが、一般に、成人同士で「信頼関係」をそれほど簡単に築くことができるものなのだろうか。健常者は、大人になってから知り合った生育環境も人生観も異なる他人といとも簡単に、「信頼関係」を成立させることができるのか。成人と子供ならまだ信頼関係は比較的容易に成り立つかもしれないが、なぜ「発達障害者」が相手なら、プロであるはずの職員が「わかり合えた」、「心が通じる」といとも簡単に思い込み、専門職であるはずの心理士が「スタッフが『関係が築けた』と解釈してしまうことも自然なことです」と肯定してしまうのだろうか。つまり、支援する側とされる側という関係には、成人と子供のような、信頼関係が成り立ちやすいと思わせる側面があるのではないのか。大人と子供の関係に類似した関係であると認識しているならば、すなわち支援関係は上下関係であることを支援職自らが認めており、「非対称的な権力関係、上下関係のなかで」「調査や命令の制度と相互信頼が両立するはずもない」（副田 2008:58,63）状況であるということになる。「調査や命令の制度」とは、支援の場合は支援の打ち切りや施設への出入禁止などの措置ができる権限に相当する。

「個人の生きている文脈や関係性」を謳いながら、「支援一被支援」という上下関係を伴う職員との「関係性」に対する根本的な考察が支援者側に全くない。そして、障害特性を無視した一般論で発達障害者の言動を何もかも解釈しようとしているにもかかわらず、「信頼関係」だけは、健常者の成人同士に関する一般論ではなく、まるで大人と子供の関係であるかのように自然に無自覚に発達障害者を子供扱いする、これを差別と言うのである。当該文献に登場するような福祉・支援職には、倫理面をはじめ、人としての根本的な教育が必要であると言わざるを得ない。

## 第4章 中高年 ASD 者のオートエスノグラフィー

### 4.1 オートエスノグラフィーとは

青年期のこのような体験と、第二次大戦中ナチスのユダヤ人迫害を逃れてアメリカ合衆国へ渡る、深刻さを諧謔でくるんだ筆致で描かれている体験を経て、先に引用した末尾の「壮大なペシミズム」の言葉も生まれてくるのだと思う。(川田 2001:17)

#### 4.1.1 参与観察とエスノグラフィー

参与観察を、たとえば精神病におけるフィールドワークを行った宮本（2001）は、人々の社会生活をその内部から観察し明らかにしようとする方法論的立場であるとし、「人びとの主観的世界を彼らが生きるままのかたちで把握しようとするエスノメソドロジーとも問題意識を共有している」（宮本 2001:32）と指摘している。英国のデイヴィッド・フランシスとスティーヴン・ヘスターは、大学の教科書としても用いられている彼らの著書『エスノメソドロジーへの招待』（2004/2014）においてエスノメソドロジーの特性を概観するにあたって、まずエスノグラフィーの隆盛の経緯を以下のように述べている。

エスノグラフィーへの転換が起こった主な理由は、人びとの主観、あるいはシカゴ学派／相互作用論学派の社会学者が「行為者の視点」と呼んできたものが社会生活のなかで果たす役割の重要性が認識されるようになってきたことだと思われる。言い換えれば、社会の研究における概念と知見は、それによって社会的な行為を説明しようとするのなら、その行為にたずさわる人びとがもつ意味や視点の理解に根ざしたものでなければならないということを、研究者たちが受け入れるようになったのである。（フランシス他 2004/2014:41、傍点引用者）

しかし、彼らはエスノメソドロジーとエスノグラフィーの具体的な相違点については次のように断じている。

エスノグラフィーにおける観察とは、研究者が研究対象にする人びとや集団についての社会学的知識を築き上げるための発見の方法のひとつにすぎない。この意味で、従来のエスノグラフィーは、観察者と観察対象になる者との区分にもとづく探究だといえる。エスノグラファー、つまりエスノグラフィーにたずさわる調査者は、研究対象となる場面や活動の参加者のひとりではあるだろう。しかし、そのエスノグラファーが参加者として何をしていても、それは何か別のことをするための手段なのであり、その意味で、彼または彼女はつねに外部者（アウトサイダー）なのだ。観察するという活動が、社会学者を他の人たちから隔たった存在にってしまう。観察者は必然的に、観察されている者より高い位置に身をおくことになるのだ。（フランシス他 2004/2014:42）

「何か別のことをするための手段」であるのはエスノメソドロジーも同様である。観察者が被観察者よりも高い位置にあるという点については、「文化人類学の植民地主義」（藤田他編 2013:26）、すなわち「『弱い』言語と『強い』言語関係に取り込まれざるをえない」「文化の『翻訳』」（クリフォード 1986/1996:39）という形でとうに指摘されている。だが現代は、オリエンタリストに数えられているフローベールや、トロブリアンド諸島民のことを見下していたマリノフスキーの時代ではない。宮本の報告をはじめ臨床社会学の実践記録をエスノグラフィーと呼ぶべきかどうかは疑問の余地があるが、我が国の身近な参加観察に関しては、あえて同じく社会学者の野口（2001）の言葉を借りれば、参加観察者の立場はあくまでもそのフィールドワークの場と本人の認識に大きく左右されると言っても差し支えないように思われる。

病院や保健所という場で、研究といえば、医学、看護学などの実践的な臨床研究を意味する。つまり、実際に患者にかかわり、臨床活動を行う人が「研究者」であり、そのような技能も資格ももたない「研究者」というのはありえないことだった。「専門家のようでいて専門家ではない、よくわからない人」というのが患者や家族からみた私の姿だったに違いない。（野口 2001:4）

確かに、自分が参加観察の対象の暴走族のメンバーよりもはるかに社会的に高い地位にあるとの自意識ゆえにかえって、面接の相手に「先生」と呼ばれただけで半年以上も落ち

込んだり（佐藤（郁）2002:9）、「面接」という言葉を暴走族のメンバーの前で使っただけで「しばらくのあいだは」なぜか「こだわりをもって」、「かなり神経質になっ」たりする（前掲：225）、しかもその自意識過剰を自覚せずに著書に記しさえするようなフィールドワーカーも存在する。しかし、エスノグラファーはそのような無自覚に高慢な人間ばかりではない。上述の野口のように常に自分の立場について自問自答を重ねる観察者もあり、エスノグラフィーの大家ヴァン＝マーネン（1988/1999）も、警察機構内で数か月間参与観察を行った際の自身の立ち位置について次のように記している。

街に出ているとき、私はパトロール警官からあからさまな敵意を抱かれていると感じることはほとんどなかったが、一緒に仕事をするのをどうしても許してくれないヴェテランの警官も二、三人いた。（…）

（要するに）私が一緒に働いた何人かの警官にとって、私は「まあなんとか許せる無能者」でしかなく、話し相手になって巡回中の長い時間を短くしてくれるかもしれないが、仕事自体に少しでも関係のあることは何にもできやしない人間だったのだ。ほとんどの警官にとって、私は警官予備軍よりは少し上の「友好的で重宝な人間」だった。（…）それでもやはり、絶えず監督が必要だし、（…）一握りの警官、せいぜい二、三人の警官にとっては、ほんの一時的なことだとはいえ、「仕事の相棒」以上のものでもなければそれ以下のものでもなかった。（ヴァン＝マーネン 1988/1999:156-157）

同じくヴァン＝マーネンは「フィールドワークは、いかにして異文化一身近なものであれ、遠いものであれ—が理解されるのかという問題に対する一つの—最良の、と言う者もいる—答えである」（前掲:20）と述べ、その表現形式の一つである「告白体の物語」（前掲:132-172）は過去の文化人類学の大著に比べれば現代社会の一つの異世界の描き方として、読み手にとっても見慣れた理解しやすいものである。だが、通常、この「異文化」は書き手と読み手の両方にとっての異文化である。ヴァン＝マーネンの「告白体の物語」の例においては、異文化とは一般人がその内部を詳しく垣間見ることのない警察学校・警察署という一つの特殊な社会であり、想定されている読者も書き手も警察組織の「外」の者である。

一方、オートエスノグラフィーは Ellis, Adams & Bochner (2011) によれば、“As a method, autoethnography combines characteristics of autobiography and ethnography”、つまり自伝とエスノグラフィーが組み合わさったものである。一般的には、「調査者が自分自身を研究対象とし、自分の主観的な経験を表現しながら、それを自己再帰的に考察する手法」であり、「内部の視点から文化について考察」するため、ネイティヴ・エスノグラフィーや当事者研究と重なる部分があるとされる（藤田他編 2013:104）。つまり書き手と調査対象は同一であり、もしくは同じ文化に属する。読み手だけが「異文化」を鑑賞することになる。

当事者研究との差については、たとえば「誰が（調査者）」、「誰を／何を（調査するテーマ）」、「どこで」、「どのように」、「何のために」という観点からの区別では、当事者研究が「当事者（自分の問題を自覚した人）とピア・グループ」が「自分の問題」を「問題への対処のために」、他方、オートエスノグラフィーは「自分」が「自分」を「感情経験の内省的喚起」によって「知の制度批判」のために研究する、という見解もある（前掲:8-9）。当事者研究もそうだが、仮にエスノグラフィーがエスノメソドロジスト達の言うところの「観察者と観察対象になる者との区分にもとづく探究」だとしても、オートエスノグラフィーすなわち自己エスノグラフィーにおいては区分に連なる調査者—被調査者の上下関係等の問題は解決される。

さらに、一般に ASD 研究において、当事者研究は統合失調症患者の「浦河べてるの家」における実践とともにアスペルガー症候群の綾屋紗月などによるものが比較的よく知られており、当事者研究と重なる面の多いオートエスノグラフィーの手法を部分的に採用することは無理ではないと考えられる。もっとも、幻覚・妄想などの自身の病的症状と折り合いをつけるところから研究という手段を選ぶ意義を見出した統合失調症とは異なり、ASD が定型発達者との齟齬が生活上の支障となる「社会性の障害」を重要な特性とすること、従って、次に挙げるネイティヴ・エスノグラフィーとの相違点と重なるが、ASD 者の調査には当事者だけではなく周囲の定型発達者が必ず登場することから、あくまで本研究は当事者研究とは異なると考える。

内部の視点から文化について考察する点で類似したものとして、「エスノグラフィーの手法を調査者自身が所属する集団に対して適用していく試み」（前掲:68）であるネイティヴ・エスノグラフィーがある。これは「当該の文化のなかで生まれ育ったネイティヴ自身」



が、「集団の内部者としての立場をふまえて、内側からその文化について分析や考察」を行う（前掲:68）とされるが、これが ASD 者に適用できない理由は二つある。

第一に、ASD 者は「当該の文化」の中ではなく、ASD 者とは異なり通常の発達過程を経て成長する健常者あるいは定型発達者という多数派の文化の中で生まれ育っているという事情が挙げられる。そのため、「内側からその文化について」考察するだけでは足りず、ASD 者独自のものの見方と定型発達者の文化の両方の比較衡量が必要である。第二に、「集団の内部者」とあるが、自閉症者を含む ASD 者は必ずしも「集団」を形成しない。基本的に定型発達者ほど徒党を組まず、群れもしないのである。バーンバウム（2008/2013）は聾共同体と自閉症者を比較して次のように述べている。

聾共同体は聾者から構成されており、独自の文化・言語・演劇・規範・価値観をもっている。（…）聾共同体は、固く団結した共同体の生き生きとした事例だ。（…）しかし、聾共同体論は自閉症者に関する結論を何らもたらさない。つまり、自閉症共同体論というものは存在しないのだ。結局のところ、自閉症者の共同体について話すことに、いかなる意味があるだろうか？ 心の理論を欠いた人が直面する試練の一つは、相互承認関係に入れないということだ。（バーンバウム 2008/2013:212-213）

バーンバウムの記述は完全に心の理論を欠いた状態を想定しているため、個々によって障害程度が様々な現実の自閉症者及び ASD 者には厳密には当てはまらない部分があるが、他人に興味がない、あるいは人と信頼関係を結びにくいことは前述のように ASD 者の障害特性の一部である。従って、「集団」を形成しない点も含め、生まれ育った文化的環境の問題からも、ASD 者にネイティブ・エスノグラフィーを応用するのは適切ではないと思われる。次に、オートエスノグラフィー自体の詳しい定義、手法について論じる。

#### 4. 1. 2 自伝に過ぎないオートエスノグラフィー

文化人類学界で『悲しき熱帯』以上に自己指示的な著作はない、つまりこれほど頻繁にまた意図的に工芸品としてのみずからをさし示し、表向きその研究対象であるものをさし示すことの少ない著作はない。この書はその主題の大半がそれ自体であり、

(…) 造られたものとしてのそれ自身の存在を、顕示することを目的としているような書物の古典的範例である。

(…)

まず第一に、これは言うまでもないことだが、また有名な冒頭の一節のアイロニーと自己反省をとまなう否定にもかかわらず、この書物は、だれの目にも明らかなように、旅行書のジャンルに属している。わたしはここに行った、あそこに行った、こんな不思議なものを見た、あんな奇怪なしきたりを見た、仰天した、退屈を覚えた、興奮した、失望した、背中におできができた、アマゾン河であるとき……と、こんな調子で書かれているからだ……しかもそのすべての記述に、読者よ、あなたはわたしに同行して現地に赴き、同じことができたらどんなによかったろう、と思っておられることでしょう、という暗黙の潜在的メッセージを響かせている。

この書物は、冒険と逃避の夢への招待である、いや夢そのものと言っても過言ではない。(ギアーツ 1988/1996:39-40,47)

ギアーツが上記のように分析するレヴィ=ストロースの『悲しき熱帯』は、特に第二部まではオートエスノグラフィーの走りであるように思われる。だが、クリフォードに言わせれば、これはまだ「問題作品」ではあるが、「周辺的存在に留まっていた」(クリフォード 1986/1996:24)。

このようにして民族誌の記述に新しい一つのサブジャンルが生まれた。それは、自己内省的な「フィールド・ワーク<sup>アカウント</sup>報告」である。(…) 新しいこのサブジャンルはさまざまなテキスト戦略を試みる。例えば、一人称単数（とはいえ、これまで一人称が民族誌から追放されたことはなかった。民族誌はその様式面においては常に個人的なものであったからである）の使用である。「フィールド・ワーク報告」では、経験された客観性というレトリックは去り、自伝や皮肉な自画像というレトリックに地位を明け渡す(…)。<sup>フィクション</sup>物語の一登場人物である民族誌家は、いまや舞台の中央にいるのである。(前掲:24-25)

民族誌家が「舞台の中央にいる」状態は、社会学者のキャロリン・エリスとアーサー・ボクナー（2000/2006）がオートエスノグラフィー研究で「調査者自身が調査の対象とな

れ」とする主張と相通ずるものがある。エリスとボクナーは、自己エスノグラフィー（引用者注：オートエスノグラフィーを指す。以下同様）はまずその用語自体、厳密な定義や用法の規定が曖昧なまま発展してきたため、「他の類似した用語で言及される研究を、自己エスノグラフィーという意味の広い標題の中に含めておく」のが妥当だろうということで、次のようなものを挙げている。すなわち、個人的語り、自己の語り、個人的経験の語り、一人称の報告、想起による語り、内省的エスノグラフィー、告白体の物語、エスノグラフィックな自叙伝、ナラティヴ・エスノグラフィー、自叙伝的エスノグラフィー、民族的自叙伝、当事者のエスノグラフィー、先住民のエスノグラフィーなどである（エリス他 2000/2006:136）。前述のようにオートエスノグラフィーは、「調査者が自分自身を研究対象とし、自分の主観的な経験を表現しながら、それを自己再帰的に考察する手法」（藤田他編 2013:104）であり、当然、観察する「自分」が主人公となる。ボクナーも、「研究する者は、研究の中に、常に含まれているものなのです。それでは、なぜ、観察者を研究しないのでしょうか？なぜ、私たち自身を観察することに焦点を合わせないのでしょうか？」（エリス他 2000/2006:146）と疑問を呈し、研究者も中立的な傍観者ではなく生身の人間であり、データの一部となることを主張する。

Instead of thinking of the researcher as a neutral bystander, an objective spectator standing apart from the people being studied, we encourage you to think of the researcher as part of your data, a flesh and blood person who is alive, active, and feeling. (Bochner and Ellis 2016:57)

彼らはさらに小説家のように語ることを推奨し（前掲:60）、「物語の筋の道徳的・感情的・美的・知的側面にコミットしながら共同参加者になること」を読者に求めるのだが（エリス他 2000/2006:143）、エリスの代表作がパートナーの闘病と死を扱っており（藤田他編 2013:107）、ボクナーもはっきりと主張しているように個人的語り、想起による語りに重点が置かれている。以下、本稿筆者の採用する Reed・Danahay の論じるオートエスノグラフィーとの違いを明らかにするために、この点について概括する。

ボクナーとエリスの著書 *Evocative Autoethnography : Writing Lives and Telling Stories* (2016) においても、包括される研究は次のように回想の形で限定して挙げられ、

彼らは「一人称の報告」、「想起による語り」というところから始めることにしたと述べられている。

In those early days, we weren't sure what to name the kind of work we were embracing. We could have called it personal essay, socioautobiography, confessional tale, ethnographic autobiography, self-ethnography, or personal ethnography. Though a myriad of possibilities existed, we landed initially on 'first-person accounts' and 'evocative narratives' as our covering terms (...). (Bochner and Ellis 2016:51)

デンジン他編『質的研究ハンドブック』（2000/2006）の中の、彼らが著した「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性：研究対象としての研究者」という章でも「自己エスノグラフィーとは何か」という項の次が「なぜ個人的語りが問題となるのか」という項になっており、ボクナーの口頭発表という形で「想起による語り（evocative narratives）」の利点が強調される。曰く、

通常、想起による語りの著者は一人称で書き、そこでは自らが研究対象となるので、研究者と対象者を峻別するという従来の慣習は破棄されます（Jackson,1989）。また、そこから生まれてくる物語は、1つの事例に焦点を合わせるため、事例を越えた一般化から事例の中での典型化へとシフトしながら（Geertz,1973）、従来の研究上の関心も破棄されます。さらに、物語を語るという様式が小説や個人誌と似ていることから、社会科学と文学の区別を自明のものとしていた境界線が突破されます。テキストが親近感や興味を引き起こすことから、読者は対話の共同参加者として位置づけ直されるため、読者を知識の消極的な受け手と見なす従来の観点は拒絶されます。個人の生の隠れたディテールが明るみに出ることから、感情的経験に光が当たり、社会行為に関する合理的行為者モデルは脅威を受けることになります。（エリス他 2000/2006:142）

このようなボクナーの説明からは、なぜ社会科学と文学を区別する「境界線が突破」されねばならないのかという疑問、また、親近感や興味を引き起こして読者を共同参加者や積極的な受け手にする役割は、既に小説等の文学作品や自伝等が果たしているのではない

かという疑問、すなわち双方を併せて、なぜ社会科学が文学や自伝と同じようなことをせねばならないのかという問題が生じる。

そもそも『質的研究ハンドブック』の編著者の一人であり、エリスに影響を与えた Norman K. Denzin は *Interpretive Autoethnography Second Edition* (2014) を著しているが、これは 1989 年に出版された *Interpretive Biography* をリライトしたものである。

This new edition of *Interpretive Biography*, now renamed *Interpretive Autoethnography*, continues the themes of the first edition. (Denzin 2014:vii)

文献中に一部の内容の改定は勿論あるが、全部ではない。言い換えれば、同じ書物のタイトルの「伝記 (biography)」の部分を「オートエスノグラフィー (autoethnography)」に替えただけでオートエスノグラフィーについての一冊の書物が成立してしまうのである。実際、autoethnography だけについて述べた冒頭の箇所を数ページ過ぎると、下記のようなオートエスノグラフィーと伝記・自伝がいかに密接した関係であることを示す、あるいは両者を混同しているような記述が頻繁に見られる。

Autoethnographies and biographies are conventionalized, narrative expressions of life experiences.(…)

These conventions serve to define the autoethnographic method as a distinct approach to the study of human experience. They are the methods by which the “real” appearances of “real” people are created. They are Western literary conventions and have been present since the invention of the (auto)biographical form. (前掲:7)

(…) Autoethnographic texts are always written (and performed) with an “other” in mind. (…)

The presence of an other in autobiographical and biographical texts means that they are always written with at least a double perspective in mind: the author’s and the other’s. (前掲:7)

その他、“the autoethnographic, autobiographical, and biographical genres”（前掲:9）、“the autobiographical / autoethnographic project”（前掲:35）のようにオートエスノグラフィーと自伝がまとめて併記されている箇所他に、自伝と伝記についての記述にかなりのページが割かれている。

では、オートエスノグラフィー独自の特色と意義は何なのだろうか。たとえば、オートエスノグラフィーはあくまで社会科学から派生したものだという、その成り立ちの一端が垣間見られるボクナーの理由づけは、オートエスノグラフィーについて学ぶワークショップにおいて講師であるボクナーが参加者達に“social science writing”についてどう思うか尋ねる場面で以下のようになされる。

“Why isn’t traditional social science more read and appreciated? Michael Billig (2013) blames this condition on what he calls ‘the academic dialect.’ According to Billig, if you want to succeed in the social sciences, you have to learn to write badly and to make the topics about which you are writing difficult to grasp. You learn to cloak ideas in jargon, using long and obscure words. (….) you think you need to sound smart in order to gain respect, so you stop speaking like an ordinary person and start talking like an academic, that is, in the academic dialect. Not many people have mastered the academic jargon you use, but you needn’t worry. You sound as if you know what you’re talking about. Besides, the readers’ insecurities will assure that you will be respected. (….)

“By comparison, evocative autoethnographers focus attention on people. We want to connect with our readers. Unimpressed by jargon, we prefer to talk the way most human beings talk. (Bochner and Ellis, 2016:78-79)

社会科学の分野で成功して尊敬を得るためには“jargon”や“long and obscure words”であるところの“the academic dialect”を用いてわかりにくく、いかにも賢く見えるように書いたり話したりすることが必要である、という諧謔に満ちた文章を引用し、ボクナーは批判の対象として“social science articles”、“social science journals and research papers”などを挙げている（前掲:77-78）。想起によるオートエスノグラフィーは人に焦点を当て、読者とつながることを目指すのだから、社会科学の論文等とは違って普通の人の

言葉で話そう、ということである。これはアカデミックな業界に対する批判であろうか。一理あるとは言えるが、オートエスノグラフィーの長所がこの程度であるというのは単なるこじつけのようで説得力に欠ける。それこそフリーのライターでも自身の解説、証言記録や当事者や関係者との対話、インタビューなどいくらでも好きな表現形式でオートエスノグラフィーよりすぐれたルポ等は書けるのであり、社会学者が同時にオートエスノグラファーである意義が自明であるとは言えない。

さらに、個人的語りはせいぜいテレビ的なリアリティを持っているにすぎないのではないか、そうした語りは告白させて犠牲者に仕立てるという段取りに基づくものではないのかと問われて、『質的研究ハンドブック』でボクナーは以下のように答えている。

たとえば、『病の語り』と呼ばれる物語のジャンル、フランク（Frank, 1995）が巧みに分析したような物語を取り上げてみると、研究のゴールは、病いや障害が引き起こすレッテル貼りや差別を少なくすることだと考えられます。こうした物語の大半を、医療における規範的な語り口によって、犠牲者に仕立て上げられたり、アイデンティティを傷つけられたりすることに、けっして屈服しようとししない人々が書いています。彼らの多くは、物語の源としての自己を具現化しながら、生存者としての自分を描こうとしているのです。（エリス他 2000/2006:148-149）

これでは自伝そのものである。ひたすら自分を見つめ、自分の体験と向き合い、自分のことについて書き記す、もともと“*evocative narratives*”からオートエスノグラフィーの世界に入ったボクナーの主張を見る限りは、やはり自伝や小説ではなくオートエスノグラフィーであることの特色、オートエスノグラフィーでなければならない理由は理解しにくい。

ボクナーは、オートエスノグラフィーは科学と技術、経験論と存在論、事実と意味、経験と言語、事実に基づいた報告の高度に定型化された因襲と文学的・詩的・戯曲的顕示の一定でない新しい代案、冷静で合理的な客観性と熱い理屈抜きの情動性、それぞれの間に位置するものであると言う（Bochner and Ellis 2016:66）。従って、研究者は生身の人間、“*a flesh and blood person who is alive, active, and feeling*”ではあるが、過度に主観に走るわけではないことに体裁上はなり得る。にもかかわらず、具体的な書き方については、

前述のようにボクナーは一人称を使って調査者自身が調査の対象となれ、自身を作家と見なせ、小説家のように物語を描けと語る。感情を前面に出すのである。

We sanctioned writing in the first person; we approved of research in which the researcher became a principal object of research; we summoned stories that give voice to groups of people traditionally left out of social science inquiry; we gave permission to concentrate on a single case; we encouraged researchers to think of themselves as writers and to tell stories the way novelists do; we promoted emotional, vulnerable, and heartfelt writing; (…). (前掲:60)

そしてボクナーの下記の文章は、あくまでオートエスノグラフィーの書き手として、聴衆に自分達の苦しみに意味や価値を見出し、その目撃者となり、その苦境に深く関わることを望むという趣旨である。しかしこれは先にも述べたが自伝でも可能である<sup>21</sup>。

“We autoethnographers want our audiences to see that there was meaning and value in our suffering and that we are affirming life, ours and that of the other people who are characters in our stories. When you read autoethnography, you become a *witness* to the narrative context of another person’s suffering. Autoethnographers expect their readers to become deeply involved and drawn into the predicaments of their stories. (前掲:70)

エリスの著作を含むいくつかの想起による語りも、「読者に、物語から真実を感得すること、物語の筋の道徳的・感情的・美的・知的側面にコミットしながら共同参加者になることを」求める（エリス他 2000 / 2006:143）目的の他に、一応次のような目的もある。

When autoethnography works, it evokes not only a sympathetic response and a reflexive questioning of the connection of one’s own life to the story, but also a

---

<sup>21</sup> たとえば、ドナ・ウィリアムズの自伝『自閉症だったわたしへ』でも、読み手が書き手の苦しみに意味や価値を見出し、その目撃者となり、その苦境に深く関わることは十分可能である。



desire to correct the injustice(s) depicted (Berry and Patti, 2015). (Bochner and Ellis 2016:70)

共感で応え、自己の人生との関係を再帰的に問うだけではなく、そこに描かれた不正を正そうという欲求を持つことが、読み手に対してオートエスノグラフィーが喚起するものであるという。これこそが上述の説得力に欠ける解説よりも、オートエスノグラフィーの最も意義ある存在理由となり得るはずだが、この部分は他者の文献からの引用であり、ボクナーとエリスのこの 2016 年の著書を見る限り、社会正義云々を重視しているとは言い難い。

かろうじてエスノグラフィーの片鱗をとどめているのが、エリスが同年代の乳癌の指導院生との対話形式で具体的に紹介している次のような記述である。最初は院生、次がエリスの言葉である。

「なぜ、私の物語を読みたい人がいるのか？私の物語はこれまで出版されたものどこが違うのか？それから、私の物語は他の女性へのインタビューとどうつながっていくのか？」

(…) 癌は私の人生をいい方向へ変えなかったし、まして贈り物だなんて思えません。こういう気持ちをもちながら、何年も過ごすことは、とても辛くて、私の心や体の健康とか、私の家族に悪影響を与えたと感じていて……」

(…) 別の物語を書いて、別の物語を生きたいんです。私が、他の女性たちと語り合って、彼女たちの経験を物語れたなら、生きるべき別の物語を見つけられるでしょうし、その物語は、生きやすくしてくれたり、重荷をとってくれたりすると思うんです。たぶん、自分自身を生存者として描き出せる気がします。(…) 他の女性が治療後何年もどういう思いをもっていたのか。それを、私は知りたいんです、彼女たちがどう感じながら生きてきたのか、あるいはどう生きにくかったのかを」(エリス 他:2000/2006:157-158)

「論文の形は、研究の過程の中で、できてくるものなのよ。あなた自身を読者に開示するための短い個人的語りで、論文が始まってもいいし、より長いあなたの物語が、どこか一章を占めてもいいわ。あるいは、あなたの経験と参加者の物語を統合するよ

うに書いてもいいし、個々の参加者の物語がそれぞれ章に分けられてもいい。それとも、あなたの物語を、類似した協力者の物語の1つと比較するのもいいわね。(…)

(…)たとえば、もし参加者があなたのはたらきかけや質問なしで語ってくれるなら、聴きとったことを、あなたの物語をふまえながら自分なりにまとめて、物語として描けばいい。もしインタビューが相互行為的なものになったら、あなたたちのあいだで生じたコミュニケーションとか解釈の過程を示すために、対話を描けばいい(…)  
(前掲:159)

複数のインタビューの相手の経験を書く、自分の経験と相手の物語を統合する、比較する、対話を描く、ここに至って彼らの言うオートエスノグラフィーはようやく自伝から脱してエスノグラフィーの形式に近づくのである。本研究はこの形式の点だけ念頭に置くこととする。

本項冒頭のギアーツの引用に戻ると、『悲しき熱帯』は第一に「旅行書のジャンルに属して」いたのだった。そして第二に、「奇妙な外観をもつとはいえ、れっきとした民族誌」であり、第三に「哲学的テキスト」、第五に「念入りに織られた一種の象徴派的文学テキスト」(ギアーツ 1988/1996:50,53,57)なのである。注目したいのは第四番目である。

このように考えてくると、われわれはおのずから『悲しき熱帯』のテキストがはらむ第四の位相、すなわち改革者的熱情のほとばしるパンフレットへと導かれる。西欧を非西欧世界に対する影響ゆえに告発する文書はこれまで数限りなく出されてきたが、それらを執筆した人びとがどれほど過激なタイプであろうとも、レヴィ=ストロースの『悲しき熱帯』ほど破壊的な痛烈さと力とをもって書かれた告発は皆無に近い。この書物を読むとフ란ツ・ファノンすらおとなし過ぎるという印象をもってしまうほどだ。(前掲:55)

auto-ethnography という語が初めて用いられたのは1975年、Karl Heiderによってであり、現在と近い意味では1979年にDavid Hayanoが言及している(Reed-Danahay 1997:4-5)。オートエスノグラフィーという概念自体が存在しなかった1955年に出版された『悲しき熱帯』はオートエスノグラフィーの範疇には入らず、だが1967年に公表されたマリノフスキーの日記、*A Diary in the Strict Sense of the Term* はオートエスノグラフ

ィーの萌芽とされる（藤田他編 2013:105-106）。これはいわば民族誌家の楽屋裏である。クリフォードも、オートエスノグラフィーという語は用いていないが、前述の「このようにして民族誌の記述に新しい一つのサブジャンルが生まれた。それは、自己内省的な『フィールド・ワーク<sup>アカウン</sup>報告』である」という記述の直前にマリノフスキーを挙げている（クリフォード 1986/1996:24）。

だが、オートエスノグラフィーの真の意義は、単なる自伝でないことは勿論、エスノグラフィーの裏話であるという点だけでもなく、「フランツ・ファノンすらおとなし過ぎるという印象」を抱かされるほどの「破壊的な痛烈さと力」を有することではないだろうか。あくまで異文化を語る旅行記や民族誌の体裁である点でオートエスノグラフィーではないのかもしれないが、『悲しき熱帯』には無視できない共通項があるように思われる。より正確に言えば、エリスとボクナーの提唱する *evocative autoethnography* よりは、オートエスノグラフィーではないはずのファノンやレヴィ＝ストロースの著述の方が学術的にも社会的にもはるかにオートエスノグラフィーとしての意義を持つのではないか。

次項で本研究の採用するオートエスノグラフィーについて述べる。

#### 4. 1. 3 オートエスノグラフィーの定義と問題

Deborah E. Reed-Danahay (1997) はその編著書 *Auto/Ethnography : Rewriting the Self and the Social* において、まずオートエスノグラフィーは *native anthropology*、*ethnic autobiography*、*autobiographical ethnography* の 3 つの類型、すなわち、かつてエスノグラフィーの対象であった人々が自身の集団についての研究を著す「ネイティヴの人類学」、少数民族によって書かれた個人的語りである「民族的自叙伝」、人類学者がエスノグラフィーに個人的経験を差し挟む「自叙伝的エスノグラフィー」が混合する位置にあるとしている。

Autoethnography stands at the intersection of three genres of writing which are becoming increasingly visible: (1) “native anthropology,” in which people who were formerly the subjects of ethnography become the authors of studies of their own group; (2) “ethnic autobiography,” personal narratives written by members of ethnic minority groups; and (3) “autobiographical ethnography,” in which

anthropologists interject personal experience into ethnographic writing.  
(Reed-Danahay 1997:2)

また、これが最も重要であるが、同書の目的はカルチュラル・スタディーズにおいて発展してきた二つの主要な議論、誰が誰を表象するのかという問題と自己再帰性の問題に込めることである（前掲:1）。各章の共通点は、下記引用文に‘they are about life stories — sometimes our own, sometimes those of others, and sometimes both.’とあるように「時には自分の、または他者の、あるいはその双方のライフストーリー」であることとなる。そして、セルフナラティヴという行為及び様々な政治的コンテクストにおいてその行為に伴う創造と制限との間の緊張が同書のメインテーマとなる。

This book responds to two major developments in cultural studies: debates about representation (by whom and about whom), and the increasing trend toward self-reflexivity in all realms of writing. The common thread linking the chapters together is that they are about life stories — sometimes our own, sometimes those of others, and sometimes both. The act of self-narrative and the tension between creativity and restraint associated with that act in various political contexts, is a central theme in this book. (前掲:1)

さらに、オートエスノグラフィーの書き手は二つの文化の境界を行き来して（a boundary-crosser）、二重のアイデンティティ（a dual identity）を持つ（前掲:3）。オートエスノグラフィーは、社会的コンテクスト内に自己を置くセルフナラティヴであると定義される（前掲:9）。

One of the main characteristics of an autoethnographic perspective is that the autoethnographer is a boundary-crosser, and the role can be characterized as that of a dual identity. (…)

A second question raised by the concept of autoethnography is that of voice and its authenticity. Who speaks and on behalf of whom are vital questions to ask of all ethnographic and autobiographical writing. (前掲:3)

In this volume, autoethnography is defined as a form of self-narrative that places the self within a social context. It is both a method and a text, as in the case of ethnography. Autoethnography can be done by either an anthropologist who is doing “home” or “native” ethnography or by a non-anthropologist / ethnographer. It can also be done by an autobiographer who places the story of his or her life within a story of the social context in which it occurs. (前掲:9)

疾病や闘病、死など本人と家族をはじめとする身近な周囲の人間が中心となるエリスとボクナーの手法よりも、ASD の場合は、語りの中に具体的に現れなくても常に定型発達者の文化が背景にあるため、表象の問題や当事者が二つの文化にまたがって存在する問題に言及している点からも Reed・Danahay の著書を参考にし、考察することとする。

3. 3. 1 に関連する表象について補足すると、まず基本的な問題は以下のようなものである。

アイデンティティを土台にした政治的立場表明 (アイデンティティ・ポリティックス) は、人類学全体を圧迫する。なぜなら、対象社会にとって部外者である人類学者には、その社会の文化について語る権利などをはじめからありはしないからである。マリノフスキーがトロブリアンド島民について語りえたのは、トロブリアンド島民が異議申し立てを行わなかったからである (かといって、「他者」を語る権利など、いったい誰にあるのだろうか)。二十世紀初頭に制度化された人類学が、いまではその存亡の危機にあるといわれている理由は、なにも研究対象である「未開社会」が近代化し、消滅しつつあるからではない。その理由は、「未開社会」の人々が自ら代弁＝表象し始めたからである (Albert 1997 、太田 一九九八 )。もう人類学者に依存する必要がないばかりか、人類学者による代弁＝表象が「未開社会」の未開性を産出している、と批判されている。(太田 2001:45-46)

これまで観察される対象であった当事者が「自ら代弁＝表象し始めた」状況からさらに一歩進むと、では当事者が語りさえすればよいのか、という問題に行き着く。同書の中の Kay B. Warren による ‘Narrating Cultural Resurgence: Genre and Self-Representation

for Pan-Mayan Writers’ には Victor Montejo の論文から引用された次のような一節がある。まず、マヤ運動に関する Montejo による人類学批判である。

As an insider, my efforts are centered on the issue of how I (a native) can tell my collective story (of expropriation and exile) and, at the same time, elicit a strong commitment from anthropologists to promote issues such as social justice, self-determination, and human rights in the politics of native people. One of the most persistent struggles of modern Mayans is to get rid of their five century old denigrating images and colonial “representations.” Thus, indigenous people have always complained that anthropologists do not listen to them, that instead they have represented native people with the anthropologist’s preferred images: “primitives,” “minorities,” “backward,” or just “informants.” We Mayans find it difficult to deal with the academic world because if we tell the “experts” what is Mayan, they are reluctant to listen; instead they find it more scientific (comfortable) to tell us what it is to be Mayan, or to define Mayan culture. This is not to say that we possess the sole “truth,” but as our culture is at stake, we regret that our views are not taken seriously. ...My aim has always been to make the sufferings of refugees more visible and to bring attention to their struggles to liberate themselves from continuous oppression and persecution. Mayans are again speaking for themselves and rupturing those barriers that have silenced us and positioned us in such unequal social relations (1993a:16-17). (Warren 1997:23-24)

同じ箇所を太田（2001）も以下のように取り上げている。

グアテマラでは、言語学者への批判は同時に人類学者への批判でもある。これらの批判はマヤ運動の隆盛とともにわきあがってきた。たとえば、モンテホ（Montejo 1993:16-17）は、人類学をこう批判する。これまで人類学者が先住民たちの主張に耳を貸さなかったこと、さらに現地の人々の声を聞く代わりに、人類学者自らが信じるマヤ文化のイメージを押しつけること、すなわち、人類学は対話的ではなく「モノロ

一グ」を行っているのだという。しかも、その行為は対話を拒むという点において、きわめて帝国主義的である。語るものと語られるものをはっきりと区別する構造は、帝国主義的知の構造そのものであるという（スピヴァク 一九九八）。

(…)

ここでモンテホ（Montejo 1993:15）の指摘に戻れば、重要な論点が含まれていることがわかる。まず、人類学者はマヤの人々のことばに耳を傾けてこなかったという指摘である。しかも悪いことに、人類学者はマヤについて表象する権威を独占しているという。

この指摘を受けとめれば、マヤに自らを「語らせる」という代替案がすぐに浮上する。しかし、自己を語るという状況がすでにニュートラルなものではなく力関係により構造化されていることを、スピヴァク（一九九八）は「サバルタンは語ることができるか」という挑発的問いかけにより問題化する（…）。すなわち、研究者が自己選択的につくりあげるマヤ像にそったかたちで、マヤの語りが形式化される。とすれば、語りを聞くに値するものとして位置づける力は、つねに研究者が留保していることになる。しかも、このような代替案が巧妙に仕組まれた罠として機能する。というのは、あたかもマヤの人々が自己表象をしているかのように語りを形式化すれば、この研究者側の力は隠蔽されるからである。（太田 2001:195-196）

Warren は Abu-Lughod の疑問を提示して、Montejo のような当事者である研究者も、「研究対象」として自分達を研究する場合、外部の研究者達と同じ、『『あるがままの』描写としての <sup>レプレゼンテーション</sup> 表 象 ではなく、代替〔レプレゼンテーション〕としての <sup>レプレゼンテーション</sup> 表 象」（サイード 1978/1993a:58）の過ちを犯すかもしれないことに注意をする必要があるという趣旨の指摘を行っている。

As a Mayan, a refugee, and an anthropologist, Montejo is aware of his own multiple accountability to readers with inherently conflicting politics and positionings. As an insider / outsider who studies displaced communities, Montejo must answer Abu-Lughod's question: "What happens when the 'other' that the anthropologist is studying is simultaneously constructed as, at least partially, a self?" (1991:140) (Warren 1997:24)

Montejo 自身も ‘This is not to say that we possess the sole “truth,”’ と述べており、第一に、当事者でありさえすれば真実を語ることができるのか、という問題がある。Warren はさらにもう少し深く、研究対象に自分自身が含まれる場合、すなわち当事者が研究者である場合に、結局外部の人間が代わって表象するのと同様の問題が起こり得ることを指摘している。第三に、太田が指摘するように、当事者の「語りを聞くに値するものとして位置づける」のは研究者側であり、なおかつその研究者側の権力が隠蔽されるという問題もある。

ASD の表象については、これらの三つの問題すべてが含まれる。第三の、あたかも当事者が「自己表象をしているかのように語りを形式化すれば、この研究者側の力は隠蔽される」パターンは、支援職側の権力を隠蔽しながら発達障害者側が批判されるようにナラティブを操作した前章の山本に当てはまる。残るは第一の問題と第二の問題である。

#### 4.2 「軽度」の ASD 者と重度の ASD 者の表象の違い

オートエスノグラフィーの形式には前述のようにインタビューの相手の経験を書いたり、対話を描いたりすることも含まれ、「時には自分の、または他者の、あるいはその双方のライフストーリー」でもあった。そして、ASD 者の困難を研究しようとするならば当事者だけではなく周囲の定型発達者が必ず登場することからも、オートエスノグラフィーの書き手が二つの文化の境界を行き来して (a boundary-crosser)、二重のアイデンティティ (a dual identity) を持つとする Reed-Danahay の定義に沿っており、ASD 当事者である本稿筆者が定型発達文化の中で見聞きする ASD 者についての言説を上記のような形式で論じたものはオートエスノグラフィーに含まれ得ると考える。

1.1 で、「書物・TV 等のメディアで世間への啓発のために情報を発信することができる当事者が、わずか 10 代、20 代程度で診断を受けた若者や、40 代以上であっても重度の感覚過敏等の身体的不具合を有する一部の特定の者に限られていることも情報が偏る原因となっている」と述べた。本節ではまず、障害特性が比較的軽いと思われる当カフェの参加者の発言から、特に言及されることが多い「聴覚過敏」について取り上げ、その現状を論じる。次に、メディアでの露出の多い重症者の主張を見ることにする。



当カフェはおよそ隔月ごとに1回2時間、大阪大学言語文化研究科の大会議室で開催されている。参加者は各回10-20名ほどであり、発言する時は挙手して進行役である筆者が指名する。毎回テーマとサブテーマを決めているが、議論の展開によっては特にそれらにはこだわらない。質問があった時や補足説明が必要であると思われる時などにコメンテーター（連合小児発達学研究科教員）が適宜解説を加える。

本節中の抜粋は筆者を含む当カフェ参加者の発言で、各人の年代・性別等は、呼称の後の【 】に記載する。データ採録日時及び当該カフェ開催回は末尾に記す。また、発言のうち「(…)」で省略を明示した部分以外も間投詞や反復表現等を多少削除・修正している。方言及び特殊な語句の解説は二重ブラケット([ ])で挿入し、省略されている語句を( )で補足する。

#### 4.2.1 聴覚過敏とカクテルパーティー効果

社会性の障害で生活に支障を来す勤労中高年 ASD 者においても、比較的限られた範囲ではあるが、障害特性として2.2で述べた感覚過敏が見られる。感覚過敏については、前述のように成人自閉症者本人による世界初の自伝、ドナ・ウィリアムズの『自閉症だったわたしへ』（1992/1993）で既に詳細に述べられているが、DSM-5において初めて診断基準として、第二の特性の「限定された反復する様式の行動、興味、活動」の一部という位置づけで「感覚入力に対する敏感性あるいは鈍感性、あるいは感覚に関する環境に対する普通以上の関心」のように明記された。

当カフェでも参加者によって特に「聴覚過敏」に言及されることが多く、備瀬（2011）も発達障害の感覚の偏りについて「聴覚では、周りのざわめきなどがすごく<sup>みみざわ</sup>耳障りな音に聞こえてくると言います。目の前の人の話も、周囲の雑音も同じ刺激となって、耳に飛び込んできます。(…)注意や選択性の偏りによる問題です。そんな雑音に囲まれて、目の前の人の話に集中しなくてはいけないので、すごくイライラしてくる」ことがある（備瀬2011:136-137）と説明している。

このうち、「雑音に囲まれて、目の前の人の話に集中しなくてはいけない」場合に問題となるのが、カクテルパーティー効果である。浜渦（2005）は、「ケアの人間学」という分野の「ケア」する側の入門書において、「関心により濃淡の差のある世界」に住む「わたしたち」のごく当たり前の行動としてそれを挙げている。カクテル・パーティーのような

BGM や大勢の人のおしゃべりや食器の音などの喧騒の中で友人と二人で談笑している状況でも、「友人の話していることをちゃんと聞き取り、友人との会話はさしつかえなく行われる。つまり、『聞く』ことにも、関心により濃淡の差があり、私たちは、耳に飛び込んでくるすべての音を『聞いている』わけではない」という（浜渦 2005:16）。同書ではこの後、「見る」ことにおいても「濃淡の差」があるという記述が続き、『ケアする存在』としての人間が、『ケア』を向けるのは何よりも『人』であり、他者なのである」（前掲:17）というケアに関する論旨が展開されるが、ASD 者はその対極の位置にある。重度の自閉症児は他者に関心を示さず、成人 ASD 者にも程度の差はあれ、聞こえるもの、見えるものを選別できないという障害特性がある。

以下、聴覚過敏とカクテルパーティー効果に関する当カフェの参加者の発言の一部を示す。

**C さん：【40 代女性・当事者】**：私、今、A 型の作業所<sup>22</sup>で働いてるんですけど、ストレスが昂じると聴覚過敏が発生するのがありまして、A 型の作業所というのは大体ビルの一室で 20 数名が詰め込まれて作業するんで、あっちこっちでいろんな作業をしていて、いろんな怒号とか飛び交うんですね。（…）それがすごい気に障って、（…）仕事に集中できなくて困ってるっていう、まあ、今抱えてる悩みの一つですね。すごくしんどいです。（2015.9.19 第 7 回）

**筆者【50 代 X ジェンダー・当事者】**：カクテルパーティー効果って、あの、選別できないんですよね。

**C さん**：あ、私もそれがすごく弱い人なんで、（…）作業所っていう所は同じ作業を全

---

<sup>22</sup> 就労継続支援 A 型事業所。当カフェの参加者でここを利用している者はほぼ全員が下記の(3)にあたる。

「【対象者】

企業等に就労することが困難な者であって、雇用契約に基づき、継続的に就労することが可能な 65 歳未満の者（利用開始時 65 歳未満の者）。具体的には次のような例が挙げられます。

- (1) 就労移行支援事業を利用したが、企業等の雇用に結びつかなかった者
- (2) 特別支援学校を卒業して就職活動を行ったが、企業等の雇用に結びつかなかった者
- (3) 企業等を離職した者等就労経験のある者で、現に雇用関係がない者」（厚生労働省 HP、<http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/service/naiyou.html> 最終閲覧日 2018 年 3 月 27 日）

員がしてるわけじゃないので、いろんな指示が飛び交ってるような状況で仕事をしてるので、聴覚過敏の人間には非常に辛い所で、だから無理解っていうのがもう、配慮すら得られないんだなって最近すごい実感してて、配慮してくれって言ったらもう「辞めてくれ」って言われそうな勢いなので、言えないっていうか（…）。

**筆者：**確かにそうですね、あの、言いにくいですね。私もバイトですけど、バイトいうか予備校で、講師室でちょっと待機して質問受けしてるバイトですけど、講師と生徒とチューターいうて事務の人と、うじゃうじゃ人いますからむっちゃ[[無茶苦茶]]うるさいです。目の前の生徒と喋らないといけないんですけど、まわりうるさすぎて目の前の生徒何言ってるかわからんとかありますけど。で、一応カミングアウトしてますけど、それを、講師室静かにさして[[させて]]くれとかそこまで言えないんで、うん、もうこれはどうしたらいいのか、っていうのはありますね。（2015.9.19 第7回）

2016年3月の第10回においても、50代の男性当事者から、「向かい合って話をしたりとかでも、横からなんか雑音なりノイズが聞こえてくると、もうそっちの方に注意が行ってしまって相手の話を全然聞いていないので、その受け答えがもう全然ちぐはぐになる、という発言があった。病院でも、「診察室でパーティション1枚挟んで、向こう側に薬剤師の方とか受付の方がいらっしゃって、そこでいろんな話が、受付でトラブルとかが起こっていると、診察中で自分の話を聞いてもらってる最中なのにそっちのトラブルが気になってしまって、先生が一生懸命自分に質問とかされているのに全然答えられずにその受付のトラブルばかり聞いてしまっている」という。

Cさんの場合、一時的に多少は職場の状況が好転することもあったのだが、騒音問題自体は最初に聴覚過敏の話が出た第7回以降、実に1年半ほどたっても改善されていない。

**Cさん：**うーんと前の時に作業所ですごくうるさいという話をさせてもらったかと思うんですが、（…）ヒューマンノイズと言ったらいいのでしょうか、人がいることによって起こるノイズっていうのがすごくって、（…）「お疲れさまー」って帰って、「はあ、しんど」ってなるんですよね。（…）たったの4時間しか作業所で働いていないのに、なんでこうなるんだろうって思ってたんですけども、おそらく聴覚過敏のせいやろな、と。まあ、治らないということなんだろうと思いますが、すごく日々疲れております。（2017.4.23 第17回）

この回ではその後、同じように職場での他者の大声で悩んでいる当事者の発言や、発達障害には聴覚過敏が多いのかという質問が続き、筆者が次のように発言した。2017 年 3 月に当事者・非当事者双方の成人が集まる他の発達障害関連のカフェにゲストスピーカーとして招かれた時の話である。計 30 分ほどの自分と他のゲストのトークの後は複数のグループに分かれて話し合いがあった。1 時間以上もの間、30 代以下の若者を含む各グループのメンバーが同時に大声で話していたため、筆者にとってはどのグループの声も同じように聞こえて騒然とした状態であり、目の前の参加者の言葉が聞き取れなかった。

**筆者：**聴覚過敏の人は多いってわけでもなさそうですね。よその集まりでちょっと、うるさくて、うわあとか思いながら帰って来たことがあったんで。発達障害の方ばかりですけど。人によりますね。全然、もうわーっとみんなで楽しくグループに分かれて、(…) 私にしてみたらものすごい騒音なんですけど楽しくちゃんと話し合いしてて、きちんと結論も出てて、発達障害の方ばかりですよ、それびっくりしてカルチャーショック、発達障害者同士でカルチャーショック受けて、みんなこんなうるさくても平気なんや思って (…。)。(2017.4.23 第 17 回)

この発達障害カフェだけではなく、日本初の自閉症カフェであり先駆者であるはずの金沢大学子どもこころの発達研究センター主催の自閉症サイエンスカフェ『カフェで語ろう!!!自閉症』でも、原則として複数のグループに分かれる上に、少なくとも 2017 年 3 月に筆者が視察した時点では、当事者の発言中であっても同じ室内で待機しているスタッフがかなり耳障りな程度に聞こえる声量で延々と私語に興じるという、聴覚過敏やカクテルパーティー効果の困難への配慮が全くなされていない状況であった。

要するに、ASD と言っても、たまたま聴覚過敏を持たない当事者が主宰する、あるいは参加者がそのような者ばかりであるカフェ、当事者会、シンポジウムなどでは通常の定型発達者のワークショップなどと同じ形式が取られており、感覚過敏という当事者間ではよく知られているはずの障害特性への配慮はないのである。そのような団体の発達障害者が啓発活動なりの表象をすれば、当然、聴覚過敏やカクテルパーティー効果については真剣に理解を求める形で触れられることはないだろう。発達障害は特に個々によって障害特性の表れ方が様々であるため、日常生活を何とか送っている市井の ASD 者であっても「発

達障害同士でカルチャーショック」を受けるのが実情なのである。啓発活動においてはこの点に必ず留意すべきである。

では、これらとも異なる非常に重篤な身体機能不全の症状を有する就労の不可能な ASD 者はどのような状況であろうか。

#### 4. 2. 2 「異文化」と表象される ASD 者

ASD を「異文化」とする見方は、たとえば杉山（2007）が著書に「自閉症という文化」という章を設けて示しているが、その対象はアスペルガー症候群の翻訳家ニキ・リンコとドナ・ウィリアムズであり、その章の一項の「異文化としての自閉症」で特に取り上げられているのは、1986 年に世界初の自閉症者の視点の共著書を世に出したテンプル・グランディンである。

対談集『自閉っ子、こういう風にできてます！』でニキは、「見えないものは、ない」と言い切っている。「私小さい頃、自分は決定的に他の子と違うと思ってました。他の子には背中があるのに、自分には背中がないからです」（ニキ他 2004:42）。

自分の身体でさえ、見えない部分に関しては、「自分には背中がない」から「パーカのフードやポケットがどこかに引っかかると、なんで動けないか理解できなくて、半日くらいじっとしていたり」、「どこからどこまで自分の身体なのかがつかみにくい」ために、炬燵に入れば自分の「脚がなくなってこわい」と感じたり、テニスをする人は「どうして手じゃなくてラケットにボールが当てられるのかすごく不思議」で、傘を持てば「どこからどこまでが傘で、どこからどこまでが腕なのかわかんなくなって、運動機能が全般的に低下する」などの状態になる（前掲:42-46）。身体的な機能不全に関してはまた、「学校に行くときもきちんと歩いているのかどうか確信が持てなかった」、「そうすると、自分が学校に行っているのか、学校が自分のところに決まった時間になると来るのかわからない。おかげで、『学校を休もう』という発想は思いつきにくかった」（前掲:114）という。

共著者でニキと同じくアスペルガー症候群の藤家寛子も、ニキのように「どこからどこまで自分の身体なのかがつかみにくい」ため、「自分の体取り戻し用マニュアル」というものを作り、同書に掲載している。一部を引用する。（原文の空白行は詰めて表記している。）

#### ★自分の体取り戻し用マニュアル

自分の体がどこまでか分からなくなった時にやります。

#### ① 背中を作ります。

仰向けに寝転がって、背中にぐっと体重をかけましょう。

当たっているところが私の背中です。

自分で当たっているところに力を加えてみましょう。

しかも、二、三分は、背中があることを堪能しましょう。

#### ② 下半身があることをひとまず思い出します。

背中が味わえたら、お膝を曲げて、足の裏とやらを床に付けてみましょう。

太ももと、足の裏がありそうだったら、ここでは次の作業にうつりましょう。

#### ③ 腕の確認をします。

左右に眼球を動かすと、腕が見えるはずですよ。

まずは、肩の下に腕をくっ付けましょう。

自分の意識と、目に入る腕が「何これ」と思わなくなったら、肘のちょうつがいを曲げてみましょう。

ちょうつがいの映像を流すと、曲げるのがスムーズになります。

ゆっくりやりましょう。

曲がったら、かなり頑張った証拠ですよ。

#### ④ 腰から下を見ます。

腕がくっ付くと、その先端に、結構重たい平べったいものがついていることが分かります。

それは、手ですよ。

手はなかなか便利で、爪がついていないほうを床に当てると、「わお」と驚くほど上半身が身近なものになります。

しばらく、手のひらを堪能しましょう。

(…)

起き上がれたら、腰から下が見えます。

しばらくは、足を観察しましょう。

ラッキーなときは、見ただけで歩ける日もあるかもしれません。

#### ⑤ 膝までを作ります。

まずは、膝の関節を曲げてみましょう。

あまりに動かないときは、自分の腕で曲げてみるのもいいです。

(…)(前掲:52-55)

以下、「⑥ 足首までをつなげます。／⑦ 足の裏を作る。／⑧ つま先とかかとを作る。」(前掲:56-60)の各項目が続き、それぞれに細かい説明がつくが割愛する。これ以外にも同書では二人の身体障害としか言いようのない特性あるいは「身体機能の不具合」(前掲:16 他)の描写が続く。

ニキがその自伝『ずっと「普通」になりたかった』(1997/2000)を翻訳した高機能自閉症のグニラ・ガーランドも同様に「見えないものは、ない」と認識するが、さらに、社会的な面での特性を一つだけ挙げると、同じ保育園に通う子供達のことを「家具と同じで、中身がなかった。だから、家具と同じように、部屋の付属品なのだと思っていた」(ガーランド 1997/2000:71,69)という点で、「クラスメートにも家族がいると思わなかったから教室に付属しているものだと思っていた」、「モノと人の区別がつかない」(ニキ他 2004:121)ニキと共通する。

ドナ・ウィリアムズの『自閉症だったわたしへ』(1992/1993)、『こころという名の贈り物』(1994/1996)、『ドナの結婚 自閉症だったわたしへ』(1996/2002)、『毎日が天国 自閉症だったわたしへ』(2004/2015)の4冊の自伝は、おそらく親にもなつかぬ自閉症のための育てにくさゆえの母親の凄まじい虐待に耐え、ほとんど多重人格に近いいくつかのお仕着せのキャラクターを演じ分けようとしては破綻しながら社会生活をも生き延びて、最後に自分自身を取り戻そうとする高機能自閉症者の壮絶な記録である。彼女も食べ物に対する重症のアレルギーや時々動けなくなったり歩けなくなったりする身体機能の不具合を有していた。

『我、自閉症に生まれて』(1986/1993)のテンプル・グランディンの特性や人となりについては、オリヴァー・サックスの『火星の人類学者 脳神経科医と7人の奇妙な患者』(1995/2001)の表題にもなっている「火星の人類学者」でも詳しく述べられている。前述のように、グランディンはウィリアムズやガーランドとは違って愛情あふれる母親という生育環境に恵まれ、そのこだわりと才能をまっすぐに伸ばして動物学で博士号を取り、牧場の施設や機械を設計し、コロラド州立大学准教授の職に就いている。

ここで杉山の言う「異文化」の人達として登場するアスペルガー症候群、高機能自閉症の者は、いずれも社会性・コミュニケーション障害以外に激しい身体の機能不全や感覚過

敏を有し、特にニキとガーランドは長らく自分の「家族」の存在も理解できず、他人との区別もできぬような状態であった。ある意味、あまりにも尋常ではないから有名になったのだと言ってもよい。

先の対談集の中でニキ自身も「自閉じゃない人にも自閉的要素はありますが、やはり私たちはそれとは違うと思います。一人の人の中にたくさん集中したり、濃縮されたりすると自閉になるんだという気がします。ある線を越えて濃縮されると、量的変化が質的变化に転ずるところがあるような気がしています」と述べており、それを受けて、編集者もニキや藤家をやはり『『自閉』という異文化の中に暮している人だ』（ニキ他 2004:128）と評している。結局、公に「異文化」として論じられるのは、健常者と顕著に異なる点が多い、重度の身体機能不全をも伴う一部の重篤な ASD 者なのである。

綾屋紗月と並んで ASD 者として何度もメディアに登場している片岡聡は「私たちの感覚過敏・鈍麻は『気になる』あるいは『気にならない』というレベルで表現できるものではない。健常者には全く気にならない電話のベルの音で完全な思考停止に陥ったり、虫垂炎の痛みを全く感じず危険な状態になるまで受診できなかったりと生活に多大な支障を来すレベルのものである」（片岡他 2014:18）と記している。共著者で ASD の菊地啓子についても次のような描写がある。

「学校で休み時間になった途端に周囲の音に耐えられなくなり、悲鳴を上げながら教室を出る」というようなことが頻繁にあった。（…）障害と認識しないまま就職した結果、「仕事中に別の部署で硬貨を数える音でステンレス製の机に頭を何度も打ちつける」「我慢を続けて意識を失う」など、自助努力による環境調整の限界を超え、慣れたはずの自宅でも水洗トイレの音等によるパニックが悪化した。（前掲:20）

何度か触れているように自閉症スペクトラムの範疇に属する者が 10 人に 1 人（本田 2013:111-114）と言われる中で、「手厚い保護が必要な人たち」は「ASD の人の中には百人あるいは千人に 1 人程度」であると片岡自身も述べ、「このような困難度の高い人たちをどのように支援していくかという視点がおろそかになってはならない。そして、ASD の人たちの重症度を評価するうえで知的障害の併存の他に、感覚の問題をはじめとする身体的困難の評価が考慮されるべきである」（片岡他 2014:19-20）と主張している。

一方、筆者をはじめとする勤労中高年 ASD 者が最も困難とするのは、たとえばカクテ



ルパーティー効果は他者の話を聞き取らねばならないという状況があつて初めて問題となるものであり、身体的なものというよりコミュニケーション問題でもある。ASD が見えない障害と言われる所以であるが、着眼点や理解の仕方の違いによるコミュニケーション上の失敗により、職場に居づらくなるなどして離転職を繰り返すケースも多い。重症者の中には講演等の啓発活動や ASD 者対象の有償のカウンセリング業務・ワークショップ開催等を生活の糧の一助にするような者もいるが、公的支援も受けられないレベルの一見「普通」の中高年 ASD 者には、自力で就労する以外に生活の途は通常ない。このような困難度の低い、だが転職を何度も経験するという生活上の支障が実際にある ASD 者の支援もおろそかになってはならないし、「知的障害の併存」や「身体的困難の評価」と同等に社会的困難の評価も考慮されるべきである。

働けないほどの身体の不具合がなく、定型発達に合わせて意思の疎通もできる市井の ASD 者の、しかもその一部の者の雑音の苦手さや、次節で述べる定型発達者とのほんの少しの違いは、どれほどその当事者が定型発達の挙動の方を「異文化」と認識して途方に暮れていても、いちいち報道はされない。コミュニケーション障害でも本当に文字通り何でも真に受ける極端な例や、身体的な特性がわかりやすい上述の重篤な ASD 者にのみ目を向けるメディアの「表象」もまた偏っているのである。支援職だけでなく ASD 者の配偶者やパートナーなど本を出版できる立場の一部の者が昔の人類学者のような手前勝手な「表象」をすること、一般の人々も研究者ならぬメディアが演出する重篤者の「表象」のみによって ASD について理解した気になることなどは避けられねばならない。

#### 4.3 勤労中高年 ASD 者の抱える問題

##### 4.3.1 A さん（50 代男性当事者）のエスノグラフィー

ここでは具体的なストーリー展開が見られる一人の勤労中高年 ASD 者の発言を中心に取り上げる。50 代になってからアスペルガー症候群の診断が下りた A さんは、職場での交渉事や管理職として他者をまとめる際に必要となる全体への目配り、適切な指示を出すという高度な意思伝達が困難だった。長年「一人で職人みたいな形でこつこつやっていた仕事」が管理職への昇進とともに「段取りをつけたたりプロジェクトを率いたり外部の人と交渉したりという」業務に変わり、「ちょっとこれはしんどいなあと考えて」、つまり配慮

や支援を受けられるかと考えて診断を受けたが、会社とのその交渉自体が障害特性ゆえに難しい状況であることが述べられている。

**A さん【50 代男性・当事者】**：50 代の当事者です。診断を受けたのは今年に入ってからなんですけども、自分が ASD ではないかと気づいていたのは 2000 年ぐらいからで、その時は不便を感じていなくて医者にかかろうとも思っていなかったんですが、数年前から会社の組織が大きく変わりまして、今まで一人で職人みたいな形でこつこつやっていた仕事から管理職みたいな仕事に変わりまして、段取りをつけたりプロジェクトを率いたり外部の人と交渉したりという風に、苦手な仕事をたくさん任されるようになりました。それでちょっとこれはしんどいなあと思って、去年の末頃からちょっと診断を受けてみようかと、そうしたら何かいいことがあるんちゃうかなあと思って、まあ受けてみたんですけども、それで ASD の診断出たんですけど、結局、今のところ紙切れ一枚もらっただけで、その後の支援というものに全然つながってなくてどうしようかなあ。ものの本には支援が大切とか書いてあるんですけども、自分はそういうサポートが受けられるのかな、と思案してるのが今の状態です。(2014.10.22 第二回)

その後、同じ回に参加していた 40 代の女性の当事者 C さんから、「行政のサポートも必要だが、たとえば身体障害者ならヘルパーなど、生活保護受給者なら行政、区役所などにつながっている、そういうネットワークを発達障害者に限らず、障害者全体が自分で作り、その中のキーパーソンとして自分がいるという形にしていけないとおそらく生活は難しい」という趣旨の発言があった。

**A さん**：本人がキーパーソンにならないといけないという話が出てましたが、私も強くそう思ってまして、当事者が子供でしたらまず親が第一次的な支援者になって、そこから各分野の専門家とか支援団体とかにお願いして、その支援をまとめていくということになるんですけども、当事者が大人になってしまいますと、そういう何でも面倒見てくれる一次的な支援者というのはもういなくなってしまいますので、各それぞれのニーズに合わせてそれぞれの分野の専門家とかに掛け合って、その支援をいただくという、キーパーソンというかコーディネーションの作業を当事者自身がやらな

いといけない。これも一種の交渉事になってしまいますので、そういうのが苦手な当事者にとっては非常につらい状態になってます。

私も働いてますと、どうしても会社に対してこういう障害の診断が出ましたので配慮をお願いしますと言っても、じゃあどういう配慮をしたらいいんですか、ということになってしまいますので、会社としても営利企業ですのでどんな希望も聞いてもらえるわけでもないし、こちらが望んでることと会社として提供できることをすり合わせて妥協点を見つけていけないといけないんですけども、それも一種の交渉事なんです、そういうのが、まさにそれが苦手な ASD の人にとっては非常につらい状態になっている、ということですね。(2014.10.22 第二回)

このような、自分一人でする仕事ではなくチームのまとめ役にならねばならない場合の困難を会社に伝えるにあたって、Aさんは「誰かケースワーク的な専門家が間に入ってもらえれば非常に有難い」とも思うが、主治医は特に介入せず、自分で会社側に診断書を提示した。その結果、管理職から平社員への降格となり、「その分給料もちょっと下がったんですけども、まあそういうのは会社にとっては合理的配慮なのかなあ」と釈然としない状態であった。さらに、「このまま窓際社員として定年までずるずると行く」のか、「管理職の仕事をするか、さもなくば辞めてくれという分岐点に立たされる可能性はある」という心配もあった。

**Aさん**：今年の春頃に、こういう、診断書を見せまして、実はこういうことでしたので、という風な話になってから、それ以前はいくつか管理職的な仕事を任されてたんですけども、そういうのはもう今年の春から全部お役御免にされまして、その分給料もちょっと下がったんですけども、まあそういうのは会社にとっては合理的配慮なのかなあという、あまり釈然としませんが、今のところそういうところです。

**Cさん【40代女性・当事者】**：今はじゃあ管理職的なお役目というのはちょっとこう、負担が軽減されてるということですか。

**筆者【50代Xジェンダー・当事者】**：それでもまだやはり通訳の立場の人が間にまだ今要る、要るというか必要であるという、そういう状況でしょうか。

**Aさん**：そうですね、このまま窓際社員として定年までずるずると行くんだったらまあ今のままで OK だと思うんですけども、そんな仕事いつまであるかわかりませんし、

だからその、もっと上の方に、もっと管理職の仕事をするか、さもなくば辞めてくれという分岐点に立たされる可能性はあると思います。(2014.10.22 第二回)

さらに、Aさんは以前から当事者会や様々な本で情報を得ようと努力しており、第4回と第6回では以下のような考えを述べた。障害による困難ゆえに「今まで取りこぼしてきたもの」があると感じるが、そういったことについて相談できる機関がない。第6回で、それは具体的にはリーダーシップを身につけることや人脈を作ること等をも含むことが明らかになるが、いずれにせよ第4回の時点でも、「今からそういうものを身につけていくシステムが社内にも社外にもあまり見つけられない」上に、これらも含めた配慮や支援にかかるコストや定年までのタイムリミットの問題など実にいろいろなことにまで考えが及んでいるのが伺える。

**Aさん:**(…)子供とか若い人と比べて中高年の場合どういうことが違うかといったら、タイムリミットを意識しないといけないということじゃないか、と思うんですね。私の場合、もう50代ですけども、できたら今この歳からでも年齢相応の仕事ができるようになっていきたい、そのために今まで取りこぼしてきたものを一つでも二つでも取り返していきたい、と思っています。そのために、職場とか各方面の支援を仰ぎたいと思ってるんですけども、やっぱりそういうのは、配慮の一つ、支援の一つにしても、一つ一つコストがかかってきますので、今からこれだけコストをかけて元が取れるんかどうか、とかいうのはやっぱり若い人や子供と比べて、この歳になると問題になってくと思うんですね。この年相応の支援、配慮というのはどういうものなのかと世の中見回してみても、そういうことについて書いた本は全然ありませんので、そういうところを今、もう手探りで考えてるところです。(2015.3.24 第4回)

**筆者:**結局毎日の仕事はそのまま、特に差し支えなく、滞りなくは一日一日ちゃんとやってはおられる。前おっしゃってたこと、それがいつ解雇になるか、また何か変更があるかもしれないという、そういうお話もありましたね。

**Aさん:**まあ、たった今はないですけども、その、昨今ですからいろいろ仕事の環境もいつどんな理由で大きく変わるかわからない、と。たとえば今何とか利益は出ますけど、それが状況が大きく変わったら、またリストラもせなあかん、ということ

になるかもしれないし、今は何とかなってるけども、一寸先はどうなるかわからないですね。

そういう支援についていろいろ調べたんですけど、崖の上、崖っぷちぎりぎりにいる人には支援がなくて、崖から落ちて初めて支援があるというような状態みたいです。

**筆者：**不安な状態で、一応現状を送ってるという形ですね。具体的にどうしたいですか。

**A さん：**具体的にはね、やっぱり気持ちとしては、今までに身につけそこねてきたスキルを一つ一つでも取り返して、年齢相応の仕事が少しでもできるようになっていたらいいなあ、と思うんですけども、今からそういうものを身につけていくシステムが社内にも社外にもあまり見つけられないという…。たとえば、50代なんですけど、リーダーシップを身につけるにはどうしたらいいですか、というのを相談できる所はないですし、人脈って何ですか、人脈ってどうやったらつけられますか、というのを相談できる所ってちょっとないですね。だから、ちょっと具体的にどう動いたらいいかわからない、という答えです。(2015.7.18 第6回)

その前から何回かに渡り、現状の報告と平行して「ジョブコーチ」の話題が上っていた。このような仲介に当たる人材・制度が勤労中高年 ASD 者の場合は利用できないため、解決の糸口がつかめない状態である。開催回が前後するが、以下は A さんが初めて当カフェで語った第二回における、C さんとのやり取りである。

**C さん：**質問なんですけど、職業センターのジョブコーチとかっていうのは考えられたことはないですか。使われるとか。間に立って使うとか。今、一般雇用なんですよ。あ、そしたら無理ですね。障害者雇用だとジョブコーチっていう形で入っていたくことは可能です。以上です。

**A さん：**今の件の補足になりますけども、ものの本とかいろいろ資料を探してみたんですけど、私のちょっとつまずいてるところは、何とか平社員として、上から言われた仕事をこなすのは何とかやっていけたけども、一つ上の管理職的な仕事となるとちょっと難しいと感じてるということで、そういうのを支援してくれるジョブコーチというのはちょっと、管理職のジョブコーチなんていうのは聞いたこともありませんので、そういう支援は今のところないのかなあ、と思ってます。(2014.10.22 第二回)

そして第4回で職場に必要な支援の話になった。再びAさんがジョブコーチをつけるという方策は取れない窮状を具体的に訴える。

**Aさん：**職場での支援といいますと、必ずジョブコーチをつけたら、という話が出て来るんですけども、私がこれからやろうとしている仕事の場合、たとえばその、やっぱり管理職になってきますと、自分のとこの部署でだけ完結しないで、よその部署とか外部の業者さんともやり取りしないといけないし、企業秘密を扱うことも非常に多くなりますので、そういうところにいちいちジョブコーチに入ってもらって、というのは非常に難しいことだなあ、と。こういう場合の支援というのはまだ、探してもどこにも書いたものがないんですね。

**筆者：**ありがとうございます。企業秘密ですね、そうですね。新たな難題が。中の人に勉強してもらうしかないですね。一番近くの上司とか、ですよ。（2015.3.24 第4回）

たとえば大阪障害者職業センターの場合、「具体的なサポート例」に「**Case①** 精神疾患のある方／就職に向けての職場実習が決まり、ジョブコーチ支援を利用」と「**Case②** 発達障害のある方／雇用後1年経過し、職場適応上の課題が見られるようになった。」の2例しか挙げられておらず、「**Case②**」の「＜障害のある方に対する支援＞」は次のようなものである<sup>23</sup>。

- ・集中力の維持が難しいこと、作業の「終わり」が分からないことに関して相談。
- ・指導の背景には、「しっかり育ってもらいたい」という担当者の気持ちがあることを助言。具体的な指導内容も取り違いないように、その意味合いを解説。相互理解が深まり、担当者の方との関係を改善。
- ・職場のルールを明文化し、実際に守れるように支援。

---

<sup>23</sup> 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構 大阪障害者職業センターHP「障害のある方へのサービス」[http://www.jeed.or.jp/location/chiiki/osaka/27\\_osaka\\_service1.html](http://www.jeed.or.jp/location/chiiki/osaka/27_osaka_service1.html) 内「ジョブコーチ支援のごあんない」PDF  
<http://www.jeed.or.jp/location/chiiki/osaka/om5ru8000000a2x6-att/om5ru8000000a373.pdf>  
（最終閲覧日 2018 年 3 月 27 日）

これらはまるで初めて働く若年層への支援であり、「段取りをつけたりプロジェクトを率いたり外部の人と交渉したりという」「司令塔の役割」だけが苦手な中高年の管理職は想定されていない。必要とされる支援のレベルが明らかに初歩的なものに限定されており、外部との折衝も体面もあり企業秘密をも扱う管理職には、ジョブコーチの介入など現実的に考えてまず不可能である。

そして、この第4回の当カフェの後、実際にAさんは京阪神のある障害者職業センターに出向いて話を聞いて来る。以下は実りある結果にならなかった旨を報告する第5回のAさんの発言である。

**Aさん：**(…) 去年、自閉症スペクトラムの診断を受けました。それでそのあと、なんか支援がないかと、探しまわってるところですね。それで、前回までのこのカフェに参加させていただいて、就労支援というか、ジョブコーチつけてもらったとか、そういう話をしてきたんですけども、私は本とネットで手に入るぐらいの知識しか持ってなかったのも、実際のところどうなのかと思ひまして、先日その障害者職業センターに伺って、話聞いてきたんですね。

それで、私ぐらいの年齢で私ぐらいの境遇にある人が実際どんな支援を受けられるのか、実際どんな支援を受けておられる方がいるのか、ということで伺って来たんですけども、この障害者職業センターの方があんまりそういう似たような例を持っていない、という結論でした。

それで具体的に支援に対して動き出すとしたら、うちの職場の人に対してその職業センターから働きかける、あるいは来てもらってうちの上司と相談して、というようなことがどうしても必要になってくるんですけども、まあ、そのお役所から職場に対してお尋ねがあるとか、乗り込んで来る、会社から見たらそうなので、そういうのは結構<sup>おおごと</sup>大事になってしまいそうなことなので、どういう形でアプローチしていけばいいのかな、というのを思案してるところです。(2015.5.16 第5回)

**Aさん：**先ほども申しました、職業センターに行っていていろいろ話してきたような、その時にも出た話なんですけども、私が勤めてる所はたまたま営利企業なので、いろいろ配慮をして欲しいとゆって[[言って]]も、あんまりその無理なことは言えない、とい

うことがありますね。民間の営利企業としてやってる所なので、あんまり無理を言うわけにはいかないんだけど、その、どこまでが OK でどっからが無理なのかという、物差しというか、相場というか、それは全くわからないで、どの程度の配慮とか支援をお願いしたらいいのかな、ということが全然わからなかったのも、その障害者センターの方にお聞きしたんですけども、やっぱりその障害者センターでもそういうのはよくわからないらしいんですね。全然似たような例がないので。(2015.5.16 第 5 回)

このように、障害者職業センターにジョブコーチの派遣という形の支援を願い出ることはおろか、管理職への支援に関する相談さえも実質的に無理であるということが明らかになった。

第 4 回で、ジョブコーチが無理なら「メンター」はどうかという話が出た。A さんの発言に対して筆者が「中の人に勉強してもらうしかないですね。一番近くの上司とか」と言った時である。コメンテーターの教員と A さんとのやり取りは以下のようなものであった。

**コメンテーター：**今の話を受けてですが、たとえば、今小さなお子さん、発達障害児をお持ちのお母さんに対してはペアレントメンターをつける、と。親御さんが同じ気持ちを持ってらっしゃる方で、数年先を走って上手くいってらっしゃる方にアドバイスをもらうというような、メンターというものがあります。(…)メンターさんはいわゆる、何かをしなさいと指示をしたり、こういう方法がいいですよと押しつけたり、そういうことをするのではなくて、もうひたすら今困っているお母さんの話を聞いて、そこでお母さんが聞きたいことを、自分の経験でお話をされる、要するにその気持ちをわかってあげるということで、非常にうまくいっているケースがある、と。(…)もしそういうメンターと同じ形で、仕事の時にいろんなことを理解してくれる人が、一緒に動いてくれるような人がいたら助かるかどうかということをちょっとお聞きしたいんですけど、いかがでしょうか。

**A さん：**そうですね、とにかく私みたいな人っていうのは職場に一人しかいないんで、なんか一人だけ浮いてるんですけども、チームに同じような特性を持つ人がもう一人でもいたら、多数決じゃないですけども、もう少し動きやすくなるかなあという気はします。(2015.3.24 第 4 回)



同じ経験をしている他者がいたとしても、この場合はペアレントメンターと違って障害当事者同士ということになるが、この発言から伺える勤労中高年 ASD 者の実感としては、外部の人間が新たに仲介役として参入するよりも、既に社内にいる人間で同じ立場である理解者がいればよい、ということである。ASD の者が社内に他にいなければ仮定の話ではないが、同じ社内の「メンターと同じ形で、仕事の時にいろんなことを理解してくれる人」というだけであれば、そのような理解者となる資質のある特定の社員と当事者がその要望や抱えている問題について話し合う機会を設けるなど、企業側がそれほどの負担なく提供できることでもあり、現状の改善の余地があるだろう。

前述のように、A さんは自分の希望と会社のできることを「すり合わせて妥協点を見つけていかないといけない」が、それこそが ASD の最も苦手とする交渉事なのでつらい状況にあり、「誰かケースワーク的な専門家が間に入ってもらえれば非常に有難い」と述べている。これらを受けてコメンテーターの教員は第二回で次のように提言していた。

コメンテーター：平成 28 年から始まる障害者差別解消法の（…）合理的配慮について、（…）特に発達障害のようになかなか他者から見て理解されにくいものの合理的配慮をどうするか、今まさにそのポイントをおっしゃっていただいたと思うんですけども、（…）まさに今のように一人でいる職だとうまくいっていたのに、他者と一緒にやらなければいけない所にまわされたがために、御本人のパフォーマンスが発揮できないということであれば、それは会社の配慮が足りないということになっていて、（…）サポートについて下さる方が中に入るっていうケースは、本当に公的機関、特に学校現場なんかはございますが、それですら専門的な知識が足りていない。ましてや通常の一般企業ですと多分それを求めるのは大変むづかしいんじゃないかなと、それよりは全員が発達障害の理解をしている状態を作るということを目指さないといけない（…）。（2014.10.22 第二回）

サポートにつく人間が外部から入るのはやはり難しいが、「メンターと同じ形で、仕事の時にいろんなことを理解してくれる人」は通訳のような役割だとも言える。雑誌『臨床心理学』（金剛出版、2014）主催の座談会において元厚生労働大臣尾辻秀久は、発達障害者が地域社会で生活する上で「共通して必要なもの」は「当事者の思いや希望をわかりやすく解説してくれる『通訳』の存在」だと述べ、次のような問題提起を行っている。

ただ、発達障害者の「通訳」は誰なのかと考えると、これは果たして専門家だけの役割なのだろうかと疑問に思うことがあります。たとえば当事者の方を職場でサポートする制度を各企業でつくるとします。すると、職場で働いている同僚が「通訳」になる可能性があります。そうすると「通訳」は専門家に限定されないのではないかと思うわけです。（尾辻他 2014:312）

尾辻の言う「職場で働いている同僚が『通訳』になる可能性」を一人あるいは特定の少数者ではなく、その組織の全構成員は難しいとしても当事者の所属する部署や同じフロア等にまで拡大すれば、「全員が発達障害の理解をしている状態」に一步近づくことになる。

民間企業で人事コンサルティングの職に就いている非当事者が当カフェに参加した第4回でも、依頼のあった ASD の中途採用社員のいる企業に対して「ちゃんとマニュアルを作るであるとか、業務マニュアルを作ってちゃんとみんなに共有するとか、それは定型の人にとっても勿論役に立つので」と提案し、その障害特性について研修をするなどの働きかけをしている、との発言があった。

このように、障害者職業センター等の「お役所」に限ることなく民間の機関や NPO 法人等によってでも、企業全体が気軽に ASD 啓発の研修を受ける機会、そしてその当事者個々の特性を周囲の人達が十分に理解する機会を設けることはできないものだろうか。求められるのは ASD 当事者である個々の社員に対してだけというよりも、まず企業の構成員全員に対する働きかけである。研修なりの一定の啓発活動によって「全員が発達障害の理解をしている状態」になるよう目指すための方策にさえ、企業側が「お役所がわざわざ乗り込んで来る」と身構えたり、何よりも当事者がコスト面などで気を遣って肩身の狭い思いをしたりするような状況であるならば、ASD 当事者が所属する企業には、公的機関か民営かを問わず専門職がいる団体による研修を義務づけ、ASD 啓発がごく当然のことと受け止められるような風潮を作らねばならない。

ただ、法律はできても、現実問題として非当事者側には予想もつかない場面で困難に遭遇する勤労中高年 ASD 者に対して職場全員の理解が得られるようになるまで仮にまだ数年、数十年を要するならば、研修の開催を念頭に置きながら、同じ社内の理解者をただ一人でも二人でもとりあえず企業側は配置すべきである。

A さんについては、最初の発言があった第二回から一年たって、多少状況が好転したと思われる報告を聞くことができた。

**A さん：**前回からその後の経過としましては、特に ASD に対する支援というのはことさらに受けてないんですけども、会社の仕事の中では小康状態、あんまり責められるような状態にはなってないです。自分に合った仕事をひとつふたつと回してもらえのような形で、仕事を続けてます。

あとは、この春から仕事一緒にやるようになった人がいて、その人は私よりずっと年下なんだけど、段取りつけるとか交渉事とかコミュニケーションとかリーダーシップとか、そういうのに関しては私よりできる人なんで、まあずっと年下ですけども、師匠みたいな感じで真似できるところは真似していったらいいなあと、そういう風に考えてます。

**筆者：**はい、ありがとうございます。それ、一応配慮という形でそういう方をまわして下さった、みたいな？

**A さん：**特にそういうことはなくて、もしかしたら私一人では心もとないから増員という形になったんかもしれませんし。(2015.11.7 第 8 回)

「この春から」ということであるが、同年 5 月の第 5 回、7 月の第 6 回、9 月の第 7 回ではその話には言及されなかったもので、11 月のこの時期にようやく A さんの眼から見て「師匠みたいな感じで真似できる」という安心感を伴っているような発言ができる状態にまで至ったと思われる。

A さんの場合は、勤務先にアスペルガー症候群の診断書を提示した、要するにカミングアウトした上での処遇であったが、この節の最後に、クローズドの勤務の一例について触れた発言を挙げておく。職場に障害を打ち明けていない場合は当人にも誰にも対処のしようがないのである。

**C さん：**ペアレントメンターの的なものが会社にもあればいい、ってことですよね。私もそれは思いますね。A 型の作業所だと一応支援員っていうか、相談員さんがいて、そういう役割を果たすようになって欲しいなあって私は思ってるんですけど、一般の企業さんだとなかなかそれは難しいし、特に、障害者雇用で働いてる場合は、障害者

就業生活支援センターであるとか、ああいう所に入ってもらっているものもありますが、クロードで、障害を隠して一般企業で働いておられる方はそういう方を付けることすらできないので、配慮が欲しければ自分で直属の上司なりに言っていくしかないっていうのがほぼ現状なようです。

なかなかそういうメンター的な役割になってもらうのは、ちょっと一般企業さんでは難しいっていう風に、私の友人の中にもクロードで働いてる友人がおりますので、聞いているとそのようです。うまくいってる人はやっぱり、特性を伝えた上で働かれて、それがうまくいかないと転職を繰り返すとか、定型さんと違うとこでつまずいて、挙句の果てにその職を辞めてしまうことにつながることになる…。(2015.3.24 第4回)

#### 4.3.2 Cさん(40代女性当事者)のライフストーリー

CさんはASDとADHDの当事者で、当カフェには初回から2018年3月開催の第22回の時点まではほぼ毎回参加している。下記のライフストーリー・インタビューは、当カフェとは別の場所で2016年(平成28年)2月23日に約80分、同3月27日に85分、同4月7日に約70分かけて一対一で行われたものをICレコーダーで録音し、文字起こしした原稿からの抜粋である。感嘆詞・間投詞及びテーマからはずれる合間の短い会話等は適宜省略している。方言の標準語形は二重ブラケット(〔 〕)で挿入し、補足説明は( )内に加えている。

インタビューのうち、ここでは「勤労」が話題の中心となっている部分をまず取り上げる。

Cさんは高校卒業後、3年制の短大の看護学科に進学したが、マルチタスクの困難と手先の無器用さが災いして細かい手作業を伴う実習がクリアできず、留年・休学の後に中退に至った。その後はアルバイトや派遣社員、病院の看護助手として数年ずつ働き、32歳の時に2年制の介護専門学校に入学する。無事卒業後、ホームヘルパーの仕事を1年してから、老人保健施設に勤めるが、3年半働いて1年半は病気休職という形で5年在籍することになる。

Cさん：介護の専門学校はほんまトラブルなかったですね。

筆者：すごい。このあとで、就職？

Cさん：えっと、就職しました。34で。あの、ヘルパーの事業所で、

筆者：何？

Cさん：ヘルパー。ホームヘルパーの事業所。

筆者：ホームヘルパーの事業所。

Cさん：うん。1年で辞めました。

筆者：あ、そうなんや

Cさん：ヘルパーは合わない、と。

筆者：そうなんや。ヘルパーさん、何するんです？直接家行っているいろいろするん、

Cさん：直接家行ってお掃除したり、お料理したり、買物行ったり。

筆者：それマルチタスクちゃいます？

Cさん：んー。

筆者：あんまり決まってないんじゃないですか？家ごとにばらばらですし。

Cさん：決まってない。家ごとにばらばらやし、構造化できへんし。

筆者：構造化できないの大きいですね。その時その時、行くところ違うんですね。言われるままにあちこち行かなあかんのですか。それか、曜日ごとに違うとか。

Cさん：まあ毎日行くおうちもあったし。

筆者：家ごとに違う。そのあとは。

Cさん：そのあとは、1年たって、ほんで、老健行って。

筆者：35から？何。

Cさん：老健。

筆者：老健って何です。

Cさん：老人保健施設。保健は、あの、「保健体育」の「保健」ね。

筆者：はいはい。老人保健施設って何です？デイケア？

Cさん：要するにね、法律的には、お年寄りが病院に入院しますよね、病院に入院して、おうちに帰りますよね、退院するとなると。

筆者：はい。

Cさん：だけど、まだそこまで体力が回復しきってない人を戻すのはなんなので、入れる中間施設として作られた施設なんですよ。

筆者：入院と退院の間。退院する前、直前に。

Cさん：ま、ちょっとリハビリのために入所するような施設やったんですけど、実際には特養を待ってるような施設ですね、特養入所を待っているような施設。

筆者：はいはいはい。

Cさん：…に、勤め始めて、最初行ってたんですけど、やっぱりマルチタスクを聞いてなかったのかして、仕事遅かったですね。

筆者：ふんふん。で、文句言われて、

Cさん：あ、文句言われましたね。仕事遅いね、ちょっと仕事急いでねー、みたいな感じで言われたりとかして。夜勤は一人やったんで、ワンオペやったんで、

筆者：はあはあ。夜勤か。

Cさん：夜勤はワンオペなので、シングルタスクを極力して、自分で、やってて。で、やっぱり仕事遅いですし、なんやかんやで、そこでちょっと、リーダーさんとかにいじめられたんかな。

筆者：なんと！リーダー。

Cさん：ほんで、鬱状態になって、

筆者：ああー、またですか。大変やな。

Cさん：ここで、精神科行きましたね。精神科っていうか、最初は内科行っただけです。

筆者：35歳からしばらく（勤めて）、精神科かかれたのがおいくつ。

Cさん：38ですね。

筆者：3年も行ってはったんですか。老人保健施設。

Cさん：うん。在籍は5年ぐらいしたよ。3年半ぐらいは働いて、1年半は病気休職したから、在籍は5年ぐらいしてました。

筆者：すごいですね。

Cさん：でも、そこでも、内科、最初かかって、3か月か4か月ぐらいで、あかん、治れへんから心療内科行ってくれって言われて、心療内科紹介されて行って、翌年頃まで同じ心療内科かかってたんですよ。

筆者：あ、そうなんや。

Cさん：うん。そこで薬漬けになって、なんか、いらいらするいうだけでリスパダール出すような医者やったんで。

Cさんは、通院は継続しながら40歳の時に老人保健施設から精神科病院へと転職し、そこで3年ほど介護職員として働く。しかしそこでもうまくいかずに退職し、発達障害の診断が下りたのはようやくその後のことだった。

Cさん：で、6年も鬱が治らへんのはおかしい、って先生にゆって[[言って]]、その頃にちょうど、大人の発達障害の本がぼちぼちと、その頃ですね、出始めたのが。

筆者：40歳の頃、

Cさん：2008年頃。40から精神科病院で働いてるんですわ。

筆者：そうなん。

Cさん：うん。転職したんですわ。

筆者：はいはい。あ、そっか、5年在籍したあと、看護助手？

Cさん：看護助手というか、介護職員で。そこでもやっぱし、

筆者：鬱状態？

Cさん：うん、もう、そこ行ってる時は抑鬱が続いてたし、薬は飲んでるし、上司に被害妄想はいただくし、幻聴は聞こえるしってすごかったんですけど（笑）。

筆者：でも働いてはったんです？

Cさん：働いてましたね。リスパダールとかデパスとか飲みながら働いてましたよ。ほんで、ほんでから、

筆者：おんなじ所に通院しつつ仕事して、43歳で、発達障害、

Cさん：44ですね。その時に、あの、大人の発達障害の本が何冊か出て来たんで、何冊か読んで、「先生、あたし発達障害違うのん？」って言うたら「いや、あなたは鬱病よ」って言ったのがカチンと来て、別の医者へに転院したところで、44で。

筆者：なるほど。転院して診断が出た。

Cさん：診断が下りましたね。

二次障害としての鬱状態はあったとしても、患者が発達障害ではないかと指摘してさえ誤診の可能性を考えない医者にあたったために、Cさんが診断を得るまでに数年を要している。診断が下りた前後の時期の様子や思うところを詳しく振り返ってもらった。

Cさん：（老人保健施設に）就職して何年で鬱になったのかな。入って2年ぐらいで鬱になったのかな。なんかね、その介護施設に5年ぐらい結局在籍してるんですけど、1年半ぐらい休職してるんで、ほんで、そこで鬱になったのが結局、二次障害が先に出ちゃった、って感じですね。発達障害が先にわかってれば違ったんやろうけど、先に二次障害という形で鬱が現れて、病院で診断した医者は単なる鬱病、仕事のストレスから来る、対人関係から来る鬱病やって診断したんですけど、あとになって（転院してから）、いや、あなたのは休んだら、仕事から離れたら、鬱症状って消えるでしょ、って。仕事をしたら鬱症状出るじゃないですかって話になって、でまあ、知能検査、WAIS-IIIとか取って、ほんでバウムテスト、木の絵描かされるテストありますよね、ロールシャッハはやらなかったのかな、うん、その二つぐらいやって、先生の診断もあって、ああ、あなた広汎性発達障害ですよ、ってあとで言われたんですね。それ、（精神科病院の介護職員の仕事を）辞めてからですよ。勿論辞めてからなんですけど。だから、介護の施設で不適応起こさへんかったら、わからなかったかもしれないですね。発達障害っていうのは。

筆者：それ以前の職場では、そこまで不適応起こさなかった、

Cさん：そこまでは、うん、鬱症状が出るとこまではいかなかった。それまでに転職してたから。もうあかんあ思ったら。短いスパンですごい転職してるから。だから、短大やめてからその介護の仕事に至るまで結構転職してるんですよ。あかん、向いてへんと思ったら転職、あかん、向いてへんと思ったら転職、っていう感じやって、だからその転職の多さっていうのもそうなんかな、みたいな。

筆者：そうですね、みんなそうですね。みんな何回も転職してますね。

Cさん：なんか結構聞いてたら転職してはる方多いですよ。あたし、自分がその、こらえ性がないんやなって思ってたんですけど。

筆者：私も、私も（笑）。

Cさん：（笑）こらえ性がないんやなって思ってたけど、違うみたい、どうやらみんな、そういう、あれなんですよ。

Cさんの体験の「鬱症状が出るとこまではいかなかった。それまでに転職してたから。もうあかんあ思ったら。短いスパンですごい転職してるから。（…）あかん、向いてへんと思ったら転職、あかん、向いてへんと思ったら転職、っていう感じ」という部分は筆者も



同様である。C さんの場合は、周囲の人との軋轢も含まれるが、同時に複数の作業を並行してこなすことができない ASD の特性ゆえの、マルチタスクの苦手さがネックだった。

C さん：44 で診断受けた時は無職でしたね。うん。

筆者：こないだ 4 月から作業所行かれたのが、久々の就職？

C さん：久々の就職ですね。その前に、何年か前に、3 年、4 年ぐらい前に一回働いてるんですけど、一週間ぐらいでクビになってるんで。ま、職歴にはカウントしたくないっていう感じですね。

筆者：職種は？介護の方ですか。

C さん：いや、病院の調理補助です。あそこもマルチタスクの帝王ですからね。

筆者：仕事ややこしくてできへんから辞めたんです？

C さん：うん、仕事できへんから、ま、半分クビみたいな感じですね。もう来んでええ、みたいな感じで言われて辞めた、

筆者：調理なんて、そうですね、大変すぎますね（笑）。

C さん：だから、調理師さんが来るまでにガス栓開けて、全部、いくつかガス栓あるんで、ゼーんぶ開けて、お湯を沸かして、御飯炊いて、全部やらなあかんで。今考えただけでも二度とやりたくない、鬱ナンバーワンですね（笑）。

C さんは診断後、自立訓練施設に一年間通い、その後、ハローワークの障害者窓口の臨床心理士の勧めで、現在通っている就労継続支援 A 型事業所（A 型作業所）に移ることになった。それから一年たった現在<sup>24</sup>抱いている将来の展望について話してもらった。

筆者：作業所ってずっと行かれるんですか。

C さん：いや、

筆者：いずれ辞めないといけないんですか。

C さん：辞めないといけないっていうことはなくって、A 型って所はあくまでも一般就労の橋渡しみたいな所なんで。で、自分自身も就職することを望んでるし、勿論障害者枠ですけど。障害をオープンにした形ですけど。まあ、それで行って、目標と

---

<sup>24</sup> インタビュー当時の平成 28 年（2016 年）。

しては今年中、今年中っていうか来年度中ですね、4月から来年度中、目標にして、どこか行きたいなあ、1年かけて仕事を探そうかなあって。

(…)

筆者：職種は、どんな所を探すんですか。

Cさん：今思ってる夢としては、同じようなそういう発達障害を持つ子供の、今、放課後デイサービスってありますけど、そういう所で働きたいなと思ってますけど。まあ、一応保育士の資格も持ってますんで。ただ、すぐにそういう所に行けるかって言うたら、今まで探してきた中では、障害をオープンにして働くのは、まだ厳しい。正直、ハローワークに来てる求人は、そういう求人ないんで。

筆者：うーん。

Cさん：あると言えば病院の、また病院の助手さんとか、たとえばまあ、介護で夜勤やるのはもう二度とごめんなんで、たとえばデイサービスとかね、

筆者：ふんふん。

Cさん：老人のデイサービスとかね、日勤、いわゆる日中働けるような所で働けたらいいなあ、とりあえず働いて、何年か働いてから決めようかなあ、とは思ってますけど。

筆者：なるほど。

Cさん：うん。その方がいいのかなあ。まあ障害オープンにした方が配慮は得られやすいですよ、これから、あの、差別解消法とか、合理的配慮とかそういう話になってくるんですけど。障害者枠で就職した方が合理的配慮は得やすいんで。で、あたし、幸いその何て言うの、発達障害ってわかりにくい障害ではありますが、あれですよ、精神障害で鬱ですよってゆったら働きにくいんですよ、やっぱし。あなた波あるでしょ、って。発達障害の方が波ないですよ。だから、二次障害の鬱は言わなくて、安定してるから言わなくってもいいから、発達障害で、あたしはマルチタスクはきかへんとか、字義通りにとらえるとか、はっきり具体的に指示をくれとか、そういうことを配慮を求めて仕事をすれば、問題はないやろって、昔、よく話を聞いてもらってたその窓口の人に言われたんですよ。

筆者：はあ、はあ。

Cさん：だから、もう鬱の方は言わなくって、発達障害やから具体的に指示下さいとか、急な予定変更とかしないで前もって言って下さいとか、そういうことの配慮を求

めれば、あなた働けると思うわよ、みたいなことは以前言っていたことがあるので、そっちの方向で仕事は探して、そういう風に、まあ配慮を求めて仕事を探す、就職できたらそういう風に配慮を求めればいいのかなあ、的なことは思ってますね。

Cさんは発達障害の子供がいる放課後デイサービスのような場で働きたいという夢を語ってくれた。2015年3月の第4回の当カフェでは一般企業で発達障害であることを隠して働くことの不安について発言したCさんは、ちょうど1年後のこのインタビューでも「障害をオープンにして働くのは、まだ厳しい」としながらも、発達障害であることを明らかにして配慮を求めていきたい、という姿勢を見せている。

一方、話題は障害とともに生きることそのものに移る。

Cさん：最近ですよ、その、障害を持ちながらも生きていかなきゃあないなあ、働いていかなきゃあないな、って思い出したのは。うん。なんかその最近のもう知り合いの人と<sup>はなし</sup>話してたのは、「障害は個性だ」って言い方をする人が中にはいるじゃないですか。特に発達障害なんか、個性って誰にでも、私にもそんなんある、忘れっぽいところあるし、って。いやいやそういうレベルじゃない話やねんて。

筆者：そう！そう（笑）。

Cさん：あの、努力してもどうにもなれへんから障害なんであって、だからあたしなんかでも、家事やりますけど、掃除とか苦手、片付けとかすごい駄目なんです。苦手なんです。料理は作るけど後片付け苦手なタイプなんです。だから、あの、発達障害の人間が料理作るのって大変なんですよ。

筆者：うん。

Cさん：「少々」とかわかんないんですよ。

筆者：あ、はいはい。せやせや。

Cさん：（笑）塩少々とか、さっと炒めるとか。

筆者：ああ。（笑）

Cさん：わかんないから、「さっと」ってこれぐらい!?って感じで。うち、まだ母親、まあ認知症ですけど、料理の感覚はわかってますから聞くんですけど、「それぐらいでいいねん、それやったら火を通しすぎや！」とか、よう言われるんですけど。だか

ら火を通していい料理しか作りませんけどね。野菜炒めとかね。(笑) そうそうそう、だからそんな感じで。個性、じゃないんですよね。

筆者：うん。

Cさん：うん、だから、今ヘルパーさん頼んでますしね、片付けとかは。

『障害は個性だ』って言い方をする人が中にはいる(…)特に発達障害なんか、個性って誰にでも、私にもそなんある、忘れっぽいところあるし、って」というのは実際その通りで、前章の山本らにも見られた「障害の軽視」という陥穽であるが、発達障害に縁のない一般人ならともかく、支援・福祉職がこのような言説を公表してしまう点が大きな問題である。

障害と文化に関わる論考で有名なものは木村晴美・市田泰弘の「ろう文化宣言」であろう。「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」という彼らの定義は、『ろう者』＝『耳の聞こえない者』、つまり『障害者』という病理的視点から、『ろう者』＝『日本手話を日常言語として用いる者』、つまり『言語的少数者』という社会的文化的視点への転換(木村他 1995/2000:8)を示している。ここで、それでは ASD 者に対する『障害者』という病理的視点」をカッコに入れ、「社会的文化的視点」から論ずることは可能なのか、という命題が立てられそうだが、第3章で述べたように、比較的症状が軽く健常者に近いように見える ASD 者の行動は、障害特性によるところが大きいものまでが「専門家」によってさえ非難を浴びている。本章でも論じているように、健常者の感覚とは完全に断絶した「異文化」としか思えない行動ならば自伝や体験談として出版され、対談集や医師の啓発本にも載せられて「障害」ということで理解され得るのに、障害程度が比較的軽いように見える身近な ASD 者ならば健常者と同じ地平に並べて健常者の視点で批判されるのである。すなわち、山本のような支援職及び下記に取り上げるような福祉職は、脳の機能不全であっても見た目でわかる身体の不具合がなく、一見したところは行動も健常者のようである ASD 者に対してはそもそも『障害者』という病理的視点」さえ欠けているために「社会的文化的視点」に切り替えることもできないのである。山本がしきりに「心理的・社会的な文脈」(42)を謳いながら特定の発達障害者に対してはついにそのような文脈も視点も適用できなかった所以である。

従って、無理解な健常者は発達障害者を障害とは意識せずに、なおかつ欠けているところがある者、できないことがある者というようにただ見下す視点のままであるのだが、あ

からさまに発達障害者を貶める山本と同様にアスペルガー症候群の配偶者をただただ批判する野波ツナ（2011）『旦那さんはアスペルガー』、『旦那さんはアスペルガー ウチのパパってなんかヘン!?』（いずれもコスミック出版）など先鋭的な一部を除けば、非当事者は下記の今泉（2006）のごとく、ASD 者に対して同情に満ちた苦しい言い訳のようなフォローに終始しがちなのではないだろうか。但し、これが素人ではなく専門職による文章である点は重視すべきである。

問題の一節は、田垣正晋編著（2006）『障害・病いと「ふつう」のはざままで 軽度障害者 どっちつかずのジレンマを語る』（明石書店）における今泉佳代子の執筆担当の「第7章 軽度発達障害をめぐって」（今泉 2006a:185-200）の付録、「コラム 発達のパランスの悪さを知る」（今泉 2006b:201-202）と題された部分である。なお、ここで言う「軽度発達障害」<sup>25</sup>は、その前の第7章で「知的機能の障害を伴わないか、伴っていても軽い場合の発達障害のこと」とし（今泉 2006a:189）、「広汎性発達障害（自閉症スペクトラム）」、「学習障害（Learning Disorder, LD）」、「多動性の障害」（前掲:191-193）が挙げられている。今泉は 2003 年より独立型社会福祉士事業所として「発達障害児者とその家族に対する相談面接、トレーニング」、「他機関の発達障害分野に関するコンサルテーション、スーパービジョンなど」を主な事業内容の一つとする社会福祉事務所を運営している社会福祉士、すなわち発達障害者に対する支援職である<sup>26</sup>。「コラム」の全文を引用する。

多くの人々は、軽度発達障害の臨床像に関する文献を読んでいると、「自分もこういうところがある」と、軽度発達障害を身近に感じるはずである。しばしば、軽度発達障害とかかわっている人は「自分は広汎性ですから」「短期記憶が悪くて」などと、自身を軽度発達障害のように語る。筆者も沢山のことを同時に処理できないし、耳で聞きとったことばの理解が悪い。でも、視空間認知は悪くないし、想像を膨らませる

---

<sup>25</sup> 「軽度」の語が誤解を招くことから、この文献の出版（平成 18 年 8 月）後の平成 19 年 3 月、文部科学省初等中等教育局特別支援教育課は、「4. 「軽度発達障害」の表記は、その意味する範囲が必ずしも明確ではないこと等の理由から、今後当課においては原則として使用しない。」との旨を公表している。

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/main/002.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/002.htm)（最終閲覧日 2018 年 3 月 27 日。）

<sup>26</sup> 今泉佳代子による「一般公開用 独立型社会福祉士および事業所の概要」参照。  
[https://www.jacsw.or.jp/17\\_dokuritsu/ichiran/06/40\\_ImaizumiKayoko.pdf](https://www.jacsw.or.jp/17_dokuritsu/ichiran/06/40_ImaizumiKayoko.pdf)（最終閲覧日 2018 年 3 月 27 日。）

のは得意だ。本当に困っている軽度発達障害の方からしてみれば、甚だ「失礼」なのかもしれないが、誰でも発達に特徴があるのは当たり前である。たとえば、ウェクスラー式の発達検査をとって下位検査まですべてのポイントが同じ人がいるだろうか。おそらく、そのような人は稀で、ほとんどが「得意な分野」「苦手な分野」が浮き彫りになり、凸凹のプロフィールになるだろう。軽度発達障害と「普通」の線引きはあいまいだという点で、あまり軽度発達障害を他人事だと思わない方がいい。

もし、各教科すべて得意で、なんでもよく覚えており、人間関係で困ったことがなく、スポーツができ、芸術の才能があり、迂闊なことをしたこともなく、いつも冷静沈着で、「何も悩んでいない」人がいたとしたら、超人か、そう思いこんでいるちょっと自己認知の悪い人だと思う。誰にでも「できない」ところがあるはずである。自分の「できない」ことを認めるのは辛い。でも、それを認め、「できない」ところをすべて克服しようとはしなかったはずで、それが「精神的なバランスのよさ」につながっているはずだ。数学が苦手だと思った人は、理系に行かなかっただろうし、スポーツが苦手な人が、体育大学に行こうと思わないのが普通だ。苦手な部分は、多少の努力をしても、どうにか迂回して概ね健康に生きているはずである。障害は個性だというと、障害者の強がりにも聞こえたり、障害があることがことさらによいような意図をもっているのではないかと訝ってしまう人もいるだろうが、万能超人になる必要はないという意味で、発達のバランスの悪さが一人一人の価値である個性をつくっているように思う。

当事者たちは本当に困っているのだから、あまり当事者然とするのはよくないが、自身の苦手さやうまくいかなさと自分がそれにどう対応してきたのかをよく理解しておく、当事者の視点で考えることができることがある。しかも、現実社会で生き抜いている人の話は説得力がある。軽度発達障害と関わることがあれば、よく自身の強さ弱さを理解し、そのことについて当事者と語れたらよいと思う。（今泉 2006b:201-202、傍点引用者）

まず、この本の序章から第2章までを編著者の「右上肢分婉麻痺という『軽度』身体障害者」（田垣 2006a:14）であるところの田垣正晋が担当しており、以下、第7章を除いた第3章から最終章の第8章までは、知的障害者の支援、統合失調症の当事者の語り、高次脳機能障害などについてそれぞれ研究者や当事者によって書かれたものである。いずれも

重大なテーマであり体験と知見に基づいたものだが、第7章だけは冒頭に「筆者が以前社会福祉士としてかかわったことのある」（今泉 2006a:186）アスペルガー症候群の中学生の例に少し触れられているものの、内容が非常に薄い。ちょうど直前の第6章の執筆者である高次脳機能障害の研究者が、コラムで自身の研究に関して「いったん首を突っ込んだ以上、無責任なことはやってはいけない、（…）だから、いったい誰のためなのかわからない、文献をひっくり返しただけの研究や、多額の費用を使って大規模調査をして、いわずもがなの結果を出すような研究はやってこなかったし、これからもやるつもりはない」（赤松 2006:184）と自負して挙げている、この悪い例の「いったい誰のためなのかわからない、文献をひっくり返しただけの研究」にそのままあてはまるのである。この書に掲載しなくても他の多くの文献で既に述べられていることをまとめただけであり、特に目新しい点はない。しかも章末の引用文献にはニキ・リンコ、藤家寛子、グニラ・ガーランド、ドナ・ウィリアムズ等が挙げられているのに、なぜコラムで「多くの人々は、軽度発達障害の臨床像に関する文献を読んでいると、『自分もこういうところがある』と、軽度発達障害を身近に感じるはずである」と言えるのかが不可解である。「軽度」とは、前述のように知的障害がほぼないことである。アスペルガー症候群や高機能自閉症もこの時点の分類では軽度発達障害であるが、重度の身体不全を有するニキやウィリアムズを見て「身近に感じる」人がどれだけいるのだろうか。今泉ははたして引用文献をきちんと読んだのだろうかという疑問さえ生じ得る。

上記コラムの中の「ウェクスラー式の発達検査をとって下位検査まですべてのポイントが同じ人がいるだろうか」、第二段落の最初の「各教科すべて得意で、なんでもよく覚えており、人間関係で困ったことがなく、（…）いつも冷静沈着で、『何も悩んでいない』人がいたとしたら」という部分は、山本の手法と同じくあり得ない極端な話であり、現実困っている ASD 当事者にとって何の意味もない仮定である。そのような人はいない、「誰でも発達に特徴があるのは当たり前」というのはその通りである。だが、だからといって ASD 当事者の生きづらさや困難が軽くなるわけではない。ニキもある地点で質的变化に転じてしまうと述べている障害の程度の違いを軽視すべきではないし、「軽度発達障害と『普通』の線引きはあいまいだ」などと殊更強調すべきでもない。その後「他人事だと思わない方がいい」と続けてはいても、かえってそれが今泉にとっては発達障害がいかに関心事であるかを示しており、「本当に困っている軽度発達障害の方からしてみれば、甚だ『失礼』なのかもしれないが」と前置きをしているが、カギカッコ付きの「失礼」ではなく、実際

に失礼である。誰にでもあることなのだから、文句を言うな、ということなのだろうか。皮肉なことに、このような執筆者しか発達障害の関係者の知り合いがいなかったと思われる編著者の田垣自身は、以下のように述べているのである。

(…) 障害は個性であると主張しすぎると、非障害者から「だったら、たいして気にする必要はない」という意味に取られかねないのである。やや言い過ぎかもしれないが、「障害が個性だったら、税金を使って支援をする必要はないだろう」という見解を生み出しかねないのである。(田垣 2006b:36-37)

障害特性ゆえの困難を周囲に訴えても、Cさんのように健常者に「私にもそんなんある、忘れっぽいところあるし」と一言で片づけられること、「個性」という語をわざわざ出されたり「線引きはあいまいだ」からと軽視されたりすることがどれほど辛いかを想像する能力もない者が支援者を名乗っているのである。ここでも山本と同じく支援者側に欠けているのは「想像力」であり、ASD 当事者との違いを書いているつもりであるらしい「でも、視空間認知は悪くないし、想像を膨らませるのは得意だ」という今泉自身の適当に取り繕ったようにしか見えない言説は ASD 者の豊かな想像力の足元にも及ばない。ASD 者と違って想像力はある、という意味で書いたこの文は「想像力の障害」という診断基準を字義通りに理解して記述したのだろうが、この特性はあくまで他人の意図を適切に読めないことや決まった物事に対するこだわりや、知的障害を伴う ASD 児・者の常同行動などを主に指すのであって、空想やファンタジーの世界を自分で考え出してのめりこむ ASD 児も他人の思惑を考えすぎて萎縮する ASD 当事者も、「想像を膨らませる」能力は常人よりはるかに豊かであると言っても言い過ぎではない。

そして最後に「軽度発達障害と関わることがあれば、(…) 当事者と語れたらよいと思う」とあるのは語るに落ちた感がある。読者に勧めているのか自分の希望か判然としないが、どちらにせよこのような他人の社交辞令で締めくくるしかないということは、今泉は本当に日々困っている少なくとも成人の ASD 当事者とは支援職として接し、見つめ、寄り添ったことどころか、まともに話をしたことさえないのではないか。このような経験不足の者にわざわざ無理解な文章を書かせる編著者の責任は重いと言えるが、身体障害者の編著者は所詮他の障害である発達障害には無関心ということであろう。



筆者：うん、ほな[[それでは]]、あとは日々思うこと。

Cさん：日々思うこと。

筆者：（笑）さっきの続きでもいいですよ。障害は個性だとか言われたら困るよね、いう。

Cさん：うーん。個性じゃないですね。だから、障害は個性じゃなくて、困り事やから、

筆者：そうですわ。

Cさん：うん、困り事ですょ。

筆者：うん。

Cさん：せやから、どうゆったらいいいねんやろ。ほんまに、これだけで話が何時間もできてしまうぐらいのテーマではあるんですけど、障害は個性じゃない、とあたしは思ってます。

筆者：そう。

Cさん：ほんで別に障害を持ってることを卑下する必要もないと思うし、

筆者：そう。

Cさん：しょうがないですね。で、特に発達障害なんて、さかのぼれば生まれ持ってたわけですし。

筆者：うん。

Cさん：生まれ持って、持ってたものですし。たまたまけつまずいて、ね、あれしてただけの話で。（…）でも、前にもゆったかもしれないけど、その、やっぱほっとしましたよね。今までの困り事すべてが、やっぱそこに集約されるっていうか。あの、転職繰り返しとったんも、あれ、いろんな、こう鬱症状が出て来たのも全部発達障害のせいやって、ね、やっぱほっとしましたよね。

筆者：うん。

Cさん：説明つくじゃないですか、それで。

筆者：うん。

Cさん：ある程度は。

筆者：うん。そうですね。

## 第5章 総括

### 5.1 支援の問題点

#### 5.1.1 支援職の教育の問題

現在の大学入試制度では、たとえば人を育てるという非常に重要な幼児教育や保育に携わる者、小学校の教員を目指す者の養成課程は、若い一時期に真剣に勉強に打ち込む能力や生来の知力の高さがある程度要求されるいわゆる高偏差値の大学にはない。他の大学や通信教育等でわざわざ必要な単位を揃えるなりせねば、なりたくてもなれない仕組みになっているため、たとえば東大や京大出身の保育士や幼稚園教諭や小学校教員は通常は存在しない。難関大学に合格するために費やす年月や労力や教育費に見合った社会的地位も給与面等の待遇も期待できないために、受験科目数が多く、遊びたい盛りに広く基礎知識を身につける根気や能力を備えた受験生が集まる大学の卒業生には幼児・児童教育の現場に立つ者はほとんど含まれない。福祉職も同様である。

筆者は30年近く大学受験産業に携わり、人に深く関わる幼児教育や福祉の分野を志望する者がほとんど読書経験もなく中学・高校レベルの基礎知識もおぼつかない学力と低い偏差値でも進学できる現状を目の当たりにしてきた。必要な知識を吸収する能力や思考力は人間相手の仕事をする上で最低限の前提であり、福祉職においては社会福祉関連学部の学力的なハードルの低さは問題である。確かに、大学・専門学校等入学時の偏差値ではなく円満な人格や熱意を重視すべきではあるが、予測不能な「新しい」障害を有する者に不快な目に遭わされたからといって勉強もせず、悪口三昧にふけるようでは、支援を受ける側が迷惑を被る。仮に新しい症例を目にして患者を公然と非難するような医師がいるとすれば淘汰されるであろうが、なぜ福祉職ならそのような倫理観の欠如した行為がまかり通るのだろうか。

我が国の受験制度上、「高校の勉強が嫌いだから医学部でいい」、「成績も今一つなのでせいぜい医大に進学できれば十分」などというロジックは成り立たないが、「そんなに受験勉強ばかりしたくないし、社会福祉系なら偏差値的に行けそう」、「私立の福祉系でいいや」などといったケースはいくらでもあり得るのであって、言い換えれば、高収入で社会的地位の高い職に就ける分野に人材が流れること、大学入試において難関とされる大学に福祉

系の学部がないために、優秀な人材がわざわざ志望大学のランクを落としてまで福祉職を目指さないような受験制度になっていることが第一の大きな問題である。福祉職の教育制度の改善とともに社会的地位の向上と待遇改善が必要であり、福祉の現場が高収入で福利厚生面でも好待遇であったなら、流入してくる人材の質は随分違ってくるだろう。

モノづくりなど技術を必要とする分野でも、営業職でも販売職でもどのような職にでも言えることだが、その分野の最新の知見に目を配り、その上でイレギュラーな例をも含む自分の担当の職務に対応できるよう日々考えることをも必要とされるのが「仕事」である。支援職も、現状の待遇面の悪さはあっても、社会的弱者に関わる職を志した以上、基本的知識を身につけるよう努力し、その上で被支援者の個々の特性を把握して応用すべきではないのだろうか。特に発達障害者支援においては、まず「たんに診断名を伝えるのではなく、この障害の特性についてのていねいな説明が求められ」、「その説明は彼らの持ち味に合わせたものでなければならない」、「周囲の人々への説明も、持ち味に合わせたものでなければまったく意味をなさない」（田中（千） 2009:256-257）はずである。これほど文献もインターネット上の関連サイト等も豊富に利用できる現在、医学的知識と診断の意義を十分理解した上で、目の前の個々の発達障害者の特性に応じて対処するのが支援職の「仕事」である。個別に対処する上で前提となる大枠の知識すらない人間、必要な知識を捨て去った人間が発達障害者支援に携わるということは、支援者の古い知識すなわち先入観と支援者の健常者としての視点で障害特性をも解釈するということである。その挙句、自分の思い通りにならない発達障害者に対する不満を公にぶちまけるようでは 20 数年も前の福祉川柳事件よりも退歩していると言わざるを得ない。

医師の体験記にその医師自身の失敗や反省を伴う回想がよく見られるのに対し、発達障害に関わる文献は、支援職の失敗談ではなく、発達障害者が悪者あるいはせいぜい不可解であるというストーリーになってしまうのはなぜなのだろうか。福祉関連の記録に関しては、支援職の失敗を失敗した時点でそのまま、しかもいかにも発達障害者側が悪いような筆致で公表するのではなく、取組みとしてある程度成功の見込みが出て来たところまでの一連の過程までも包含する、あるいは失敗したとしても支援職側の自省の言葉を入れるなど、出版には何重にも配慮が必要である。脳の障害に関わるデリケートな問題を扱うのに障害者を悪しざまに罵る文献が何種類も出版されている我が国の現状は異常であり、無名の発達障害者が貶められる図式はまるでオリエンタリズムそのものである。

イスラムとアラブに関する書物や論文は定期的に発行されてはいるが、それらは中世やルネッサンス期の敵意に満ちた反イスラム的論陣の域をまったく一步も出ていない。ある民族・宗派について、事実上何を書こうが何を言おうがいかなる抗議も異議も受けないというのは、(イスラム・アラブ以外の)ほかの民族・宗派に関してはちよつと考えられないことである。(サイード 1978/1993b:201、傍点引用者)

当該文献の施設職員、笹谷の「ナラティヴ」は一般の健常者には発達障害者や支援のあり方に対する綺麗事で飾られた誤解を、障害当事者には支援職に対する不信感や侮蔑や絶望などを植えつけかねない。権力ある側が社会的弱者の陰口を叩くのみならず、Montejoの記述の“they have represented native people with the anthropologist’s preferred images: ‘primitives,’ ‘minorities,’ ‘backward,’ or just ‘informants.’”というような勝手な表象を公にすることは絶対に許されないはずである。これは人としての倫理の問題である。

近年は、患者や障害当事者のいない所でスタッフだけで当事者の処遇について勝手に話し合うことはしないオープン・ダイアログの試みもなされている。社会精神医学教授のトム・アンデルセンが家族療法において患者の家族にセラピスト側の話し合いをすべて公開するリフレクティング・チームの実践を行ったのは1985年である(アンデルセン1992/1997:96-97)。家族療法を専門とするリン・ホフマンは、マクナミーとガーゲン編(1992/1997)『ナラティヴ・セラピー 社会構成主義の原点』に寄せた文章「家族療法のための再帰的視点」の第二節「メンタルヘルスにおける植民地主義」において、次のように述べている。

メンタルヘルスの領域にとって最も重大な挑戦だと思われるのは、「通常社会科学」(この理論家たちは客観的な社会研究における西洋的信念に依拠している)が研究者や臨床家に一種の植民地主義を植えつけているというポストモダニズムからの指摘である。前述したポストモダンの人類学者によれば、過去的人类学者たちの多くは「対象者を見下した研究」をしてきたという。自分たちより「文明化」されていない社会や、民族文化や社会階級という点で限定的な集団を選んで研究してきたというのである。同様に、「通常のサイコセラピー」が臨床家の心の中に植民地主義的心性を植えつけていると、メンタルヘルス領域の多くの研究者たちが論じている。比喩的な言い

方を続ければ、そこで行われていることは「対象者を見下した臨床実践」と呼べるであろう。(ホフマン 1992/1997:35-36)

科学的な知識ゆえに優位に立って植民地主義に陥るわけではなく、我が国の発達障害支援の場合は、少なくとも当該文献に登場する現場では科学を捨て去った知識のない恣意的な健常者の目線で発達障害者が誹謗中傷されている。その違いはあるが、「メンタルヘルスにおける植民地主義」とは言い得て妙である。Hannaford (1985) も 1981 年にイギリスの障害者施設 (residential institutions) を調査して次のように述べている。

I was amazed at these institutions, how freely staff discussed residents. Staff seemed to feel that they had a personal understanding of the resident's lifestyle and had the right to comment and make judgments upon it.  
(…)

Several younger residents were described to me as 'not accepting their disability.' This was seen in terms of understanding their difficult behavior.  
(Hannaford 1985:53)

施設職員は障害当事者のいない所で平気でその当事者について支配的な言説を披露し、問題行動があれば本人の障害受容のできなさをせいにする、2016 年の山本智子の著書と全く同じことが 30 年以上前の英国でなされているのである。施設職員の勉強不足だけではなく、心理士の認識もあまりにも遅れていると言わざるを得ない。

欧米の良い面を採り入れるといっても、たとえば自分が伝染病にかかっていると思い込んでいる患者の不安に寄り添い、「この病気にかかってどのくらいですか？」と患者の視点に立って話をじっくり聞くことにより、その思い込みを消失させたグーリシャンの「無知の姿勢」(アンダーソン他 1992/1997:76-83、野口 2002:95-106、傍点引用者) は ASD 者には適用しにくい。ナラティブで解決するものとししないものがあるのは既に考察した通りである。心因性の症状に適した療法ではなく、医学的知識が前提なのであり、ここで参考にすべきは被支援者に共感する姿勢のみである。上述のリフレクティングやオープン・ダイアログなどをこそ見習うべきであり、脳の機能障害であることがわかっている発達障害者に心理的な解決策を無理に適用するような心理職は淘汰されるべきである。

そのためには第二の改善点として、福祉職を目指す者には大学入学後や成人後にでも医学的知識、医療倫理、福祉に必要な最新の知見、論理的な思考力を身につけるための系統立った高度な教育を強制的に受けさせるべきである。また、知識面だけでなく人としての育て直しも必要である。大学でも専門学校でも通信教育でも、就職後の研修でも、臨床発達心理士は勿論、施設職員でもハローワークの職員でも、障害者に関わる職に就くためには医学的知識や倫理を含む厳しい資格試験、認定試験を設定してハードルを高くすべきである。

無論、スタート地点だけではなく、定期的な研修と更新に係る試験も必要である。山本や笹谷のような特に知的障害者などの従来支援に関わった者の方が先入観に毒されているのはこれまで見た通りである。福祉川柳事件のように人としての倫理を欠いた支援職を擁護してストレスがどうのと待遇改善だけ叫ぶのは筋違いであり、若者の教育とともに、経験者の学び直し、育て直しが制度上必須でなければならない。

### 5. 1. 2 ASD の特性把握の問題

ASD 者に対しては以下のような特性にも留意すべきである。本田の著書（2013）から一当事者として重要であると強く実感している点を引用する。

対人関係は、実は、かなり複雑な要素が絡み合っています。「仲良しだけれどもライバル」というような、一見、矛盾した要素が両立する場合があります。この場合、これらの矛盾した要素のどちらに注目するのかというところでも、一般の人たちは図と地<sup>27</sup>の見方を細やかに転じながら、うまく両者の視点を使い分けています。

しかし、このような使い分けは、自閉症スペクトラムの人にはとても難しいのです。  
(…)

逆に、後で述べるように、対人関係の中で傷ついてしまった自閉症スペクトラムの人たちの一部には、心配りすぎることにこだわりすぎてしまい、すべてのことについて他者の意向を尊重しようとするあまり、自己主張ができずに、ストレスをため込んでしまう人もいます。（本田 2013:54-56）

---

<sup>27</sup> この直前にルビンの壺を図示して注目する対象の違いについて解説する記述がある。  
（本田 2013:51-53）

空気が読めないからいじめられる、と思われがちですが、自閉症スペクトラムの特徴が強くて全く空気を読まない人は、いじめられていることにも気づきません。むしろ、多少空気を読もうという気づきのある人のほうが、頑張って空気を読もうとするのに読み間違えてしまい、それをからかわれていることに気づいて、「いじめられている」と感じてしまうことが多いのです。(前掲:75)

典型的な自閉症では、ほかの人の考えを全く推論しないのですが、自閉症スペクトラムの特徴が弱い人は、学齢期以降になると、人の気持ちが少しわかるようになります。しかし、明確にわかるわけではないので、しばしば誤解をします。その誤解のしかたが、「自分は人から馬鹿にされている」といった被害関係念慮の形を取ることがあります。嫌な経験をたくさんしてきた人で、この傾向が強いようです。(前掲:80)

上記引用文の「嫌な経験をたくさんしてきた人」と山本智子の当該文献の「事業所を利用している人々は、すでに他者との間で深い傷つきを抱えている場合が少なくない」(119)という記述は一致している。だがその「嫌な経験」は障害特性由来のものである。それを理解できない山本は下記のようなことを述べている。以下、当該文献の「第7章 発達障害がある人の『ネガティブ・フィルター』—ネガティブな眼差しや扱いを取り込む—」の「1 人の言動や表情をネガティブに受けとる」(123-125)の全項、「すべてのものから否定されている」、「自閉症スペクトラム障害がある人の社会的知性」、「人間の思考は社会的なもの」から引用する。

「すべてのものから否定されている」

(…)

成人になってから発達障害の診断を受けた人々は、他者とともに生きていく上での困難に長い間苦しんだ末に診断という決断にたどり着いた人々だと思います。学齢期に不適応を起こして家から出ることができなくなった人、就職をしたもののうまくいかず何度も離転職を繰り返し途方にくれていた人、自分がどう生きたらよいのかを見失い、誰もが敵に見え攻撃的になっていった人など様々です。

しかし、彼らが共通して内側に抱えている思いには、「自分の人生はこれからどうなるのだろうか」という大きな不安と、「何とか助けてほしい」という願い、そして、「人は信用できない」という信念のようなものがあるように思いました。「支援していると思せかけて自分を落としいれよう（引用者注：原文ママ）としている」「いつも馬鹿にしているような目で自分を見る」「どうせ何もできないと思っているような顔をしている」などと支援している人を表現する彼らの話を聴いていると、彼らを取り巻く支援者たちはなんて酷い人たちなのだろうと受け取ることもあります。しかし、実際に彼らが語る「ひどい人たち」に会うと、彼らのことを心配し、何とか一緒に困難を乗り越えようとしている「とても優しい人たち」であることが少なくありませんでした。

（…）成人になってから診断され、公的なサービスを利用するようになった人たちは自分に寄り添ってくれる人々の言動や表情をネガティブに受け取ってしまう傾向があるように思います。それはなぜなのでしょう。支援者は「彼らにはあたかもネガティブ・フィルターが存在しているようで、そのフィルターによって私たちの対応をすべて悪い方向に解釈しているように見えることがある」と表現します。

### 自閉症スペクトラム障害がある人の社会的知性

（…）自閉症スペクトラム障害がある人は、他者が喜んでいるという表情は読み取りやすいけれども、怒っていたり、怖がっていたり、悲しんでいるといった表情を認知することは難しいということです。（…）このことから、自閉症スペクトラム障害がある人は、他者の表情や視線などを手がかりにして何かをそのままに  $A=A$  や  $B=B$  と認知する能力に困難があることがわかります。しかし、私が出会った知的に遅れのない発達障害と診断されている人々は、 $A$  を  $A$ 、 $B$  を  $B$  ととらえない傾向がみられるだけでなく、他者の表現している  $A$  を  $-A$  に、 $B$  を  $-B$  に解釈しがちな側面がありました。これはなぜなのでしょう。（124-125、傍点引用者）

まず、「成人になってから発達障害の診断を受けた人々は、他者とともに生きていく上での困難に長い間苦しんだ」という点は、筆者をはじめ多くの中高年 ASD 者にとってはその通りである。だが、その末に「診断という決断にたどり着いた」という言い方では、診断がよほど悪いものであるようにしか思えない。これまで見てきたように、診断が救い



であり得る点にも公平を期してきちんと触れるべきである。

第一、「とても優しい人たち」とは、誰にとって「とても優しい」のであろうか。言うまでもなく同業者の山本から見て共感できる「優しい」人達である。被害妄想のひどい厄介な発達障害者に「寄り添ってくれる」、「何とか一緒に困難を乗り越えようとしている」自分と同じ立派な人達である。同業の支援職からの視点をまず自明なものとする書き方は、それと相対立する発達障害者の視点は常に異常であると指摘するのにほぼ等しい。しかも、「…してくれる」という表現は被支援者本人が用いるべきものであり、視点を転換しながら結局同業の支援職の自画自賛になっているのは狡猾な手法である。真に被支援者の視点に立つならば、ここで支援職の擁護は必要ない。「なぜなのでしょう」と山本はまたも意味ありげに繰り返すが、被害念慮の根本的な理由は他者の意図を直観的に読み取れない障害特性とそれによって生じる行き違いによるところが大きく、先の本田（2013）の引用文でほとんど答えが出ている。付け加えるとすれば、実際に無意識に発達障害者を貶める支援職の欺瞞を発達障害者がその知能の高さゆえに見抜いているだけの話である。

また、「他者の表情や視線などを手がかりにして何かをそのままに  $A=A$  や  $B=B$  と認知する能力に困難がある」のにマイナスにだけとらえる理由、すなわち山本から見て「優しい」だけのおそらく無自覚に配慮のない支援者達が肝心の被支援者から「酷い人たち」、「ひどい人たち」とみなされる理由を、ギアーツまで引き合いに出して、山本は次のように脳の機能障害ではなく他者との関わりのせいだと断じる。

### 人間の思考は社会的なもの

文化人類学者であるギアーツ（Geertz.C.）（1987b:295-297）は、「人間の思考は社会的なものであること」をバリ島における文化的装置に関する調査データの中からこう説明しています。

（…）

ギアーツによると、私たちがもつ観念や信念、価値観、表現形態は、特定の社会的文脈に適応し、刺激され、その文脈に影響を与えるものであると言います。この視点から、支援者がいう発達障害がある人のものごとのとらえ方（あたかもネガティブ・フィルターが存在するかのような）を考えてみると、それは、やはり、彼らの認知能力の弱さといった中核的な障がいというよりも、他者とのかかわりの中で形成されてきた社会的な経験による産物と考えられます。（125）

省略したがギアーツの引用文は、「バリ島民の観念は(…)西洋人の見方からすると、非常に変わっていて、(…)われわれ(西洋人)自身のあまりによく知られた捉え方だけを見ている時は、われわれには分からないものである」(125)という内容である。これに準じて、発達障害者の観念は我々支援職の視点だけで見ている時は分からないものである、従って発達障害者の考え方を理解するには「その行為にたずさわる人びとがもつ意味や視点の理解に根ざしたものでなければならない」(フランシス他 2004/2014:41)とでもするのならわかるが、山本の主張は決してそうはならない。まして、文化人類学者であるギアーツのバリ島民に対する理解と、発達障害者の被害念慮が「彼らの認知能力の弱さといった中核的な障がいというよりも、他者とのかかわりの中で形成されてきた社会的な経験による産物」であるという、近来の医学的知見を真っ向から否定する主張とがどうつながるのかは今ひとつ納得しかねるものがある。

臨床発達心理士が著書の中で畑違いの文化人類学者の古典を引用してまで、発達障害者の障害特性による思い違いとそれに対する周囲の人間の否定的な反応という経験の積み重ねから生じたであろうネガティブ・フィルターを「他者とのかかわりの中で形成されてきた社会的な経験による産物」であると言い切るのは画期的なことである。「認知能力の弱さといった中核的な障がい」も被害念慮の要因の一部として前提に据えておけばよいものを、医学、科学を否定してそのような画期的な説を主張するならば、当該文献で挙げた事例はその説に沿って説明すべきであった。発達障害者の困った行動が「心理的・社会的な文脈」、「他者とのかかわり」によるものであるということは、その困った行動のすべてが周囲の人間の責任によるということになる。本人に一切落ち度はない。しかし、そのような主張は直接発達障害者と接する支援職の立場を悪くするだけであり、最初から無理があった。そこから山本がなしたことは、今度はすべてを発達障害者とその育ちと診断と障害そのものの責任にすることであった。影響を与えた者としての自分達支援職は存在せず、ただ苦慮し、忍耐強く関わる「私たち」がクローズアップされる。本人の障害と周囲の影響の双方を考慮するという当然のことがなぜできないのであろうか。

当該文献の巻末に、元々あった別の原稿に加筆修正した章として第1章から第5章が挙げられている。施設職員が一切責められることなく擁護され、すべて発達障害の青年吉村の責任にされた第4章は前述の通り2014年の森岡との共著論文を元になっているが、3.3.6で論じた下記の問題の箇所は新たに付け加えられたものである。ギアーツを引用している

第7章も巻末に挙げられていないので、やはり2016年出版の当該文献のために書き下ろされたものと見るができる。つまり山本は第4章の直接発達障害当事者と関わっている施設職員をなぜか「他者」から完全に除外したまま、発達障害者が施設職員を責める原因を「他者とのかかわりの中で形成されてきた社会的な経験による産物」とであると断言する一連の文章を出版に向けて書き下ろしたことになる。

先に引用した「これは、自分を対象化して見られない『あなた』の『弱さ』だと受け取れることもできるかもしれません（…）この防波堤が、私たちを『（発達障害がある）人の気持ちかわからない人間』にしていないことを祈ります」（76）という一節の、「育ちの中での様々な苦痛を伴う経験」、「育ちの中で抱えた『生きにくさ』を生きてきた結果生じた『あなた』特有のコミュニケーション」のような記述は、吉村の笹谷への直接の批判を見事に置き去りにしている。「あなた」とは「私たちの相互関係の中で私たちの行為を反映する個人として現れてきた人」とであると明言しているにもかかわらず、「あなた」の粗暴さは「私たち」には一切関係ないのである。発達障害者を追いつめて被害念慮を抱かせる「他者」とは「私たち」支援者と出会う前に関わった見知らぬ人間であり、山本の同業者達は何のいわれもなく、支援におけるまずい対応もなく、いわば罪もなく「ひどい人たち」と思われる可哀想な被害者なのである。

多数派の定型発達者とは異なる脳の作用のために直観が働かないからこそ敏感である高機能発達障害者が「いつも馬鹿にしているような目で自分を見る」、「どうせ何もできないと思っているような顔をしている」と感じたということは、たとえ誤解であったにせよ、その支援者にそういう風に受け取られるような何らかの言動や表情が見られたのではないのか。着眼点とこだわりの相違から健常者には思いもつかないだけで、原因は必ず存在する。吉村が「僕が落ち込んでしまったり、感情が不安定になったら、それは笹谷さんの支援がうまくいかなかったということですよ。僕が職員なら笹谷さんよりもっと上手に支援できます。もっと、利用者の立場に立った支援を心掛けるべきです」（74）とまで指摘しているのなら、何がどう足りないのか、どうしてそう感じたのか、「利用者の立場に立った支援」と言えるにはどうすればいいのかなどを人として対等に話し合うべきであり、その結果までを公表すべきであった。繰り返すが、ここで吉村に批判されているのは育ってきた環境でも発達障害でも診断でも以前の職場の人間でもなく、施設職員である。これを全くの濡れ衣やとばっちりであると決めつけてしまえばナラティブどころか支援自体が成り立たない。誤解があるなら解くように努力し、笹谷の言うことには聞く耳も持ってもらえ

ないなら吉村が安心できそうな別の職員を同席させればよい。有能な職員がいなければ第三者を介在させればよい。少なくとも、「ぜったいにかかわりたくない」(74)、「吉村さんは障がいだから仕方がない」(75) などという障害者差別に満ちた本音をそのまま公表するような、職員だけの立場に立つ臨床発達心理士に愚痴を吐いて済ませるべきではなかった。

障害当事者の訴えにもかかわらず、本当に施設職員には何の落ち度もなく、山本らのあずかり知らぬ「育ち」や職場の人間等と発達障害という診断が吉村の不満の原因であると認識しているならば、事は心理士の能力や適性の問題である。これから支援職になる若者には論理的な思考ができるよう幅広くまともな本を読ませてしっかり教育を施し、年配の臨床発達心理士には何らかの再試験を受けさせるべきである。また、自分達の落ち度がわかっていながら自己弁護と自己正当化のために巧みに発達障害者を陥れようとしているのならば、あるいは特定の発達障害者に対して何らかの含むところがあって私怨や意趣返しのためにこのような私見を公表したのならば、これは倫理の問題である。人として欠陥のある者を支援に関わらせるべきではない。まず矯正が必要である。どちらにせよ、山本や山本と関わった施設職員らをはじめ、障害者支援に関わる者には再教育がなされるべきである。

ちなみに、山本が引用しているギアーツの『文化の解釈学Ⅰ・Ⅱ』、*The Interpretation of Cultures* のバリの闘鶏の研究についてはクラパンザーノが次のように批判している。

その表題はバリの村と闘鶏の精神の特性とはほとんど無関係なのだが、地口同様、民族誌家と、この場合には彼の読者との間の共謀関係を創り出す。また、民族誌家の文体的名人芸の証明でもある。彼と彼の読者は、理解のヒエラルキーの頂点に立って現れるのである。

(…)

地口、表題、副題、また単なる言明を通して、「人類学者」と彼の「バリ人」は互いに隔てられている。(…) 括弧付きの「バリ人」—もちろん限定なしのバリ人ではない—は、ギアーツの記述、解釈、理論化のための引き立て役、すなわちギアーツの自己提示のための引き立て役となるのである。

(…)

ギアーツは現象学的解釈学的主張をしているものの、『深い遊び』の中には原住民の

視点から見た原住民の理解など実は存在しない。あるのはただ、構築された原住民の、構築された視点から見た、構築された理解のみである。彼は意図を帰属せしめたり、主観を主張したり、経験を明言したりしているが、そのための具体的な根拠は提出していない。彼の構築物の構築物の構築物は、自己投影以上のものではほとんどないように見える。(クラパンザーノ 1986/1996:123-133、傍点引用者)

同様に、読者として同じ支援職だけを念頭に置いた著書において、山本と読者は発達障害者を誰よりも理解しているのだという自意識の暗黙の共謀関係を有し、「あなた」は「何とか一緒に困難を乗り越えようとしている『とても優しい人たち』」であるところの支援職の引き立て役であり、発達障害当事者の視点から見た発達障害者の理解など実は存在しないように思われる。これは表象の問題でもあり、次節で同様の問題を孕む他の文献を例に取って述べる。

## 5.2 表象の問題点

前章で触れた野波ツナの『旦那さんはアスペルガー<sup>アキラ</sup>』シリーズはいずれも 140 数ページの薄手のコミックだが、1、2 冊目（2011）は妻である野波ツナによるアスペルガー症候群の夫への主観的な批判が主に描かれている。次に、おそらく先の 2 冊への発達障害当事者からの批判が大きかったことから、急に夫への理解を示した独白が垣間見られて表現がやわらぐものの、別居したはずなのに無理矢理内容を埋めている感のある 3、4 冊目（2012、2014）、カサンドラ症候群や他のアスペルガー症候群の夫を持つ女性達を登場させて自分が被害者であることを客観的に示そうとしている 5、6 冊目（2015）、その後も 2016 年、2017 年に 1 冊ずつ発行されているが、最初の 1 冊だけ、あるいはせいぜい 2 冊だけ手に取って読んだ者には ASD について決定的に悪い印象を植えつけてしまう構成になっている。続編や他の文献を読むほどまでは発達障害に関して熱心ではない者には、ただその悪印象が記憶に残るという点で配慮のない公刊の仕方であった。

同書のタイトルは出版順に、『旦那さんはアスペルガー<sup>アキラ</sup>』（2011）、『旦那さんはアスペルガー<sup>アキラ</sup> ウチのパパってなんかヘン!?』（2011）、『旦那さんはアスペルガー<sup>アキラ</sup> しあわせのさがし方』（2012）、『旦那さんはアスペルガー<sup>アキラ</sup> 4 年目の自立!?』（2014）、『旦那さんはアスペルガー<sup>アキラ</sup>』

ルガー ツナ 奥さんはカサンドラ』(2015)、『旦那さんはアスペルガー アスペルガーとカサンドラ』(2015)、『旦那さんはアスペルガー みつけよう笑顔のヒント』(2016)、『アスペルガーと知らないで結婚したらとんでもないことになりました (旦那さんはアスペルガー)』(2017)であり、全巻とも作者は野波ツナ、監修は医師の宮尾益知、出版社はコスミック出版である。ここでは特に問題があると思われる1冊目と2冊目を取り上げる。

2015年10月の時点では、1冊目についてはインターネット上のAmazon.co.jpの読者によるカスタマーレビュー50件のうち、星印で表示される5段階評価の3以下のものは26件であった。発売直後から2冊目が発売されるまでの期間の1冊目のレビュー<sup>28</sup>は星5が5件、星4が2件、星3が1件、星2が2件で、ここでの最低評価の星2のものも冷静な分析で全体的に比較的高評価に見えたが、2011年10月の2冊目の発売以降、3冊目が発売されるまでの期間の評価は星5が4件、4が1件、2が2件、1が1件である。

ここで初めてはっきりとした批判が書かれる。星2の2件のレビューのタイトルは「一方的すぎる内容」、「ショックを受けました」というもので、前者の内容(全文、改行・空白行は省略)は、「終始一貫して夫への不満が書き連ねられています、どちらもどっち、両性の合意のもとに結婚した時点でどちらか片方が騙されたということはありません。夫(アキラ)さんをふざけて階段から突き落としたりなど自閉症者がうまくNOを表明できないことにつけ込んでいいように支配し、また都合が悪くなるとポイ捨てしているような内容でした。この作者は自分の性格については省みることはないのでしょうか。読んでいて悲しくなりました。」<sup>29</sup>というものである。

同時期(2011.10-2012.11)の2冊目のレビューは、星5が6件、星4が3件、星3が1件、星2が5件、星1が5件と評価が発売直後から真っ二つに分かれていた。最高評価のレビューのタイトルは「やっと共感できる本に巡りあえました」、「長年の謎が解けました」、「自分自身と夫との葛藤から別居に至った経緯とかぶりました。」、「ありのままを描いたりアルさに胸が打たれました」などで、星2の場合は「アスペルガーは『絶望』か」、「当

---

<sup>28</sup>

[http://www.amazon.co.jp/product-reviews/4774790532/ref=cm\\_cr\\_pr\\_btm\\_link\\_5?ie=UTF8&showViewpoints=1&sortBy=recent&reviewerType=all\\_reviews&formatType=all\\_formats&filterByStar=all\\_stars&pageNumber=5](http://www.amazon.co.jp/product-reviews/4774790532/ref=cm_cr_pr_btm_link_5?ie=UTF8&showViewpoints=1&sortBy=recent&reviewerType=all_reviews&formatType=all_formats&filterByStar=all_stars&pageNumber=5) (最終閲覧日 2018年3月27日。)

<sup>29</sup>

[http://www.amazon.co.jp/gp/customer-reviews/R3IU1CGR3XU0HM/ref=cm\\_cr\\_pr\\_rvw\\_ttl?ie=UTF8&ASIN=4774790532](http://www.amazon.co.jp/gp/customer-reviews/R3IU1CGR3XU0HM/ref=cm_cr_pr_rvw_ttl?ie=UTF8&ASIN=4774790532) (最終閲覧日 2018年3月27日。以下、個別の評価の抜き書きごとのURLは省略。)

事者の自分が読んでみて悲しくなった。「障害」と「育った環境」を混合し過ぎなのでは?」、  
「愛を感じない」、「アスペルガーは悪者ですか?」など、星1は「アスペルガー症候群への  
偏見を助長する本」、「『アスペルガーだから間違ってる』『健常者は100%正しい』」、「ひ  
どい差別と偏見」などである。その時点での2冊目の評価全体は、星5、4、3、2、1の順  
にそれぞれ9、7、3、6、7件であった。



『<sup>アキラ</sup>旦那さんはアスペルガー』(2011) pp.4-5

2018年3月現在、同サイトでの1冊目の評価は全68件<sup>30)</sup>のうち、5段階評価の5が22件、4が11件、3が15件、2が10件、1は10件であり、すなわち3以下のものは過半

30

[https://www.amazon.co.jp/%E6%97%A6%E9%82%A3-%E3%82%A2%E3%82%AD%E3%83%A9-%E3%81%95%E3%82%93%E3%81%AF%E3%82%A2%E3%82%B9%E3%83%9A%E3%83%AB%E3%82%AC%E3%83%BC-%E9%87%8E%E6%B3%A2-%E3%83%84%E3%83%8A/dp/4774790532/ref=cm\\_cr\\_arp\\_d\\_product\\_top?ie=UTF8](https://www.amazon.co.jp/%E6%97%A6%E9%82%A3-%E3%82%A2%E3%82%AD%E3%83%A9-%E3%81%95%E3%82%93%E3%81%AF%E3%82%A2%E3%82%B9%E3%83%9A%E3%83%AB%E3%82%AC%E3%83%BC-%E9%87%8E%E6%B3%A2-%E3%83%84%E3%83%8A/dp/4774790532/ref=cm_cr_arp_d_product_top?ie=UTF8) (最終閲覧日 2018年3月27日。)

数の 35 件である。2 冊目は全 39 件<sup>31</sup>のうち、星 5、4、3、2、1 の順に 12、7、5、6、8 件で、3 以下の評価はやはりほぼ過半数の 19 件である。

1 冊目の内容は、低評価のレビューにもあるが、「ワガママに人に合わせることも我慢もなく生きてきて、そのくせ一人で生きていけるほど努力もしていないし才能も磨かない。／だから漫画家としてやっていけなくて逃げ道として旦那さんと結婚した。／最初は旦那さんの稼ぎがあったらから上手くいっていたけど、／旦那さんの稼ぎがなくなった途端『旦那はおかしい！アスペルガー！自分は不幸！』と騒ぎ出す」<sup>32</sup>という様相を呈している。また、同じ評価 1 のレビューとしては以下のようなものもある<sup>33</sup>。

拝読して、一番強く持った印象は「アスペルガーに対する誤解を招く」というものでした。

内容は、終始「だらしない旦那（アキラさん）と、それを許す寛大な私（ツナさん）」という感じでした。

また、途中途中で発達障害専門医によるコラムや当事者インタビューの様子も入りますが、インタビューの会話を載せた上で、「ね？アスペルガーの人の問答って、こんなに幼稚なんですよ」とでも言いたげなものです。

支援者や当事者のご家族が読めば、参考になる事もあると思います。

しかし、当事者本人が読むと、逆にこの障害に対する悪口のオンパレードでとても嫌な気分になると思います。

このシリーズを 3 冊読みましたが（嫌なら読むなよといわれそうですが…）、この調

---

3 1

[https://www.amazon.co.jp/%E6%97%A6%E9%82%A3%E3%81%95%E3%82%93%E3%81%AF%E3%82%A2%E3%82%B9%E3%83%9A%E3%83%AB%E3%82%AC%E3%83%BC-%E3%82%A6%E3%83%81%E3%81%AE%E3%83%91%E3%83%91%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%AA%E3%82%93%E3%81%8B%E3%83%98%E3%83%B3-%E9%87%8E%E6%B3%A2-%E3%83%84%E3%83%8A/dp/4774790680/ref=sr\\_1\\_5?ie=UTF8&qid=1521239654&sr=8-5&keywords=%E9%87%8E%E6%B3%A2%E3%83%84%E3%83%8A](https://www.amazon.co.jp/%E6%97%A6%E9%82%A3%E3%81%95%E3%82%93%E3%81%AF%E3%82%A2%E3%82%B9%E3%83%9A%E3%83%AB%E3%82%AC%E3%83%BC-%E3%82%A6%E3%83%81%E3%81%AE%E3%83%91%E3%83%91%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%AA%E3%82%93%E3%81%8B%E3%83%98%E3%83%B3-%E9%87%8E%E6%B3%A2-%E3%83%84%E3%83%8A/dp/4774790680/ref=sr_1_5?ie=UTF8&qid=1521239654&sr=8-5&keywords=%E9%87%8E%E6%B3%A2%E3%83%84%E3%83%8A)（最終閲覧日 2018 年 3 月 27 日。）

3 2

[https://www.amazon.co.jp/gp/customer-reviews/R1AEDVY46QW3NB/ref=cm\\_cr\\_getr\\_d\\_rvw\\_ttl?ie=UTF8&ASIN=4774790532](https://www.amazon.co.jp/gp/customer-reviews/R1AEDVY46QW3NB/ref=cm_cr_getr_d_rvw_ttl?ie=UTF8&ASIN=4774790532)（最終閲覧日 2018 年 3 月 27 日。）

3 3

[https://www.amazon.co.jp/gp/customer-reviews/R1MBUQUZ9QAAB8/ref=cm\\_cr\\_getr\\_d\\_rvw\\_ttl?ie=UTF8&ASIN=4774790532](https://www.amazon.co.jp/gp/customer-reviews/R1MBUQUZ9QAAB8/ref=cm_cr_getr_d_rvw_ttl?ie=UTF8&ASIN=4774790532)（最終閲覧日 2018 年 3 月 27 日。）



子は変わりませんでした。

「『ね？アスペルガーの人の問答って、こんなに幼稚なんですよ』とでも言いたげなもの」という展開の仕方はまさにその通りであり、巻頭から、作者である野波は「疲れてしまっ」て涙をこぼしている可愛らしい被害者、夫は無表情または怒ったような表情の「自覚のない」、何も理解できないアスペルガー障害者という図式が明示される（野波 2011a:4-5）。スミスが言うところの「K が『精神病になりつつあること』が最初から一つの事実として主張され、それが一貫して保たれている（…）これと同じ構成は、このテキストのさまざまな点でなされている」（スミス 1978/1987:106-107）というエスノメソドロジーの手法そのままである。「読み手／聞き手はいつも『あなたはそこにいなかったのに、いったい何がわかるというの』という挑戦に無防備なのだ」（前掲:110）。

2 冊目まではただ夫に対する批判が、「小さいことを累積することによって異例を生み出している」（前掲:143）がごとく些細な行動を逐一積み重ねることによって語られ、特にここでは父親に振り回される形になる子供達の不満がそれに加わる。思春期にさしかかった娘に関するエピソードの一つは、録音を頼んだ CD 以外にビートルズなど有名アーティストの CD もついでにミュージックプレイヤーに入れてくれる父親を「よけいなことしないで！消して！」と母親が責め、娘は「こんなの好きじゃないし聴かないのに…」と聴きもせずに拒絶するというものである（野波 2011b:68-70）。しかし、すぐ次のエピソードでこの娘は、自分が勧めた漫画本をきちんと全巻読んだ父親が「面白かった」と笑顔で一言しか感想を言わぬからと、「感動を共有したかったのに」、「あれこれ言い合って盛り上がりたかったのに…」と不満を抱く（前掲:71-75）。他者の意図を想像できない点で、この父と母娘、一体どちらが発達障害なのかと言いたくなる展開である。山本（2016）と同様、相矛盾した主張が並立していることに野波は気づいていない。

やはりここでも、この作品が仮に『旦那さんは車椅子』、『旦那さんは統合失調症』などであつたらどうなっていたか、作者の意に沿わぬ言動を細かく漫画化し、子供達と一丸となつてただ非難し続けるこの論調であればそもそも出版さえできないのではないのか、という疑問は生じる。山本にも共通することだが、なぜアスペルガー症候群なら、本人にはどうにもできぬ障害特性を公然と批判し、出版することができるのだろうか。1、2 冊目に対するネット上の批判に呼応するかのように、作者の方に自分も変わらねばという反省が少し見られるようになるのは 3 冊目以降である。発達障害者のコミュニケーション障害を

公にただ非難したい者は相手のせいばかりしていないで、下記にあるようにまず我が身を振り返るべきである。

AS の青年と個人的につき合うことが多い人なら、同じような実感を持つことがあると思うが、彼らがよく経験している安定した集団の中では、ほとんど問題なく適切な対人行動を取ることができることが多い。(…)社会性というものを取り扱う場合、その社会を構成している他の人々の社会性も問われるべきであり、(…)また、「コミュニケーションの障害」に関しては、そもそもコミュニケーション能力を測る基準が、コミュニケーションの場で対峙している一方の人だけの能力をもって判定する方法論でいいのかという疑問がある。(西村 2010:204-205、傍点引用者)

その他、聴覚障害の男性が発達障害の恋人に体の線が出るいかにも女性らしい服を着せようとしては、チクチクした生地感触や不要な細かい飾りゆえに拒絶する彼女に対して「よく違いがわかりません」、「思いこみの強さが原因」などと描写する、くらげ著『ボクの彼女は発達障害 障害者カップルのドタバタ日記』(2013、学研教育出版)のようなものもある。

自身は肥満体であるにもかかわらず、嫌がる恋人にはぴったりとした服の着用というステレオタイプな女性らしさ、可愛らしさを強制する、明らかに触覚過敏でいつもだぼっとした服を好む当事者の女性への無理解だけではなく、セクシャルハラスメントとも言える男性視線の押しつけが冒頭からあまりにも露骨で、当事者にとっては読むのに努力を要する文献である。定型発達者の視点から発達障害者の苦労をおかしなもの、変わったもの扱いするような本は非当事者の好奇心をそそり、売り上げにつながりやすいのだろうが、出版すべきではないとしか言いようがない。私達は見世物でも金儲けの道具でもない。

### 5.3 おわりに

ある病院では、看護職の多くが「入院中に療法に反する行為(糖尿病患者が間食するなど)を行っている患者に対して注意をしたところ、『わかってるんだよ』などと怒鳴り返された経験がある」という(三井 2004:99-100)。そのような患者の拒否的態度が個人的な攻撃のように感じられる時、看護職はどのように対処するか。たとえば、患者の拒否的態度

度を無視し、いわば患者を「モノのように扱う」業務的態度に徹するという技法がある。だがその根底にあるのは、「患者が拒否的態度を示すのは『ヘンな患者』だからであり、看護職の責任では全くない」という認識である（前掲:102）。無論、これは事態を悪化させるだけであり、患者とのコミュニケーションを断たずに拒否的態度の背景を探る試みを可能にするには、まず「患者が拒否しているのは『私』ではなく、『看護婦である私』にすぎないと捉え返す」ことが必要である。実際、複数の看護職が「あくまで仕事なんですよ」「生理的にキライな人っていますよね。でも今は自分は看護婦だし（…）」「別にその人を好きになるとかお友達になる（必要がある）わけではないから」と述べながら「職務として患者に関わるのだと意識」し、「『看護婦』としてなすべきことは最大限に試み」ることで患者の「話を聞く」ことができおり、そこから新たな可能性が開かれるという（前掲:106-115）。

また、田中康雄は精神科医になってすぐの頃のことを、「治療者あるいは医療者という立場にいる『僕の奢り』に、わずかですが気づきはじめました。それは、長期入院患者さんたちを退院させてあげる、社会復帰させてあげる、病棟の束縛をとり快適な生活をすこしでも提供してあげる、という、『善意』に潜む『優越感』でした」（田中（康） 2009:6）と振り返っている。

身体・精神疾患の入院患者とは状況が異なるとはいえ、施設職員や心理職もこのような医療従事者の姿勢に少しは学ぶべきである。2.2と3.3.6で述べたように、大切なのは発達障害の相談支援のケースのような「淡々としながら肯定的な態度で接し、興味深く傾聴する姿勢」（高木 2014:304）や、看護職のように「職務として」関わることであり、何より発達障害者を自分達と対等な人間と見なすことである。さらに言えば、「初回の面談時にマイナスのイメージを抱かせてしまうと、その後の支援が滞ってしまうのも発達障害をもつ人たちの特徴であり、慎重な対応が求められる」（近藤他 2014:296）のであるから、第一印象の良さと当事者を納得させられる人格や力量が、当事者と顔をつき合わせる支援職には求められる。つきつめれば支援職自身がどのような人間であるのか、どのような生き方をしているのかというその生き様までが当事者と良好な関係を築くことができるか否かに関わってくる場合もあるだろう。

だが、まずそこまで求めるのは無理にしても、福祉職や心理職が「…してあげる」、「…してくれる」というパターナリズムから脱却し、医学的知見を含めた正しい理解を持つには、先に述べたように福祉職や心理職を養成する教育制度のあり方、再試験制度、更新制

などを新たに採り入れることをも含めて職場での研修制度を厳しく見直すことが望まれる。少なくとも障害特性を無視した一般論で障害者に対峙する心理士や、素人の感想そのままの態度で ASD 者に接する職員などに任せっきりにしておくような現状は放置されるべきではない。「『この人の人生を実りあるものにしたい』という強い意思に支えられた関係性が形成されていれば」(121、第 6 章)、「『あなた』が自分の人生を立て直し、怖いと語る世界に光を差し込ませることができるように傍らから『あなた』を支える他者でありたいと思います」(141、第 7 章)、「支援を受ける人がつねに受動的な立場ではなく、自分の人生をつくっていく能動的な主体となるよう、私たちは傍らから応援していく人になりたいものです」(160、第 8 章)というような、自分が他者に対して有意義なことができるという驕りを前提とした大仰な決意ではなく、自分よりはるかに知能の高い者も必ず存在する ASD 者には自己欺瞞にまみれた嘘だらけの自分は見透かされているのだという自覚と確かな医学的知識と人としての誠意をもって ASD 者に接すればよいのではないのか。その上で「優しい」か「酷い」か、利用者の立場に立っているのかを判断するのは、支援を受ける側である。まず、語るべきは ASD 当事者である。当事者による表象には、当事者でありさえすれば真実を語るができるのかという問題と、当事者が研究者である場合、結局外部の人間が代わって表象するのと同様の誤りに陥るのではないかという問題があった。だが、第 4 章で述べたように当事者の中でも特性は様々であり、当事者同士でも障害特性によるその困難を理解できない聴覚過敏などの例があるのだから、語るべきはまず当事者であって、支援の失敗を当事者のせいにする自称「専門家」や批判と無理解に満ちた身内などでは断じてない。表象する者としての ASD 当事者はオリエンタリズム的陥穽に足を取られるというよりは、いまだ語り始める必要に迫られている段階にあり、その特性の多様さから群れもせずばらばらに、独自に個々の特性について語るしかない。

本稿で挙げた山本の文献等は例外であると信じたいが、これらに登場する者達を反面教師として、何が本当に「対人援助の原型」(i)なのか、支援職の質の向上が一朝一夕には期待できない以上、まず身近に ASD 者がいる一人一人の人間に、誰の表象を信じるべきであるのか、誰の立場に立つことが「支援」の第一歩なのか、今一度考えてもらいたいと切に思う。

## 〈参考文献〉

[日本語文献]

- 赤松昭「コラム 不純な動機で十分 OK」田垣正晋編著（2006）『障害・病いと「ふつう」のはざままで 軽度障害者 どっちつかずのジレンマを語る』明石書店、pp.183-184。
- ハンス・アスペルガー（1944）「2 子供の『自閉的精神病質』」ウタ・フリス編著（1991）富田真紀訳（1996）『自閉症とアスペルガー症候群』東京書籍、pp.83-178。
- ハーレーン・アンダーソン、ハロルド・グーリシャン「第二章 クライエントこそ専門家である—セラピーにおける無知のアプローチ」シーラ・マクナミー、ケネス・J. ガーゲン編（1992）野口裕二、野村直樹訳（1997）『ナラティヴ・セラピー 社会構成主義の原点』金剛出版、pp.59-88。
- トム・アンデルセン「第三章 『リフレクティング手法』をふりかえって」シーラ・マクナミー、ケネス・J. ガーゲン編（1992）野口裕二、野村直樹訳（1997）『ナラティヴ・セラピー 社会構成主義の原点』金剛出版、pp.89-118。
- 池谷孝司編著（2013）『死刑でいいです 孤立が生んだ二つの殺人』新潮社（文庫版）／（2009）共同通信社
- 石川准「第1章 ディスアビリティの削減、インペアメントの変換」石川准、倉本智明編著（2002）『障害学の主張』明石書店、pp.17-46。
- 石原孝二「第1章 当事者研究とは何か その理念と展開」石原孝二編（2013）『当事者研究の研究』医学書院、pp.11-72。
- 今泉佳代子「第7章 軽度発達障害をめぐって」（a）田垣正晋編著（2006）『障害・病いと「ふつう」のはざままで 軽度障害者 どっちつかずのジレンマを語る』明石書店、pp.185-200。
- 今泉佳代子「コラム 発達のバランスの悪さを知る」（b）田垣正晋編著（2006）『障害・病いと「ふつう」のはざままで 軽度障害者 どっちつかずのジレンマを語る』明石書店、pp.201-202。
- ジョン・ヴァン＝マーネン（1988）森川渉訳（1999）『フィールドワークの物語—エスノグラフィーの文章作法—』現代書館
- ドナ・ウィリアムズ（1992）河野万里子訳（1993）『自閉症だったわたしへ』新潮社
- リアン・ホリデー・ウィリー（1999）ニキ・リンコ訳（2002）『アスペルガー的人生』東京書籍

- ローナ・ウィング「3 アスペルガー症候群とカナーの古典的自閉症」ウタ・フリス編著  
 (1991) 富田真紀訳 (1996)『自閉症とアスペルガー症候群』、東京書籍、pp.179-222。
- ローナ・ウィング (1996) 久保紘章・佐々木正美・清水康夫監訳 (1998)『自閉症スペクトル 親と専門家のためのガイドブック』東京書籍
- デービッド・エプストン、マイケル・ホワイト「第五章 書きかえ療法—人生というストーリーの再著述」シーラ・マクナミー、ケネス・J. ガーゲン編 (1992) 野口裕二、野村直樹訳 (1997)『ナラティヴ・セラピー 社会構成主義の原点』金剛出版、pp.139-182。
- キャロリン・エリス、アーサー・ボクナー「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性：研究対象としての研究者」N.K.デンジン、Y.S.リンカン編 (2000) 平山満義監訳 大谷尚、伊藤勇編訳 (2006)『質的研究ハンドブック 3巻 質的研究資料の収集と解釈』北大路書房、pp.129-164。
- 太田好信 (1998)『トランスポジションの思想』世界思想社
- 太田好信 (2001)『民族誌的近代への介入 文化を語る権利は誰にあるのか』人文書院
- 大友信勝 (2004)『福祉川柳事件の検証』筒井書房
- 尾辻秀久、村木厚子、下山晴彦、辻井正次、村瀬嘉代子、森岡正芳 (2014)「座談会 社会的支援と発達障害 2」『臨床心理学』第 14 巻第 3 号、金剛出版、pp. 307-314。
- ハロルド・ガーフィンケル (1968)「1 エスノメソドロジー命名の由来」ハロルド・ガーフィンケル他 山田富秋、好井裕明、山崎敬一編訳 (1987)『エスノメソドロジー 社会学的思考の解体』せりか書房、pp.9-18。
- グニラ・ガーランド (1997) ニキ・リンコ訳 (2000)『ずっと「普通」になりたかった。』花風社
- 片岡聡、菊地啓子 (2014)「当事者の見方から—DSM-5 の ASD 診断基準は自閉症理解への架け橋となるか？」『心理学ワールド』67 号、日本心理学会、pp.17-20。
- レオ・カナー (1943)「1 情動的交流の自閉的障害」レオ・カナー (1973) 十亀史郎、斎藤聡明、岩本憲訳 (1978)『幼児自閉症の研究』黎明書房、pp.10-55。
- 川田順造 (2001)「『悲しき熱帯』のいま—四十六年ののちに」クロード・レヴィ=ストロース (1955) 川田順造訳 (2001)『悲しき熱帯 I』中央公論新社、pp.13-19。
- クリフォード・ギアーツ (1973) 吉田禎吾、中牧弘允、柳川啓一、板橋 作美訳 (1987)『文化の解釈学 [II]』岩波書店
- クリフォード・ギアーツ (1988) 森泉弘次訳 (1996)『文化の読み方／書き方』岩波書店

木村晴美、市田泰弘（1995）「ろう文化宣言 言語的少数者としてのろう者」現代思想編集部編（2000）『ろう文化』現代思想編集部、pp.8-17。

くらげ（2013）『ボクの彼女は発達障害 障害者カップルのドタバタ日記』学研教育出版  
ヴィンセント・クラパンザーノ「第 3 章 ヘルメスのディレンマ 民族誌記述に潜む、隠蔽された自己矛盾」ジェイムズ・クリフォード、ジョージ・マーカス編（1986）春日直樹、足羽與志子、橋本和也、多和田裕司、西川麦子、和辻悦子訳（1996）『文化を書く』紀伊國屋書店、pp.93-139。

ジェイムズ・クリフォード「序論 一部分的真理」ジェイムズ・クリフォード、ジョージ・マーカス編（1986）春日直樹、足羽與志子、橋本和也、多和田裕司、西川麦子、和辻悦子訳（1996）『文化を書く』紀伊國屋書店、pp.1-50。

近藤直司、高屋敷大助（2014）「成人期の発達障害ケースに対するネットワーク支援とそのために必要な告知・説明について」『精神科臨床サービス』第 14 巻 3 号、星和書店、pp.293-300。

ジョージ・サーサス（1988）「序論 エスノメソドロジー —社会科学における新たな展開—」G.サーサス、H.ガーフィンケル、H.サックス、E.シェグロフ 北澤裕、西阪仰訳（1995）『日常性の解剖学 — 知と会話』マルジュ社、pp.5-30。

エドワード・W・サイード（1978）今沢紀子訳 板垣雄三、杉田英明監修（1993）『オリエンタリズム 上』（a）、『オリエンタリズム 下』（b）平凡社

斎藤清二「第 1 章 コミュニケーション支援とナラティブ・アプローチ」斎藤清二、西村優紀美、吉永崇史（2010）『発達障害大学生支援への挑戦 ナラティブ・アプローチとナレッジ・マネジメント』金剛出版、pp.17-43。

オリヴァー・サックス（1995）吉田利子訳（2001）『火星の人類学者 脳神経科医と 7 人の奇妙な患者』早川書房（文庫版）／（1997）（単行本）

佐藤郁哉（2002）『フィールドワークの技法—問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社

佐藤幹夫（2010）『十七歳の自閉症裁判 寝屋川事件の遺したもの』岩波書店（『裁かれた罪 裁けなかった「こころ」—十七歳の自閉症裁判』（2007）改題）

杉山登志郎（2007）『発達障害の子どもたち』講談社

杉山登志郎（2011）『発達障害のいま』講談社

ドロシー・E・スミス（1978）「K は精神病だ —事実報告のアナトミー」ハロルド・ガーフィンケル他 山田富秋、好井裕明、山崎敬一編訳（1987）『エスノメソドロジー 社

会学的思考の解体』せりか書房、pp.81-153。

ガヤトリ・C・スピヴァク（1998）上村忠男訳（1998）『サバルタンは語ることができるか』みすず書房

副田義也（2008）『福祉社会学宣言』岩波書店

高木一江（2014）「発達障害の診断と特性アセスメント、そして相談支援への展開」『精神科臨床サービス』第14巻3号、星和書店、pp.49-55。

田垣正晋「序章 脱援助と、絶えざる言い換えの努力」(a) 田垣正晋編著（2006）『障害・病いと「ふつう」のはざままで 軽度障害者 どっちつかずのジレンマを語る』明石書店、pp.11-23。

田垣正晋「第1章 社会における障害とは何か」(b) 田垣正晋編著（2006）『障害・病いと「ふつう」のはざままで 軽度障害者 どっちつかずのジレンマを語る』明石書店、pp.25-49。

高橋道子（2011）「自閉症スペクトラムの学生支援のあり方をめぐって—学生相談の現状と課題—」『精神療法』第37巻第2号、金剛出版、pp.148-153。

田中千穂子（2009）『発達障害の理解と対応 心理臨床の視点から』金子書房

田中康雄（2009）『支援から共生への道 発達障害の臨床から日常の連携へ』慶應義塾大学出版会

デイヴィッド・ナイランド（2000）宮田敬一、窪田文子監訳（2006）『ADHD へのナラティブ・アプローチ 子どもと家族・支援者の新たな<sup>たびだち</sup>出発』金剛出版

ニキリンコ「所属変更あるいは汚名返上としての中途診断—一人が自らラベルを求めるとき」石川准、倉本智明編著（2002）『障害学の主張』明石書店、pp.175-222。

ニキ・リンコ、藤家寛子（2004）『自閉っ子、こういう風にできてます！』花風社

西村優紀美「第6章 コミュニケーション教育法」斎藤清二、西村優紀美、吉永崇史（2010）『発達障害大学生支援への挑戦 ナラティブ・アプローチとナレッジ・マネジメント』金剛出版、pp.202-239。

野口裕二「第1章 集団療法の臨床社会学」野口裕二、大村英昭編（2001）『臨床社会学の実践』有斐閣、pp.1-23。

野口裕二（2002）『物語としてのケア ナラティブ・アプローチの世界へ』医学書院

野口裕二（2005）『ナラティブの臨床社会学』勁草書房



- 野波ツナ 宮尾益知監修 (2011)『<sup>アキラ</sup>旦那さんはアスペルガー』(a) コスミック出版
- 野波ツナ 宮尾益知監修 (2011)『<sup>アキラ</sup>旦那さんはアスペルガー ウチのパパってなんかヘン!』  
(b) コスミック出版
- デボラ・R・バーンバウム (2008) 柴田正良、大井学監訳 重松加代子訳 (2013)『自閉症  
の倫理学 彼らの中で、彼らとは違って』勁草書房
- 浜渦辰二「ケアの人間学」浜渦辰二編 (2005)『〈ケアの人間学〉入門』知泉書館、pp.11-29。
- サイモン・バロン＝コーエン (2008) 水野薫、鳥居深雪、岡田智訳 (2011)『自閉症スペ  
クトラム入門 脳・心理から教育・治療までの最新知識』中央法規
- 備瀬哲弘 (2009)『大人の発達障害 アスペルガー症候群、AD/HD、自閉症が楽になる本』  
マキノ出版
- 備瀬哲弘 (2011)『発達障害でつまづく人、うまくいく人』ワニブックス
- 広沢正孝 (2010)『成人の高機能広汎性発達障害とアスペルガー症候群 社会に生きる彼  
らの精神行動特性』医学書院
- フランツ・ファノン (1952) 海老坂武、加藤晴久訳 (1998)『黒い皮膚・白い仮面』みす  
ず書房 (ライブラリー版)
- 藤田結子、北村文編 (2013)『現代エスノグラフィー 新しいフィールドワークの理論と  
実践』新曜社
- アーサー・W・フランク (1995) 鈴木智之訳 (2002)『傷ついた物語の語り手 身体・病  
い・倫理』ゆみる出版
- デイヴィッド・フランシス、スティーヴン・ヘスター (2004) 中河伸俊、岡田光弘、是永  
論、小宮友根訳 (2014)『エスノメソドロジーへの招待 言語・社会・相互行為』ナ  
カニシヤ出版
- ウタ・フリス「1 アスペルガーの横顔と症候群」ウタ・フリス編著 (1991) 富田真紀訳  
(1996)『自閉症とアスペルガー症候群』東京書籍、pp.15-82。
- ウタ・フリス (2003) 富田真紀、清水康夫、鈴木玲子訳 (2009)『新訂 自閉症の謎を解き  
明かす』東京書籍
- リン・ホフマン「第一章 家族療法のための再帰的視点」シーラ・マクナミー、ケネス・  
J. ガーゲン編 (1992) 野口裕二、野村直樹訳 (1997)『ナラティヴ・セラピー 社会  
構成主義の原点』金剛出版、pp.23-57。
- 本田秀夫 (2013)『自閉症スペクトラム 10人に1人が抱える「生きづらさ」の正体』SB

新書

三井さよ（2004）『ケアの社会学 臨床現場との対話』勁草書房

宮本真巳「臨床社会学の体験と方法—精神看護の実践・研究・教育を通して—」野口裕二、

大村英昭編（2001）『臨床社会学の実践』有斐閣、pp.25-51。

村上靖彦（2008）『自閉症の現象学』勁草書房

森岡正芳、山本智子（2014）「発達障害概念の社会性 人は障害をどう生きるか」『臨床心理学』第14巻第2号、金剛出版、pp.168-173。

山本智子（2016）『発達障害がある人のナラティブを聴く—「あなた」の物語から学ぶ私たちのあり方—』ミネルヴァ書房

好井裕明（1999）『批判的エスノメソドロジーの語り 差別の日常を読み解く』新曜社

米田英嗣、野村理朗（2014）「発達障害研究の展望と意義1 生物学的側面を中心に」『臨床心理学』第14巻第3号、金剛出版、pp. 322-325。

キャサリン・コーラー・リースマン（2008）大久保功子、宮坂道夫監訳（2014）『人間科学のためのナラティブ研究法』クオリティケア

[英語文献]

Abu-Lughod, Lila.(1991).Writing against culture.In Richard Fox, (Ed.)*Recapturing Anthropology*. Santa Fe, N. M.: School of American Research Press, pp.37-62.

Albert, Bruce. (1997). ‘*Ethnographic Situation*’ and *Ethnic Movements*. Critique of Anthropology, 17.53-65.

Berry, K.,& Patti, C. (2015). Lost in narration: Applying autoethnography. *Journal of Applied Communication Research*, 43,263-268.

Billig, Michael.(2013). *Learn to write badly: How to succeed in the social sciences*. New York: Cambridge University Press.

Bochner, Arthur P. & Ellis, Carolyn. (2016). *Evocative Autoethnography : Writing Lives and Telling Stories*. Routledge.

Denzin, Norman K. (2014).*Interpretive Autoethnography Second Edition*. Sage.

Ellis,Carolyn, Adams,Tony E.& Bochner,Arthur P.(2011) ‘Autoethnography: An Overview’, Forum: Qualitative Social Research, Volume 12, No.1

(<http://www.qualitative-research.net/index.php/fqs/article/view/1589/3095> 最終  
閲覧日 2018 年 3 月 27 日。)

- Frank, Arthur W.(1995). *The wounded storyteller : Body, illness, and ethics*. Chicago:  
University of Chicago Press.
- Geertz, Clifford. (1973). *The Interpretation of cultures*. New York: Basic Books.
- Hannaford, Susan. (1985). *Living Outside Inside. A Disabled Woman's Experience.  
Towards a Social and Political Perspective*. Canterbury Press.
- Jackson, Michael. (1989). *Paths toward a clearing: Radical empiricism and  
ethnographic inquiry*. Bloomington: Indiana University Press.
- Montevo, Victor. (1993). *The Dynamics of Cultural Resistance and Transformations :  
The Case of Guatemalan-Mayan Refugees in Mexico*, unpublished Ph. D.  
dissertaion, Department of Anthropoloogy, University of Conneticut.
- Morris, Jenny. (1991). *Pride Against Prejudice*. The Women's Press.
- Reed-Danahay, Deborah E. (1997). Introduction. In D.E.Reed-Danahay, (Ed.) *Auto /  
Ethnography : Rewriting the Self and the Social*. BERG, pp.1-17.
- Warren, Kay B. (1997). Narrating Cultural Resurgence: Genre and Self-Representation  
for Pan-Mayan Writers. In D.E.Reed-Danahay, (Ed.) *Auto / Ethnography :  
Rewriting the Self and the Social*. BERG, pp.21-45.